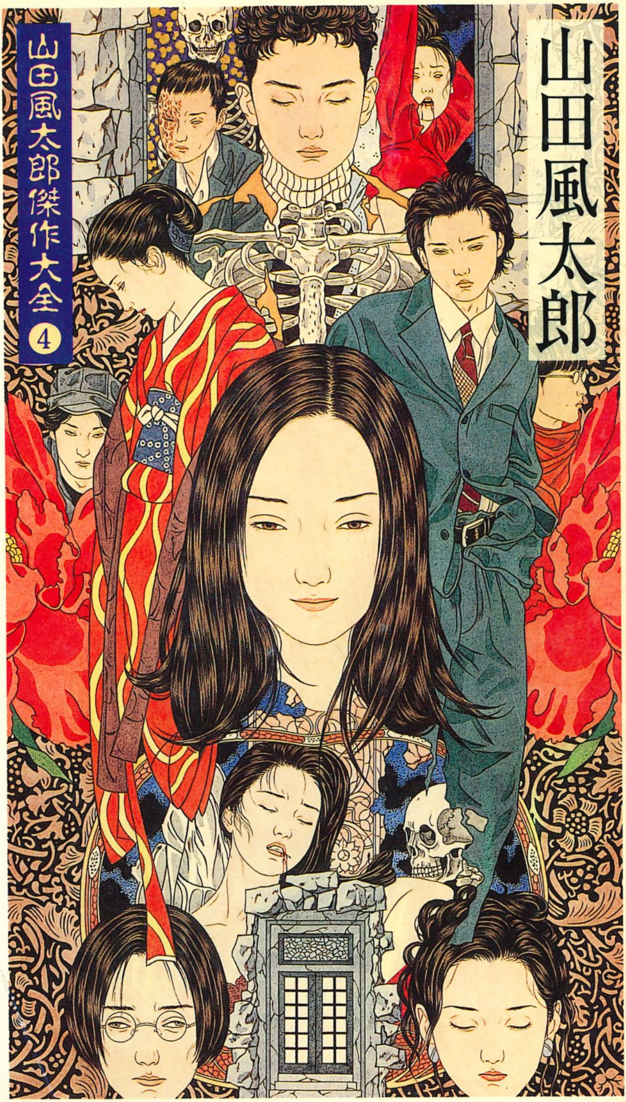
誰にもできる殺人

山田風太郎

山田風太郎傑作大全 4



廣済堂文庫

廣済堂文庫絶賛発売中！

カバーイラスト＝山本タカト
カバーデザイン＝原田幸生

誰にもできる殺人

山田風太郎傑作大全 4



廣済堂文庫

531
や7-4
543

山田風太郎

誰にもできる殺人

山田風太郎傑作大全④

廣済堂文庫

ミステリー&ハードノベルス

ISBN4-331-60532-9

C0193 ¥543E

9[illegible]331605325

定価 本体543円＋税

1920193005431

アパート「人間荘」16号室の押入れから一冊のノートが発見された。そこには、その部屋に住んだ代々の住人が書きついだ人間観察、人間荘で起きた６件の犯罪――錯覚による殺人、出来心による殺人、善意による殺人、怠慢による殺人、正当防衛による殺人、口ふうじのための殺人――の記録が綴られていた。何故に、ひとつのアパートを舞台に住人たちの間で連鎖犯罪が起きたのか？　その背後には恐るべき真実が……。

ミステリー&ハードノベルス

廣済堂文庫

山田風太郎

やまだ ふうたろう

大正11年兵庫県生まれ。東京医科大学卒業。昭和22年『宝石』新人募集に応募した「**達磨峠の事件**」がデビュー作。昭和23年「眼中の悪魔」で第２回探偵作家クラブ賞短篇賞を受賞。昭和30年代以降は一連の忍法帖シリーズで一世を風靡し、昭和40年代には『明治断頭台』『明治波濤歌』など明治ものの作品が続き、以後は室町ものに新境地を示す。近年、若い読者の間で人気復活。

誰にもできる殺人

定価 本体543円＋税

平成８年８月１日　初　版
平成10年10月30日　２　刷

著　者　山田風太郎
発行所　廣済堂出版

ミステリー
&
ハードノベルス

山田風太郎傑作大全 4

誰にもできる殺人

山田風太郎

廣済堂文庫

ミステリー
&
ハードノベルス

山田風太郎　誰にもできる殺人

廣済堂文庫

ミステリー
&
ハードノベルス

2230①

定価 本体543円+税

山田風太郎

廣済堂出版

山田風太郎傑作大全 4

誰にもできる殺人

〈531〉 や－7－4

部数

570

書店・取次店

ISBN4-331-60532-9 C0193 ¥543E

廣済堂文庫注文カード

ミステリー&ハードノベルス

廣済堂文庫売上カード

ISBN4-331-60532-9 C0193 ¥543E

廣済堂文庫	山田風太郎傑作大全 4 誰にもできる殺人	531 や－7－4
山田風太郎		

☆本カード一〇〇枚を一口として貴店様印を押し、小社までお送り下さい。貴店様の売上資料にさせて頂きます。

廣済堂出版
〒105 東京都港区芝3-4-12
営業 03(5445)1202
関西支社 06(444)5911

山田風太郎　誰にもできる殺人

山田風太郎

アパートを舞台に住人たちの間で起きた
連鎖殺人事件の裏には恐るべき真実が？

ミステリー＆ハードノベルス　廣済堂文庫

廣済堂文庫

ミステリー＆ハードノベルス

廣済堂文庫
山田風太郎傑作大全
好評発売中!!

妖異金瓶梅
十三角関係
修羅維新牢
売色使徒行伝
天国荘奇譚
叛旗兵
夜よりほかに聴くものもなし
剣鬼と遊女
青春探偵団
切腹禁止令
赤い蠟人形

ミステリー
&
ハードノベルス

山田風太郎傑作大全 4

誰にもできる殺人

山田風太郎

廣済堂文庫

目次

女をさがせ

プロローグ

寂しい雨のふる或る午後、私はそのアパートに引っ越してきた。
アパートの名は、「人間荘」といった。
だれが、こんな——平凡すぎて、あまりにも意味ふかい名をつけたのか。それにしては、これは貧しい、わびしい場末のアパートであった。おそらく、戦後まもなく作られた安普請であろう。外の板壁にぬった青いペンキはまだらに剝げおちて、枯葉をあちこちにコビリつかせたまま、腐ったような色をしていた。
玄関ともいえない玄関を入る。左側に五つ、右側に二つの部屋、その奥に便所と炊事場と二階にのぼる階段がある。ガスの出る炊事場は、このアパートじゅうにこの一個所しかないのである。したがって、各部屋部屋で食事をつくるとみえて、廊下には七輪や炭俵や野菜などがゴタゴタとつまれて、そうでなくてさえ、まひるからでもうすくらがりの足もとは、よろめくよ

うにして歩かなければならない。
いちばん奥に階段がある。途中のせまい踊場から折れて二階にのぼる。この部分だけが、二階の天井までつつぬけだ。階段の手すりはひどくいたんで、グラグラとうごき、あちこちスッポリはずれそうだった。
二階には九つの部屋がある。階下の便所と炊事場にあたる二階が部屋になっているから、二つだけ多いのである。
私は、その階段のすぐまえの十二号室に入った。それが私の借りた部屋だったのだ。あかちゃけたたたみのうえに、私のトランクをおいて、それに腰をかけた。
どういうわけか、アパートは、まるで人間がいないかのようにヒッソリとしていた。くびをたれていると、窓の外の雨の音ばかりが部屋に満ちる。……となりの十一号室のひとも留守なのだろうか、いまドアの外の標札に「志賀(しが)悠子(ゆうこ)」とかいてあるのをみたが、コトリという音もしない。
じっとそうしていると、遠い旅からかえってきたような疲労の底から、やがてほの明るい安らぎの思いが心をひたしてきた。……顔をあげると、雨は霧のように細くなって、やがてあがってゆく気配である。
私は、フと立ちあがって押入れをあけてみた。なかはむろんガランドウだが、湿っぽい冷気

のなかに、なにかなまぐさいような匂いがする。この部屋に、私のまえに住んでいたのは、どんなひとであったろう？
ふと、私はうすぐらさになれた眼をあげて、押入れの奥の壁に妙なものを見つけた。隅にほそくあらわれた柱と壁のあいだがひどくはなれて、そこから黒い三角形がチョッピリのぞいているのだ。
手をのばして、ひきずり出してみると、それはノートの隅ッこだったことがわかった。厚い一冊のノートが、その割れめにさしこんであったのである。
窓ぎわにもっていって、パラパラとめくってみると、その厚いノートには細字でビッシリと何やらかきこんである。二三百頁もありそうなノートの余白は、ほんの十枚くらい残っているだけだった。
まんなかあたりに、「新しき住人、ようこそ」という文字がみえた。またその前後に、「第三の間借人」「第四の間借人」などという文字もみえた。そして、あちこちと、インクの色も書体もちがうようである。
「おや？」
私はいちばんはじめを見た。
「新しき住人、ようこそ」

と、ここにもある。そして三十枚ほどめくると、「第一の間借人」とかいてあった。これは、どうやら、この部屋に住んだ代々のひとの書きのこしていったものらしい。……世にも物好きな、そしておかしな連中があったものである。

私はトランクを窓ぎわにはこび、それにもういちど腰をおろして、その黒いノートを第一頁から読みはじめた。……読んでいるうちに、しだいに私の瞳はひろがってきた。

それはなんというふしぎな記録であったことか、そうして、なんという哀しい、恐ろしい、涙と笑いと血にいろどられた人生の記録であったことか！

私は、じぶんの入ってきたのが、まさに「人間荘」であったことを知ったのである。

1

新しき住人、ようこそ。

ぼくはこの部屋の第一の間借人である。むろん、第一といっても、このアパートが出来て最初の間借人というわけではない。管理人にきくと、出来てから六七年たっているそうだが、天井は雨もりだらけ、廊下は泥と油にぬれひかり、階段の手すりにいたっては、芝居の小道具然として、移動自由といってもいいくらいのありさまだから、この部屋だって、来たりまた去った人は何人あるかしれやしない。……ただ、こんな手記をのこす一番目の男という意味だ。もっとも君が、第二の記録者になるかどうかは、むろん君の自由である。

君はどんなひとなのだろう？　……なぜか君は、ぼくに似た人であるような気がする。十カ月まえ、ここに来たときのぼくのように、不安と希望にもえた貧しい学生のような気がする。だから、ぼくは君に、このアパートの人々についての予備知識をふきこんでおいてあげたいのだ。……そうしてまた、この十カ月のあいだにぼくが知った人間というものの予備知識を。

いいや、ほんとうはそうではない。ぼくはただだれかにしゃべりたいのだ。けれど、ぼくはこれを公表するわけにはゆかない立場にあるし、また明日いそいでこのアパートからゆくえも知れぬ旅に出なければならない運命にある。心は暗く、気はいそぐのだ。それにもかかわらず、ぼくはこれを書きのこしてゆかずにはいられない。——その半面、どうぞこれがだれにも発見されないようにと、押入れのひびに押しこんでゆくつもりなのだが。

ああ、ぼくはこんなことをクドクドかいている余裕はないのだ、ただもし君が読んでくれさえしたら、このぼくの複雑な心情を理解してくれるにちがいない。

さて、何から書いてゆこうか。

十カ月まえ、ぼくはここに、貧しい、けれど希望にもえた夜学生として入ってきた。ぼくの田舎の家はまずしかったが、ぼくは学問をしたかった。それで、はじめ或るオモチャ製造工場の配達係にやとわれて、夜タイピスト学校にかよった。それから或る製鋼会社の英文タイピス

トに採用されて、いま夜はT大学の第二経済学部に通えるようになったのだ。苦しくはなかった。すべては計画どおりであった。

ただ、少し寂しいことは事実だった。勤め先ではほんとうの友人はできなかったし、夜学では、ぼく以外の人はみんな疲れていて、話すらも交わす余裕はなかった。

ここにきて、うれしかったのは、となりの十一号室に志賀悠子さんの住んでいることを知ったことだ。

君はもう見たか、美人だろう。聖処女のようだろう。

ぼくはいつかバイブルを売りに来た西洋人の若い尼僧をみたことがある。そのときはじめて西洋に「聖処女」という思想の生じてきたゆえんを知った。その尼僧は、それほど人間ばなれのした透明な清麗さをそなえていた。しかしぼくは、同時に日本に「聖処女」という思想のなかったこともなるほどと思った。

……ところが、ぼくははじめて見たのだ！　それに値する日本の女性を！

もっとも、志賀さんは、年はぼくより六つ七つ上だろう。しかし、年など問題ではない。むしろ軽はずみな二十歳前後の娘には決してみられない、沈んだ、やさしい、母性的な美しさがあのひとにある。ぼくは、ひと目みたときから、あの汚ない廊下にひれ伏したいような気持になった。

よくあんなひとが、こんな貧しいアパートに住んでいたものだ。まさに、泥中の蓮だ。いいや、厩のマリアだ。……あのひとは、幼稚園の保母をしているということだ。しかし、夜はおそい。ときには帰らない夜もある。どこか造花の夜業をしているうちがあって、志賀先生は、ときどき貧しい子供たちをたすけるためにそこへ働きにいっているらしい。

さけび声をたてたくなるくらい感動しながら、そのわりにぼくは志賀さんと話を交わしたことはない。彼女は、ほのかな笑顔であいさつくらいはするけれど、口の重いほうらしいし、ぼくはぼくで、彼女と顔を見合わせただけで、全身がぼうっと靄につつまれたようなかんじになったり、息がつまったりするのをかくすのに懸命だったのだ。

彼女とひとことでも交わした日は、それだけで心が洗われたようで、ヒューマニスチックな気分になった。人々がみな善人にみえ、また悪い奴には憐愍（れんびん）の念を起させた。

この二階の住人たち――八号室の雑誌記者青沼君のつつましやかな生活、九号室の人形づくりの木室老夫妻の脱俗の心境、十号室の脇坂氏の古本蒐集という高雅な趣味、廊下をへだてて十三号室の盲人のきのどくな運命、十四号室の座光寺君の洗練された洋服、十五号室の椎名さんの謙虚さ、十六号室の仁木のつむじまがり。――すべてに神の祝福あれ。

このなかで、いちばんはじめに口をきき出したのが、十五号の椎名さんだ。

まえはきっといい男だったにちがいないが、まだそれほどの年ではないのに、ひどくやつれ

て、おびえたような眼をしている。ひとをみればおじぎばかりしている。毎日、埃だらけのくたびれた洋服の背をまるくして、セカセカとどこかへ出かけてゆく。きっと職さがしだろう。……とぼくは思っていた。

それが、そうでないことがわかったのは、或る雨の夕方だ。彼はオドオドとぼくの部屋に入ってきて、週刊雑誌でもあったら貸してくれといって、それからなんとなく身上話になった。

「どうです、仕事はありましたか」

と、ぼくはきいた。というのは、どんな時代だって、男一匹、働く仕事がないはずはない、ぼくをみるがいいと、椎名さんを歯がゆく思っていたからだ。

すると、椎名さんは、うつむいて、小さな声でこたえた。

「ぼくは、女房をさがしてるんです。」

「へえ？」

ぼくはマジマジと相手を見つめた。しおたれた髪、たえずキョトキョトとして憑かれたような眼――学生のぼくにも、なるほど奥さんににげられそうな顔だと、あらためて感服してながめられた。

「そうですか？　いやどうも何かをさがしていらっしゃるように見えたんですが、そうでしたか？　いったい、どうしたんです？」

椎名さんは、はっとしたように眼を空にそらしたが、やがて肩をおとして、

「ぼくは、実は軍神なんでしてね。……」

「へえ？　グンシンってえと……」

「神さまですよ。ぼくの故郷には、ぼくの墓が立っているのです。噫軍神椎名大尉之墓、とね」

「あなた……じゃあ、死んじまったのですか？」

「ええ、こうみえて、神風特攻隊のなれのはてで……当時の新聞に、二階級特進の軍神としてはなばなしく出てしまったんだそうです。それが、こうしていまも生きているんです。つまり、不時着して、捕虜になって……戦後かえってきたら、出征まえ、一カ月しか甘い夜をすごしたことのない愛する妻は、どこかに行方不明になっちまっていたんです。……」

「行方不明？　どこへ？」

「それがわかってりゃあ、こうして足を棒にして探してやしませんさ」

ぼくに、あたまをかくのを忘れさせるほど、ふしぎな常人ばなれした眼つきで、椎名さんはつぶやくのだった。

「ねえ、君、どっかで……色白の、まるい頰っぺたをした若い母親が、二つくらいの女の子を乳母車にのせてあるいているのをみたことはありませんか？　それがぼくのどっかにいっちま

った女房と子供なんですが。……」

2

「あはははは、デタラメだよ。嘘っぱちだよ」

と、階下の二号室の高力さんは、ほそい金属的な声で笑った。

「かんがえてもみたまえ。愛する妻と二つくらいの女の子だって？　出征するまえ一カ月ほど暮しただけの女房から生まれた子供なら、いま二つくらいのわけはないじゃあないか」

「どうもおかしいとはぼくも思いましたがね」

あれから二三日たった或（あ）る夜、夜学からかえってきてからである。

ラジオを貸してくれといってやってきた高力さんとぼくは話した。高力さんは小説家だそうである。高力雨太郎、どうもきいたことがないが、実際にぼくは、分厚い原稿持参で訪問をうけて、ながながと悲壮な声で朗読をはじめられて弱ったことがある。面白いにも、面白くないにも、ねむくってねむくって、死ぬ思いだったのだ。

「どういうわけかね。このアパートには、どうもオカしいのが多いよ」

と、高力さんはたばこを輪に吹いた。ぼくからみれば、高力さんだってオカしい組の旗がしらだ。

「そりゃあね、あの椎名とかいう男の話じゃない。となりの——十三号室の盲人さんの話だよ」

「あの——山名とかいう——」

「そう。だいぶまえ、ぼくは山名さんからその話をきいたんだが、その話をあいつもきいたんだろうね。あの盲人さんは、しゃべりたがらないたちだから、ひょっとすると、ぼくが話をきいたとき、となりで立ちぎきしていたのかもしれん」

山名さんは、盲人だ。生まれついての盲人でないことは、その動作がまだだいぶ不自由なところからもわかる。といって、ごく最近盲人になったのでもないらしい、からだつきからみるとまだ三十代だが、顔は半分やけただれ、ひきつって、年のころもわからない。あんまをしているわけでもないし、何をして食べているのか知らないが、少々の貯えはあるとみえる。高力さんのいうように、沈黙家どころか不具者特有のぶきみな感じがあって、それにぼくの十二号室と山名さんの十三号室は、廊下をへだてて東西両端にあるから、ふだん話したこともない。

「へへえ、ひとの話を借用したんですか。ひどいひとだな」

「借用もいいが、借用のしかたに空想力が足りないね。剽窃（ひょうせつ）するには、原作者以上の空想力がなければ、剽窃家の資格はないんだが」

「というと？」

「実はぼくも、山名氏の話を借用しようと思ってるんだよ。小説をかこうと思ってるんだよ。きみ……A新聞で、百万円懸賞で長篇小説を募集しているのを知ってるだろ？」

「さあ、ぼくはその方にはサッパリ能がないので、記憶もありませんが……」

「百万円だ。百万円ありゃ、ちょっとしたうちが買えるからな。そうしたら、田舎から女房を呼んで、こんなボロアパの独身生活にサヨナラだ」

「ボロアパ？」

なるほどこのひとは、空想力旺盛だ。もう当選にきめている。ぼくはひとごとながら、少々しんぱいになった。

「高力さん、ぼくは小説なんてものには門外漢で、こんなことをいうと笑われるかもしれませんがね。山名さんの話というと――山名さん、特攻隊だったんですか？」

「本人はそういうがね。不時着して、捕虜になった。あの顔のやけどは、そのときに受けたものだっていってたよ」

「そうですか。そりゃきのどくですな。きのどくですけれどね、そうしてもどってきて、行方不明の妻子をさがす――すこし話がありふれすぎていやしませんか？　それで長い小説になるんですか？」

「うん、きみ、なかなか話せるじゃないか」

と、高力さんはひざをのり出した。ぼくは、しまった、また小説の話か、とほぞをかんだが、もう間にあわなかった。

「それだけじゃ小説にならんさ。そこが空想力さ。いいかね、このありふれたプロットから発して、堂々たる人間の悲劇を描くんだ。ぼくは男の運命と女の運命を、縄のごとくよりあわせてゆこうと思う。いいかね？」

「そういうわけでもありませんが。……」

「へんないい方だな。いいかね、男は学徒兵さ。青春をあげて祖国の難におもむいた群像の一人さ。この群像を無邪気に描けば描くほど、悲壮感があるね。その特攻隊の基地ちかくにひとりの少女が住んでいる。そして彼と彼女の魂が相寄るんだ。そのもとは、事故のために重傷をうけた彼が、偶然のことからその娘の輸血で救われる事件なんだが、そこからふたりの恋がはじまる。おさない、けれど神々しい恋がね」

「……」

「出撃前夜、少女ははじめて彼に処女をささげる。彼に処女をささげることは、すなわち祖国に処女をささげることさ。そして、その翌日、彼は嬉々として蒼空の果てへとび立ってゆく。……」

「……」

「ところが、男は死なない。不時着して、重傷をうけて、捕虜となる。自殺をはかってとめられ、アメリカの収容所に送られる。そして、日本が降伏する直前に、必死の冒険を敢行して脱走する。それ以後の苦労で、眼をわるくしてしまうんだ。しかし、そこで一神父に救われて、かくまわれる。それから、十年――彼は、祖国とあの少女を恋うて、日本にかえってくる。

……」

「山名さん……そんなひとだったんですか？」

「ううん、まあ、これに似たようなことはしゃべったがね。これだけじゃつまらん。これからはぼくの空想さ。そこで、両人がいろいろとスレちがって……」

「女はどうなったんです？」

「や、のり出してきたね。そうこなくっちゃ、話し甲斐がない。小説のプロットを、書くまえにしゃべると、情熱が蒸発してしまうから、ぼくは出来るだけ避けたいんだが、ほかならぬきみのことだから、内輪の話だがおしえてあげる。女は……淫売婦になってるんだ」

「そりゃひどい」

「そこがぼくの辛辣（しんらつ）なる人生観のあらわれさ。彼女はひそかに、じぶんは軍神の妻だと思っている。しかし彼女は軍神自身ではなかったのさ。だから、敗戦後の濁流のなかに、苦しみ、疑い、あえぎ、もだえて、結局堕落してゆくのだよ」

「――男は？」

「男も結局、敗残の身をふるさとへはこんでくる。じぶんを軍神とする墓のまえに佇む。小学生たちがまわりに遊んでいる。ときどき、墓標の文字を愛らしい声で読む。彼は、日もすがら、そこに立ちつくしている。……」

　こういうときは、高力さんもほんものの眼つきになっている。いや、ほんものかどうか、ぼくは小説家を知らないが、ほんものの小説家も、きっといまの高力さんのような眼つきになると思う。

「それで？」

「その幻の墓のとおりに、そこで死ぬんだ」

「しかし、女は――」

「おなじころ、女も、病毒にくされはてて一病院の窓から、まっかな落日を見ながら、息をひきとってゆくんだ。眼に、曾ての彼女の神を見つつ、耳に、曾ての彼女の神話をききつつ。

……」

「そして？」

「そして、新聞には、住所姓名不明の男が、軍神云々の墓のまえでゆきだおれて死んでいたことが三行で出る、女のことは、一行も出ない。――終り」

「どうも、あんまり悲劇的ですが……ちょっと、いいですね。高力さんを見直しましたよ」
「ばかにしちゃいけない。どうだ、いいだろ？　さあ、おれは書くぞ。百万円だ。百万円もらわなくっちゃ、おれ自身がゆきだおれになりかねない。……」
高力さんが、いきなり大俗物に還元したので、ぼくはガッカリした。
「それじゃあ、きみ、ラジオを借りてくぜ」
「ラジオ……ああ、その用でしたね。そりゃかまいませんが、高力さん、ラジオなんかきいてちゃあ、小説がかけないでしょう。それとも何かその小説かくのに、今夜の番組が必要なんですか？」
「とんでもない。ジャズをきくんだよ」
ジャズといまの小説とは、あんまりかけはなれているようだ。
「なぜ？」
「いいや、ただ大騒音が必要なんだ。小説かくためにね」
高力さんはながい髪をかきあげ、急に椎名さんみたいにおびえた眼つきになった。
「毒を以て毒を制するためさ」
「なんのことです？」
「ぼくの部屋にきて見りゃわかる」

彼は、ぼくの机の上の置時計をちらっと見た。
「もう、そろそろ、その時刻だろう。きみ、知りたかったら、ぼくの部屋にきてみたまえ。そして、あの声をきいてみたまえ」
「あの声？」
ぼくは、けげんな顔で、高力さんといっしょに廊下を出た。
階段のところで、下からあがってきた山名さんに逢った。山名さんは、盲人のくせに、すこしまえから眼帯をつけていた。このひとは、いつもこの時刻、便所にゆく。このアパートは階下にしか便所がないので、達者な人間でもわずらわしいが、まして盲人では、ほんとうに一苦労だろう。
夜ふけのことではあり、半顔（はんがん）やけただれて、醜怪といっていい山名さんの顔は、ふだんならゾッとして身をひくのだが、今夜はさっき高力さんの話をきいて、シメッぽい気持になっていたところだから、ぼくは山名さんの手をひき、グラグラする手すりをささえてやった。

3

小説家高力雨太郎氏の二号室は、玄関を入って左側、一号室とならんでいる。百万円がまだもらえない現在では、ぼくの部屋よりもっと貧乏くさい。だいいち、ラジオもないし、本だっ

て、夜学生のぼくなんかよりもっと少ない。

しかし、机の上にはたしかに原稿用紙がひろげてあるし、柱には「一日三十枚！」とかいた紙と、一ト月ほどあとの月日をかいた紙がはりつけてあった。一日にかくべき小説のノルマと、おそらくあの懸賞小説の〆切の日付だろう。

「あの声？」

と、ぼくはいいながら坐ろうとした。

「しいっ……もうはじまっている！」

と、高力さんは手をふった。

「なにが？」

「しいっ……あの声をきけ！」

ぼくはそのときふしぎな声をきいた。

はじめは、犬のうなり声かと思った。それはひくくむせぶようで、やがて波打ち、たかまり、ヒーッというようなさけびでとぎれる。それからまたひくくすすり泣きがはじまり、あえぎが高潮してゆく。……女の声だ。

それは、じっときいていると、こちらの胸をかきむしり、下腹部を充血させ、あたまをジーンとしびれさせてくる声だった。

はじめてきく、そんな異様な女の声であったが、それが何を意味するのか、たちまちぼくにはわかったから、人間の本能とは恐ろしいものじゃないか。

「きみ、わかるか？」

と、高力さんがひきつッたような笑顔をむけた。

「三号室ですね」

ぼくのあたまに、三号室の夫婦の姿がうかんだ。

たしか、刈部といった。亭主は何をしているのか、えたいのしれない男だが、小柄だがあぶらぎって、精力絶倫といった感じだ。声まで精力にはねかえるようで、ゲラゲラと金歯を出してよく笑う。

そして、細君の方は——これは大柄で、まっしろなツヤツヤした肌をしている。なんか、眼からも唇からも、ポタポタと液汁がしたたりそうな女だ。まず、美人といってよく、ムッチリした腰をひねってあるく姿をうしろからみていると、へんにあたまがモヤモヤとしてくるような女なのだが、最初このアパートに引っ越してきたとき「あら、この学生さん。誰々に似てるわネ、すてきじゃないの！」と学生映画スターの名をあげて、大声で笑われて、赤面してにげ出したことがある。ウルサ型の、悪口の好きな一号室の管理人の奥さんが、いつか部屋代をあつめにきたとき、「あなた、あの刈部さんの奥さんはね、パンパンあがりだから、用心しなく

っちゃいけませんよ」とおせっかいな忠告をしてくれたが、たしかにそんな前歴はありげに思われる。

急に物凄い音でジャズが鳴り出した。高力さんが、ラジオをソケットにつないだのだ。進駐軍むけの放送だった。

「高力さん。……」

「きみ、あっちをききたいかね？　ききたけりゃ、きこえるさ。ホラ。……」

なるほど、ジャズを縫って、犬の遠吠えのような声がきこえる。

「ジャズくらいでへきえきする手合か。いっそう盛大になるくらいのもんだ」

「ま、毎晩ですか」

「毎晩、少なくとも三回は、ああいう声をきかされるね。きみ、きみは、そんなノボせたような眼つきをしているが、それもまあ十日が耐久力の限度さ。実はぼくも、はじめは壁にヘバリついてきいていたもんだ。が……そのうちに降参する。ヘトヘトになるよ」

高力さんは、虚脱したような眼つきをしていた。

「独りもんの身にもなってみるがいいと、シャクにさわってね、ドアを音をたててあけたり、しめたり、アクビをきかせたり、奇声を発してみたり、実に惨澹たる努力をしたが、ジャズでさえあのとおりだから、ききめのあるはずがない。たまりかねて外にとび出して、夜風のなか

をホッツキあるいてみても、金がなけりゃ、悲惨のきわみさ。もうおさまったろうと、足を棒のようにしてかえってくると、また第二回めがはじまる。……そのうち、どうもあっちは、おれにきかせたがってさわいでいるらしいということがわかってきた」

「まさか？」

「いや、そういう奴なんだ。あの刈部って野郎は」

「なんのためにです？」

「なんのためだかわかるもんか。だから、このボロアパには、オカしいのが集まってるというんだ。いいかい？　となりには、おなじ一部屋に三人も子供がねているんだぜ。……かんがえられるのは、おれをナヤますために、あの声をきかせるってことだね。そういう奴なんだ、あいつは」

「あなたになんか怨みでもあるんですか？」

「ばかばかしい。あの声で敵討ちされる奴があるもんか。あの刈部って奴は、動機不明で、ただイヤガラセをしてうれしがる性質があるらしい。腹のへった奴のまえで御馳走をパクついたり、貧乏人のまえで札束を勘定してみたり——きみもヘタにつき合うと、そんな目にきっとあわされるから、そのとき原因をかんがえて、くよくよハンモンしたりしないがいい」

「いや、べつにおとなりとつき合いたいとも思ってませんが——刈部さんはそうとして、奥さ

んの方はどうなんです？」
「あの声さえ出さなきゃ」
と、高力さんはくびをかしげて、ラジオをとめて、
「おさまったらしいや」
と、ボヤッと笑った。
「なかなかいい女だが」
そのときはじめて扉のまえで、かん高くさけびつづけている声がきこえた。
「やめて下さい！　真夜中にガンガン、ジャズをわめかせて……公衆衛生を知らないんですか！　パトロールカーをよびますよ！　高力さん！」
「ホイ、やめました、すみません」
と、高力さんはくびをすくめた。
「ほんとにイヤになっちまう。公衆衛生というものを知らないヒトばかりで！」
声は扉をはなれていった。
「公衆衛生か」
と、高力さんは笑った。
「あの女の、もっともトクイとする言葉だな」

「管理人の奥さんですか」
「このアパートの金棒ひきさ」
と、吐き出すようにいった。
ぼくは管理人の細君の、狐の剝製みたいに冷たくかわいた顔をあたまにえがいた。あのひとは、ぼくも少々おっかない。口をきけば、かならずどこかにアテコスリか、ひとの悪口が入る。口をきかないときは、ジロッと舎監みたいな眼でみる。きくところによると、投書狂でもあるそうだ。まだ三十前後とみえるのに、いまからああでは、将来が思いやられる。
「あれとこれに挾撃されてるんだからね、エライ部屋に入ったもんだ。きみ、しばらく代ってくれんかね」
「いえ、結構です。そんなことになったら、ぼくは一週間でノイローゼになっちまいますな」
「冗談じゃない。こりゃまったく衛生問題だな。あれだけのジャズでもまだ制圧できないとなると、事態はシンコクだ」
高力さんは、ほんとに笑いごとではないといった顔つきだった。ぼくは、やっと彼が小説をかくためにラジオを借りていった理由を納得した。いかにもこれでは軍神の悲劇がかけるわけはない。
「音響というのは、近代文明のひきおこした重大なる害毒の一つだとはふだんから考えていた

んだ。ただでさえ、ラジオの声、警笛、拡声器、ジェット機の爆音のために、われわれ芸術家は、音響恐怖症になっているんだからね。……しかし、あの原始的な声のために、男一匹、野タレ死させられようとは思わなかったよ。チキショウ、百万円ありゃ、ぼくも軽井沢に別荘でもたてて、古今の傑作をかいてみせるんだが、あの声のために、ヘタするとその百万円が手に入らんかもしれんぞ」

高力さんはうめいて、それから襲いかかる不安をはらいのけるように顔をあげて、いい出した。

「声といえば、きみ、妙な話があるんだよ」

「なんですか？」

「あの山名さんがね、声で女をさがしてるんだ。あの出撃前夜、処女をささげてくれた女をね」

「声で……ああ、あのひとは盲人だから！」

「そうなんだ。そしてあのひとは、その女がこのアパートの中にいるといっているんだよ」

4

ぼくはびっくりした。

「えっ、あの娘さんが！」

「もう娘じゃなかろう。あれから十年たっている。……」

「で、それは誰なんです？」

「それがわからないというんだよ」

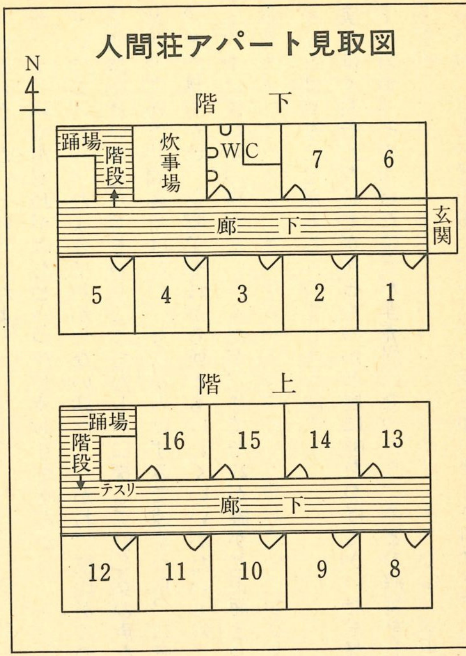
「だって、いま声でわかったといったじゃありませんか」

「そいつが、わかったようでわからない話なんだがね。彼氏がこのアパートに来たのは、まったく偶然だというんだ。しかしここでたしかに探している女の声をきいた。決して外からブラリと入ってきた訪問客ではない。なにかのはずみで遠くから、二三度きいた声――声というより、その息づかい、余韻、それから何ともいわくいいがたいもの――それがたしかにこのアパートの中に住む女の声だというんだが、さてそれが誰かと正面きってきくと、もうわからないという」

「そんなばかなことがあるものでしょうか？」

「実はぼくもそんなことがあるものかと眉に唾をつけてきいたんだが。……十年前か。そのあいだに女が淫売婦になったり、のどの病気をして声の性質が変ったりすると……」

「おいおい、女が淫売婦になったというのは、ぼくの創作だぜ」



「あ！　そうか。しかし、女の名は？」
「その娘とおなじ名はこのアパートの中の女にない。なにかの事情があって変名したらしい。実はぼくだって、高力雨太郎という名は姓名判断でつけたペンネームなんだが……」

「女のほうで、山名さんをみてもわからないんですか？」
「あんな顔になっちまったからね。それに、変名するような事情があったとすれば、それは同時にむかしの恋人をみても知らない顔をしなければならない事情だったかもしれない」
「……」
「おいおい、いやにムキになって考えてるじゃあないか。なんだか、あいまいな話なんだ。もっとも山名さん自身もはかばかしく話をしたわけじゃあないが、――ぼくも詳しくはきかなかった。これは小説には使えないと思ったからね。百万円に関係ないとなると……」
「どうして？」
「そんな夢みたいなことは、小説にはつかえないよ。きみは小説というものをあんまり知らないらしいからわかるまいが、声で女をさがす、しかも眼のまえでしゃべられてもわからない、その声が春の逃げ水みたいに逃げてゆくなんて話は、ちょっと非現実的すぎてね。……」
「そうでしょうか？」
　ぼくは、なるほど小説を知らない。しかし、高力さんの創作より、もっとこの世にあり得る話のような感じがした。
「高力さん、ひとつその女がだれか、ふたりで考えてみようじゃありませんか？」
「おや、いやに身を入れたものだね。そんな必要はないよ。一ト月もすりゃあわかることだ。

もしその話がほんとうだとすると――」

「なぜ？」

「山名さん、このごろ眼帯をつけているだろ？　いま医者にいってるんだそうだ。これが名医らしくってね、あと一ト月もすると、一方の眼だけは何とかおぼろにでもみえてくるかもしれないといっていたもの。……」

ぼくは、山名さんにはわるいが、少々ガッカリした。がすぐに気をとりなおして、

「それならいっそう面白いじゃありませんか。一ト月あとにこのクイズの解答があたえられるんだから、いまふたりで考えてどちらがあたっているか――」

「そこまで熱心なら、やってみるかね。貴重な執筆時間をとられることは、実は身をきられる思いなんだが……」

と、高力さんは大流行作家みたいにもったいぶって、ぼくを苦笑させた。

「このアパートにいる女ね。いったい何人かしら？」

「高力さん、先ず年ですよ。終戦直前二十歳まえ――ですね、その話だと――それから十年たって、いま三十前後の女――」

「そうなるな。では、一号室から」

と、いいかけて、高力さんは笑い出した。

「よしてくれよ、だから、こんなクイズはぼくの創作意欲を喪失させるじゃないか」

「どうしたんです？」

「一号室にはあの公衆衛生夫人がいるよ」

「あ、あのひとも――そういえば、そんな年ですね」

たしかにそんな年ではあるが、あの蒼空の果てに死の翼を翔(かけ)る若い学徒兵に、美しい血と処女をささげたという娘は、ひからびた狐のような管理人の関夫人の印象とはあまりにもかけはなれていた。

「それじゃ、三号室は」

「あの声か」

ふたりは急に眼をつむってしまった。ぼくのあたまに、あの白いムッチリしたからだと、ポタポタと滴るような黒い眼とまっかな唇が浮かんだが、高力さんのあたまにも同じものが浮かんでいたことにまちがいはない。

「まえは……パンパンだったっていいましたね。……」

とぼくの声はかすれた。

「だとすると、おれの小説にちょっと似てるじゃないか」

「こいつは保留」

と、ぼくはいった。

その刈部の細君の影像も、あの純情な娘の幻と縁遠いものであったが、なぜかそれをむげに切りはなせないふしぎな男の心理がふたりの胸によどんでいた。

「四号室の津田君は独身で、五号室の日下部の奥さんは——ありゃどうみても四十すぎですな」

「このアパートで関の細君と張り合うただひとりのチャンピオンだ。その恐怖性に於てね」

「次に廊下の向う側にうつって、六号室の多賀嬢は——おや？」

「おやもへちまもない、ありゃまだ二十歳すぎだよ。七号室の曾谷氏もひとりぐらしだし」

「それじゃ二階にのぼって——八号室の青沼君も独身、九号室の木室老夫妻、いるいる、あその娘さん。——」

「まさに三十娘だね、いつも飢えたような眼をして、そのうちぼくが何とかあのオールドミスの煩悩をしずめてやろうと思っているんだが」

「名はたしか環さんといいましたね」

ぼくは、銀ぶちの眼鏡をかけた、冷たい、いかつい女の顔を思い浮かべた。

「女子大あがりってことを本人とくいなんだから、その学校を調べりゃ、そのまえどの女学校を出たか、わかるだろう」

「よし、こいつも保留と。次十号室は脇坂さん、ここには、本だけあって、女ッ気はないと。それから、十一号室。——」

といいかけて、ぼくは息をのんだ。十一号室は、あの「聖処女」志賀悠子さんだったからだ。

ふたりはだまって顔を見合わせた。年も合う。あの殉教的な恋をした娘のまぼろしの顔が、すうっと志賀さんの顔に重なった。

「……しかし、なぜあのひとが山名さんに気がつかないのだろう？　いくら顔がやけただれていたって……」

「あのひとかどうかわからないよ。しかし、あの志賀さんにはなにか神秘の靄がかかっているね」

同感であった。

「まあ、さきへゆきましょう。十二号室はぼく、十三号室はその山名氏、十四号室の座光寺君と十五号室の椎名さん、十六号室の仁木さん、いずれも独りですね」

「それで結局容疑者はどうなるんだ？」

「容疑者はひどいな。尋ねびとですね。それはまあ性と年齢からいえば、一号室の関夫人、三号室の刈部さん、九号室の木室環嬢、十一号室の志賀悠子さん。——」

「四人か。そのうち、もっとも可能性のあるのは——」

高力さんはふっとだまって急に耳を覆った。

三号室からその刈部夫人の、例の歯ぎしりしたいようななまめかしいあえぎの第二波が、ふたたびたかまってきたからである。

5

二三日のうちに、ぼくは事に託して——山名さんの手をひいて階段をのぼってきたついでに、その部屋に入って話しこんだ。

「どなたか、さがしていらっしゃるそうですね」

「高力さんからきかれましたか」

と、山名さんは、眼帯に覆われた顔をひきつらせて、声もなく笑った。みればみるほど恐ろしい顔だった。

「やはり、しゃべらなかったほうがよろしかったようだ」

「なぜですか？　そのひとは、このアパートにいるということじゃありませんか？」

「います。たしかにいます。二三度、たしかにその声をきいたことがあるのです。……しかし、つかまえようとすると、その声はかすかな羽音か、古い記憶の影か、忘れた夢のようににげ去ってしまったのです。きっと、あのひとの声は変っていて、なにかのはずみに、じぶんでも知

らないで出した声を私がきいたのでしょう」

「そのひとは、どうしてあなたの顔を——いや、名を知っていて、だまっているのでしょう」

「忘れてしまったのかもしれません。むりもない、私は死んでいるはずの人間なのですから」

山名さんは寂しい笑いをもらした。

「しかしあなたは、どうして声をはりあげて、そのひとの名を呼ばないのです？」

「私にその資格はありません。私は恥ずかしい過去のもちぬしですから」

「捕虜になったということをいうのですか。あの戦争では日本人はみんな捕虜になったようなものですよ」

「いいえ、そればかりではありません。私は、そのひとに対して恥ずかしいのです。私に血と涙と、そしてすべてをあたえてくれたとき、あのひとは私を神とみていたのです。その想い出をやぶりたくないのです」

「じゃああなたは、なぜそのひとをさがすのですか？」

「やがて、この眼があきます。私はただひとめだけ、そのひとの姿をみて去りたいのです。私は偶然このアパートに入ってきて、そのひとがここにいることを知りました。神さまのおこころとしかいえません。だから、神さまは、せめてそれくらいのことを私にゆるしてくれるでしょう」

「山名さん、そのひとはどんな顔をしていたんですか？」

「はい、まつげのながい、まるい、愛くるしい顔の娘でした」

まつげはともかく、木室環嬢はほそながい顔だし、関夫人は狐のような顔をしていた。あの志賀さんと刈部夫人はたしかにまるみをおびた顔だったのである。しばらくして、ぼくはまたきいた。

「山名さん。……しかし、ほんとうにあなたはそれだけで心がすむのですか？」

「もし出来ますなら……」

と山名さんは声をのんだ。

「私といっしょにアメリカにいってもらいたいのです。私はむこうにちょっとした財産もありますから」

ぼくは、山名さんにはじめてふかい同情と好意の念をおぼえた。

女をさがせ——。女は四人のなかにいる。

しかし、ぼくの直感では、その四人のなかの二人であった。刈部夫人と志賀さんと。それは両極端にたちながら、正反対の意味でぼくのロマンチシズムを最も刺戟したからである。なぜなら、このふたりがきわめて魅惑的であり、また山名さんの話にあるあの娘の迫力をそなえているように思われたからだった。

それから二三日たった或る夜、ぼくにとってははっと眼を拭かれるような光景をみた。夜学からかえってきて、階段をのぼろうとすると、その上を手すりに沿って這うようにヨタヨタと山名さんがのぼってゆく。そして、その上から志賀嬢が——おそらくまた夜業にゆくのであろう——階段をおりかかって、じっと山名さんを見おろしていたのである。

うすぐらい裸電球のひかりに、その顔はボンヤリけぶっていた。しかし、たしかに冷たい嫌悪のいろが凍っているのを、ぼくはアリアリとみたのである。

志賀さんらしくない——とぼくはいいたくない。いくらやさしい彼女でも、夜、階段であの顔にあえば、恐怖の念は禁じ得ないにきまっている。

ぼくのいいたいのはそれではない。ぼくはそのとき、四人の女のうちから志賀さんがきえたことをハッキリ直感したのだ。ぼくはなぜか安堵の思いが胸にひろがるのをおぼえた。

それでは——やっぱりあの刈部夫人か！

そう思ったとたん、ぼくの耳たぶに、あの淫らな声が波のようにゆれもどってきた。ぼくは彼女にひどい憎しみをおぼえた。これは人間として当然な怒りであろう。

偶然にも、刈部氏が詐欺の容疑で検挙されたのは、それから数日後であった。アパートはわきかえったが、刈部の細君はケロリとして鼻唄をうたっていた。

「なあに、あのひとですもの、すぐに帰ってきますわよ」

ぼくは彼女にひどい好奇心をおぼえた。この身ぶりといい、刈部夫婦の生活が思いやられるというものだ。

しかし、あの娘が！　――ここまで堕ちるのに、どんな運命の転機があったものであろう？

ぼくはそれを知りたかった。それから、彼女がはたしてあの娘か、完全につきとめたかった。

さいわいといっては可笑しいが、刈部氏はくさいところへ旅行中である。

「学生さん、ちょいとうちの子供に教えてやってちょうだいよ」

或る夕方、これから夜学にゆこうとして通りかかる途中、三号室の扉をあけてよびとめられたのを機会にぼくははじめてその部屋に入った。

おそろしくダラシのない部屋のなかで、ぼくは一年生の女の子の勉強をちょっとみてやった。その下が五つ、三つの男の子で、これはもうねていたが、彼女がぼくを呼びこんだのは、たんなる口実であることがすぐにわかった。

彼女はいきなり、ジットリとぼくの手をにぎって、ぬれた息で耳もとにささやいたからである。

「ねえ、学生さん、あすの晩、あたしとつき合ってくれない」

「つき合う？」

「フ、フ、フ、あたし、もとからあんたに眼をつけていたのよう。亭主はいないし、絶好のチ

ャンスなのよう。……」

ぼくは声をつまらせた。これでは彼女の秘密をさぐるどころのさわぎではない。

ところが、ぼくは、ふるえながら、彼女の誘惑を承諾したのだ。にぶいあたまのおくで、理性がほそい悲鳴をあげていた。いいや、こうして彼女の秘密をさぐるのだ！

子供が、何か呼んだのをしおに、ぼくはドアをあけて外に出た。

おどろいたことに、そこからとびのいたものがある。みると、これはしたり、あの作家先生ではないか。

しばらくぼくは口もきけなかった。高力さんも、のどぼとけのあたりをゴクリゴクリとうごかしているばかりだ。

「……小説はどうです？」

と、ぼくはやっと、さりげなくきいた。

「あと十五日だ。十五日で四百枚がかけるか！　ぼくの人生は終った！」

と、高力さんは世にも悲惨な声をしぼって、バタンと音をたててじぶんの部屋に入ってしまった。

6

その翌る晩、ぼくと刈部夫人は、暗い路を手をにぎり合わせたまま歩いていた。路はいま修繕中らしく、そこら一帯コンクリートのかたまりがゴロゴロしていて、ふたりはときどきつまずいては、からだをぶっつけ合った。ぼくはただワクワクしていたが、やがて必死に、

「奥さん、あなたは以前に……」といいかけると、彼女はふとったからだをまたぶっつけて、

「あんた、ふるえてるじゃあないの？　お酒でものみなさいよ。ね、そこのホテルにゆかない？　ううん、あたしお金もってるのよ。亭主が働き者だからね」

といって、ゲタゲタと笑った。

ホテルといっても、例の温泉マークの安宿である。そこは、アパートから一丁もはなれていない。ぼくは恐怖した。

「あんた、こわいの？　あたしがこわがっていないのに。ちっともあんたソンすることないじゃない？　ホテルの方はだいじょうぶ。ベラベラしゃべるようじゃ、いまどき連込宿はやれないわ。あたし、ずうっと利用してんだけど、だいじょうぶよ」

ぼくはその夜一語も彼女の過去についてきくことはできなかった。

彼女はぼくが童貞であったことを知って恐悦した。ぼくははじめて知る女——しかも官能のかたまりみたいな女の、凄じいまでの愛撫にのたうちまわらせられた。全身を這いまわる唇、からみつく白い四肢のすきまから、それでもときどき、ちらっちらっとあの恐ろしい、神々しい顔がかすめた。しかし、なぜか、この女を汚しぬくことが山名さんへの奉仕であるような気がした。堕ちろ、堕ちろ、この売女。

ばかばかしい。みんな卑怯な自己欺瞞だ。彼女の秘密をさぐるなどいうことも、ていのいい口実だった。すべてはぼくの性欲にある。しかし、世の中の若い学生で、だれがあの女の誘惑におちずにいるだろう？

その証拠に、それから一週間ばかりのあいだに、ぼくは三度も刈部夫人とそのホテルにいったのだ。そのたびに、彼女は例の声を出した。もう彼女の過去なんかどうでもいい。

その三度めの夜に、恐ろしい事件がおこった。

ぼくと刈部夫人はホテルを出た。ぼくはまたコンクリートのかたまりにつまずいたはずみに靴のひもがきれたので、かがんで結んでいた。彼女はブラブラとさきにいった。そしてそこで突然、ぞっとするような悲鳴があがったのだ。

そこはホテルの裏側で、まっくらだった。そのなかでバタバタとにげ出す足音をきき、事情

もしらず、ぼくは追っかけて、そいつをつかまえた。

「どうしたんだ！」

「なんだか、おれにもよくわからん。そこを通りかかったら、突然すぐまえの暗闇で悲鳴があがったのだ」

その声をきいて、ぼくはおどろいた。

「高力さんじゃありませんか！」

「やっぱり、きみか！」

と高力さんはさけんだ。

ふたりはあわててかけもどった。暗闇の地面にだれかたおれている。マッチをつけてみて、ふたりはあっとさけんだ。

刈部夫人がたおれていたのである。そして、あたまの傍にころがった血まみれのコンクリートのかたまりに、ギラギラと血しぶきがはねかかっていたのである。

「奥さん、奥さん！」

連呼すると、かすかなうめき声がきこえた。まだ死んではいない。

「どうして、あなたはこんなことをしたんです？」

「ぼくは知らないといったら！」

「嘘をつけ、あなたがこの奥さんのあたまを、そこのコンクリートのかたまりでたたきつけたんだ」

「ぼくは知らないといったら！」

「嘘をつけ、あなたはこの奥さんをにくんでいたじゃないか！　小説ができない恨みで！」

「何をいう。きみこそ、人妻と姦通して！」

ふたりは、仇敵のような言葉をなげつけあった。

が、また地上の被害者がうなり声をあげたとき、ふたりは冷水をあびせられたように身ぶるいしてわれにかえった。

どちらもうしろ暗い影をひいていたのだ。ふたりは相談もしないのに、女のからだを頭と足から抱きあげて、必死にヨチヨチとアパートにはこんでかえるのにかかった。

われわれは、神のたすけか、誰にも気づかれないで——たとえ気づいていても、ちらっとみただけでゆきすぎてくれた通行人のおかげで——ぶじアパートにもどってきたが、そこで、やんぬるかな、あの恐るべき管理人の細君に見つかってしまった。

「刈部さんの奥さんじゃありませんか。どうしたんです？」

「どうしたんだかわからない。あたまを石でぶたれて、あそこにたおれていたんだ」

「えっ、それじゃ、すぐ交番にいってきます！」

このおせッかいをとめる力はふたりになかった。
負傷者の部屋にかつぎこむとまもなく、警官がきて、医者がきた。彼女は蠟のような顔いろになっていた。
「だいじょうぶですか、たすかりますか！」
と、必死の眼で見あげるぼくに、その老よった医者は、
「死にはすまいが、そのためにはまず輸血せんけりゃならんね」
といった。
「ぼくの血をつかって下さい！」
「誰の血でもいいというわけにゆかんのだ、輸血というやつは」
ああそうか、血液型というものがあったっけな、とぼくは考えた。いそいで負傷者の血液型が調べられた。B型であった。ぼくの血を調べた。A型であった。
「だめだ、これは。B型か、O型の血液でなくっちゃあ」
医者は、あけはなったドアの外にひしめいているアパートの連中をじろっとふりむいて、
「だれか、そこのお方のなかで、B型かO型のひとはいないかね？」
みんな顔見合わせて、しりごみをした。薄情なのではない。ふだんから、刈部一家は、アパートじゅうをへきえきさせていたのだ。

「おまえ、去年病院で輸血したとき、なんだったたっけね？」
二階の木室老人の声がした。
「あたしはAB型。ダメよ」
と、娘のオールドミスの環嬢が冷然とはねかえした。
「あたしの血を調べて下さいまし」
と、やさしい声がきこえて、志賀悠子さんがすすみ出た。
彼女の血液はB型であった！
「あんた、このひとに血をやって下さるか？」
「どうぞ」
と、この「聖処女」はすずしくこたえた。ぼくの眼には、まさにその頭上に黄金の環がかかっているようにみえたのだ。
土下座するひまもなくぼくと高力さんは、警官にドアの外へよび出されていた。むろん、あの惨劇の事情を訊問されたのだが、すぐに警官の眼は高力さんにそそがれた。
ぼくも実に具合のわるい立場にあるが、その惨劇に関するかぎり、高力さんのほうが分がわるいことは自明の理であった。刈部夫人がたおれたとき、高力さんはすぐ眼のまえにおり、ぼくはずっと遠くにはなれていたことは、ふたりがこうして対決してみれば、高力さん自身認め

ないわけにはゆかないからである。

「きみ、どうしてこんな時刻、そんなところを歩いてたんだ？」

と、言葉するどくきただされて、高力さんは腕をねじるようにしてポケットから一枚の紙きれをとり出した。

「こいつが、ぼくの部屋のドアのすきまにさしこんであったのです」

「なに？――どれどれ」

と警官は読んだ。

「今夜十時ごろ、白鳥ホテルにて、十二号室の男と三号室の女が密通している」

ぼくは愕然とした。

そのときぼくは、群集の中から、じっとこちらをうかがっている管理人の関夫人の狐のような顔をみたのである。

7

新聞の小さな三面記事では、事件は終ったようにみえた。

しかし、人間荘ではむろん事件はまだ水脈を曳いていた。

刈部夫人は入院した。命はたすかるらしい。そして彼女の語るところによると、闇の中でい

きなりあたまにはげしい打撃をうけたことをおぼえているばかりで、それ以外のことはまったくわからないという。三人残された子供は、志賀悠子さんが母代りに面倒をみてやった。

高力さんは逮捕された。あの紙片がどこのどいつのおせっかいであろうと――ぼくにはだいたい想像がつくが――彼の容疑はうごかすべからざるものである。ぼくも、犯人は彼以外にないといまも思っている。しかしその動機は、決して古今の大傑作の執筆をさまたげられた恨みなどではなく、おそらくゲビたヤキモチからだと思う。

そしてぼくは――ぼくもむろん何度か警察と病院のあいだを追いまわされた。そして、ヘトヘトになってアパートにもどった背なかに、いくつかの冷笑の視線をつき刺された。

ふつうならいたたまれないところだ。けれど、この人間荘には、こちらが膿のかたまりみたいになっても、なぜかドロンと沈澱させてしまうおかしな居ごこちのよさがあった。

天罰をうけたという意識はあった。しかし、それで峻烈な罪のいたみを感じないで、ふしぎにもぼくは、ひどくにぶい、ふてぶてしい動物みたいになってしまった。ぼくはその数日で、想像もつかないほど堕落してしまったのだ。

峻烈な罪のいたみをおぼえるのは、むしろあの志賀悠子に逢うときであった。彼女は、罪の海底にたゆたうぼくからみて、まさに天上の月のようだった。あれを見失ったときが、人間としてのぼくの最期だ。ぼくはそう思い、アパートからはなれなかったのは、そのせいもあるの

だ。

そのことをハッキリ意識したのは、それからまもなく、廊下であの山名さんと次のような会話をかわしたときだ。彼は眼帯をはずしていた。

「おかげさまで、あと一週間くらいで眼がみえてくれるらしいです」

と、山名さんはいった。ぼくはその顔が見られなかった。

「それは、おめでとうございます」

と、やっといってから、まだ彼の眼はみえないのだと気がついた。ぼくはふてぶてしく彼の顔をみて、

「すると、あのたずねびとが、やっとわかるわけですね」

「ええ、おそらくは……」

「あなた……下の三号室の刈部さんの奥さんが入院したことを御存じですか？」

山名さんは微笑した。ぼくは恥のために血が逆流するのを感じた。いくら盲人だって、あの騒動の噂はきいたろう。

「はい。しかし、あの方は、私のさがしているひとではありません」

ぼくは、脳天をガンとうたれたように思った。

「なぜです？　どうしてそうハッキリいえるのです？　あなたは眼がみえない、そしてさがし

ている女のひとの声も正面きってはわからないというのに——」

「なぜでも、あれは、あのひとではないのです」

山名さんは、めずらしくキッパリといって、ヨタヨタとじぶんの部屋の方へ去っていった。

ぼくは、茫然としてそのあとを見送った。

山名氏のたずねびとは刈部夫人ではないという。なぜか、そう断言する。本人にそう断言されてみれば、アカの他人が根拠をきいてみたってはじまらない。

それでは、いったい誰なのか？　……ぼくのあたまには、ただひとり残った或る女性のかげが、キラめきつつ浮かびあがったのだ。

（やっぱり、そうか！）

志賀悠子さんである。かんがえてみれば、それ以外にない。

その刹那、ぼくは全身にいたみのようなものを感じた。彼女をうばわれてなるものか！

待てよ、とぼくはかんがえた。それでは彼女はなぜだまっているのか。山名さんの変貌に眼をくらまされたのか。しかし、いかに思いがけないにせよ、あれほどやさしい女性が処女をささげた男を十年ぶりにみて、相鳴る何ものかを感じないということがあろうか。いつか階段の上から山名さんを見下ろしていた嫌悪の眼はどうしたのだろう？

思考はにぶく、大股にはねた。

なにか暗い事情がある。あのひとの身の上に、またあのひとの心の中に。彼女はいまの山名さんを嫌悪している。山名さんの眼がひらけば、かならず彼女は不幸になる。

罪の水底にのたうっているぼくの思考は、そう意識せずして、あの事件以来、あかるい大気の中では想像もつかない、ぶきみな蠕動を起していた。

ぼくは、山名さんに対する殺意にとらえられた！

「あのひとのためだ！」

破局は、三日のちの夜にきた。

二階の階段のすぐ傍にある十六号室の仁木氏は、へんな天ノ邪鬼であった。つむじまがりであったが、恋人があったし、野球が大好きだった。その夜恋人がくるというのに、彼はソワソワしていたし、また後楽園のナイターを見にゆきたい欲望に身をやかれていた。ぼくは彼の天ノ邪鬼本能を刺戟して、彼をナイターの方へむけて尻をたたいてやった。

「じゃあ、かえりの電車の時間もいれて、おそくも十一時までにはかえってくるから、あいつが来たら、待ってるようにいってくれませんか」

と、仁木氏はぼくに部屋の鍵をあずけてとび出していった。

十時二十五分。ぼくは部屋をそっと出た。廊下に沿う幅四尺五寸の手すりは、ぼくの部屋の

扉のすぐ前にある。もとからグラグラしていたやつを、ぼくはひるまスッポリはずせるようにして置いた。そしてはずしたそれを、あずかった鍵でひらいた仁木氏の部屋の入口にたてかけた。

はずされた手すりのあとは大きく歯がかけたように、パックリと空間をひろげている。階段はその左側からおりていって、踊場から折れて、さらに一階へおりる階段につづくのだ。

ぼくは部屋にとびかえって、ドアを細くひらいて待った。

十時半、東のほうで扉をあける音がして、不器用な跫音が、ソロソロとこちらにちかづいてきた。予定のごとく、山名さんが、各部屋の壁づたいにやってくるのである。階下の便所へ下りてゆくつもりなのだ。

ぼくの眼は、義眼のようにむき出されていた。

山名さんは手すりにさわった。十六号室の入口にたてかけた手すりに。――そして右へまがって階段をおりようとした。そこに階段はなかった。彼は夜がらすのように奇怪な悲鳴をあげると、うす暗い空間をおちていった。下で、ぐしゃっというような音がきこえた。

ぼくははげしい音をたてて、ドアをとび出すと、大声をあげながら、稲妻のように手すりをもとの位置にもどした。正確にもどす必要はない。いいかげんな置き方のほうが有効なのだ。

ぼくの大声に、二階の各部屋のドアがひらいていくつかの顔がのぞいたのは、計算どおり、

そのあとだった。

「どうしたの？」

「だれか、ここから落ちたらしい！」

ぼくはさけんで、階段をはしり下りた。

階段を下りきったところ——そこにはすぐまえの五号室の日下部夫妻をはじめ四、五人のひとが立ちすくんでいた。その足もとに山名氏はたおれ、おびただしい血が床や階段にはねとんでいた。

山名さんは死んだ。殺意はあったが、死ぬとまではハッキリ見込みをつけていたわけではないが、まっさかさまにおちてきた山名さんは、あたまを床にたたきつけて即死していたのである。

盲人と、ふだんからあぶなかった手すりと、そして他殺の動機がまったく不明なことと——だれもぼくを疑うものはなかった。たとえ山名氏に息があったところで、真相はついにじぶんにもよくわからなかったにちがいない。

相つぐ変事に、人間荘はドス黒い風のようなものにゆらいでいるようだった。

ぼくは三日間、虚脱したように坐っていた。

（おれは何をしたろう？　何をしているんだろう？）

いくらかんがえてもわからなかった。ぼくはまったく異種の動物になったかのようだった。ただ、わけもなく（あのひとのためだ、あのひとのためだ！）と、胸の底で獣みたいにわめきつづけていた。

三日めに、突然、或る声がきこえた。つまり、一昨夜だ。それは魔の声であった。

「誰の血でもいいというわけにはゆかんのだ、輸血という奴は」

おお、人間の記憶の奇怪さよ。突如として、なんの脈絡もなく、幽霊のようによみがえる記憶よ、呪われてあれ。——それは先日きいた老医の声だった。

ぼくは昨日、町をかけずりまわって一冊の医学書と載物ガラスやピペットや標準血清などを買ってきた。そして、階段の下にのこった山名さんの血痕からその血液をしらべたのである。

山名さんの血液型はA型であった。

ぼくの操作にまちがいはなかった。いくどくりかえしてもA型であった。

ぼくはうなされたような眼で、その医書を読みふけった。

「O型の人は、すべての型の人に対して給血者たり得るが、O型以外の人の血液を受けることはできない。

A型の人は、A型およびAB型の人に対して給血者たり得るが、A型およびO型以外の人の血液を受けることはできない。

B型の人は、B型およびAB型の人に対して給血者たり得るが、B型およびO型以外の人の血液を受けることはできない。

AB型の人は、ABの人に対してのみ給血者たり得、すべての型の人から血液をうけることができる」

くりかえしていうが、山名さんはA型であった。そうして、彼は曾て「あの娘」から血をもらったことがあるのだ！

もはや、これ以上書きつづける必要はあるまい。君には「あの娘」の十年後の姿が誰かもうわかったろう。そしてぼくがこの愚かな人間喜劇をかきのこして、うつろな旅に出てゆくこころを理解してくれるだろう。

では君の幸福なる生活を祈る。さようなら。

第一の間借人

殺すも愉し

1

新しき住人、ようこそ。

第一の間借人は、こう書き出したな。とりあえず、その真似をしてみたが、実は、おれまでが、この黒いノートに、こんな文字をのたくらせようとは、想像もしていなかった。……おれはこうみえて、大学も出てるし、あたまもわるい方じゃないつもりだが、文章をかくことだけはとんと苦手で、だいいちめんどくさいのだが。——

そのおれが、なぜこんなことを書くのか。いや、そのわけをかくのもめんどくさい。ただ面白いからだと思ってもらおう。おれの経験した世にも恐ろしく可笑しい事件をきいてもらいたいからだと言おう。それから。それから。——

まあ、よろしい。それからのことは、読んでくれればわかる。おれは天使と悪魔の話をかく。

残念ながら、おれが悪魔の役割だ。

第一の間借人は、第二の間借人たるおれを「なぜか君はぼくに似た人であるような気がする。不安と希望にもえた貧しい学生のような気がする」と想像したが、おあいにくさま、おれは刑務所からやって来た。しかし、第一の間借人、あれは、人生を知るのがすこしおそすぎたね。それを知ったときには、すでに人殺しだったとは。

「盲目の軍神」がさがし求めていた女は、おれにはすぐにわかった。

その女は、この人間荘アパートに住んでいる。しかも四人の女のなかのひとりだ。ここまでは、奴さん、はやくからつきとめた。一号室の関夫人、三号室の刈部夫人、九号室の木室嬢、十一号室の志賀悠子嬢。——それが第一のデータだ。

ところで「軍神」の血液型はA型であった。——これが第二のデータ。

それから、医学書をひいて、ながながとむずかしい原理がかいてあったが、あのなかで必要なのは、「A型の人は、A型およびO型以外の人の血液を受けることはできない」という三十字だけだ。したがって、軍神に輸血した娘は、A型かO型のほかにない。これが第三のデータである。

しかるに、三号室の刈部夫人はB型で、九号室の木室嬢はAB型で、十一号室の志賀嬢はB型であった。これが第四のデータ。

すると、四人の女のうち、三人が消去されれば、のこるは一人だけじゃないか。

たとえ、そのことが一字もかいてなくったって、その女がA型かO型にきまっているのだ。つまり、「軍神」のさがしていた女は、一号室の関夫人だったのさ。あの純情な和製ジャンヌ・ダルクの十年後の姿は、このアパートの金棒ひき、管理人夫人だったのさ。まるく、愛くるしかった娘の顔も、十年間の憂世の風にそぎおとされて、あんな狐面になったのだろう。

第一の間借人は、よほど深刻派とみえて、絶望悲嘆してこのアパートをにげ出していったが、おれはべつだんおどろかないね。人生とはそんなものだと承知しているからだ。

だから、いまも依然としてアパートじゅうきき耳をたて、眼をひからせ、悪口のたねをさがしてまわっている関夫人をみても、ニコニコといとも愛想よくしていられる。……彼女に罪はない。こうなったのも、みんな遺伝と環境のなせるわざなのだ。

突然、とっぴな言葉をもち出したようだが、人間獣の大真理にまちがいはない。人間の顔、人間の心、人間のやること、すべてこれ遺伝と環境の結果である。——刑務所からこんな大慈悲にみちた道徳をもって出てきた聖人はなかろうと思う。おれは、たいていの悪党をみても、「なあるほど」と思う紳士だから、ましてこんな哀れなアパートの住人どもなど眼中になく、悠々閑居してまた一千万円ほどの不動産詐欺のプランにとりかかっていたのだが、そのなかで、たった四人、ちょいとおれの神経にひッかかった人間があった。

まずおなじ二階十五号室の椎名という男と、階下の四号室の津田という男、これはどっちも

まるで日かげのじゃがいもみたいにしおたれた男だが、そのふたりとも、どっかで見たようなおぼえがあるのだ。

おれははじめてこのアパートにきて、はじめて彼らに逢ったはずなのだが、さて、どこで見たろう？　刑務所に入る以前にも、あんな湿ッぽい連中とつきあったおぼえはないし、だいいちそれほどむかしの記憶ではない。

そうだ、あの椎名という男は――その三年の刑務所生活のあいだに見たような気がする。はてな、どういう野郎だったかしらん？

しかし、それはまあいい。それを知ったからといって、あいつをどうしようというほど、おれはケチな男ではない。たたけば、人間、だれだってホコリが出る。おれだって、むこうが気がつかないから助かっているようなもんだ。それにあいつは、どうやら少々イカれているらしい。いつゆき逢っても、

「ぼくの可愛い妻と娘は、どこにいったろう？」

とかなんとか、ブツブツひとりごとをいってあるいている。

ところで、もうひとり、四号室の津田だ。

そういえば、こいつも刑務所で逢ったような気がするのだが――しかも、ごく親身につき合っていたような気がするのだが――それがだれだったか思い出せない。いや、そんなばかな話

があるものではない、とじぶんでも思う。

とにかく、廊下であえば、身をよけて、ペコリとおじぎをする。おればかりにではない。だれにもおじぎばかりしている。御用聞きにも、子供にもおじぎをするし、ひょっとすると、犬にだっておじぎをするかもしれない。およそ世の中に、これほど影のうすい、哀れッぽい男はないだろうと思われるくらい、いつも涙だか眼やにだかためた、ひょうたんみたいに蒼白い顔いろの小男だ。

こいつが、右の次第で、へんにおれをイライラさせるのだが、なんにしても大した奴ではあるまい。

それより、猛烈におれをイライラさせるのは、隣室十一号室の志賀悠子嬢だ。この部屋の第一の間借人に、そのゆえに殺人の罪を犯させた裏町の佳人、陋巷(ろうこう)の天使。

何を、ちくしょう、「聖処女」だって？　ばかにするな、メンスのある、さつまいもの大好きな女という動物じゃないか。どんなに澄ましていようと、いちど手なずければ、男も顔まけの恥しらずになるメスじゃないか。はじめおれはそう思って、セセラ笑った。

が、いけない、あの湖みたいにふかく澄んだ眼で見られると、さすがのおれがうつむくか、ヘドモドしてしまう。……なぜだろう？　あの女は、ほんとうに天使で、おれが悪魔だからだろうか？

そりゃ、あんまり芝居がかったお話だ。ひょッとしたら、おれもあの女にイカれたのかもしれないぞ。
そう思うほうがおれらしいが、ふしぎなことがある。おれが志賀嬢に惚れたとすると、ここにきて三日目に手に入れたちかくのバーの悦子という女がきらいになりそうなものだ。事実、志賀嬢と悦子は、すべてが月とすっぽんだ。ところが、おれは志賀嬢と何かのはずみに五分も話をすると、なんだか胸が苦しくなって、悦子のところへとんでゆきたくなる。そして、そこにゆくと、息がらくになるのだ。ふふん、蟹は甲羅に似せて穴を掘るか。
さて、以上の三人は、おれをイライラさせるとはいうものの、むろん向うからおれに何かしかけて、イライラさせるわけではない。志賀嬢を月光とすれば、椎名も津田も影のように、人間の匂いのしない、ひッそりした連中なのだ。
ところが、ここにただひとり、向うからおれにつっかかっておれのカンにさわる奴がある。十六号室の仁木という男だ。

2

どういうわけで、そんな問答がはじまったのかしらない。或る日曜日の午後、アパートの階段の踊場のところで、仁木と志賀さんが話をしていた。

この十二号室は階段の傍にあるから、扉をあけて外に出ようとして、ふと立ち聞きしてしまったのだが、ふたりともひくい声ながら一生懸命で、おれが半分扉をあけた音にも気がつかない風である。
仁木がしゃべっている。
「ぼくはね、人間を形成するのは、その八割までは遺伝だと思うんですよ、よく子供が親に反抗するときにいいますね、誰も生んでくれとたのみやしないのに生んだのだから、ぼくのことはお父さんとお母さんの責任だ、とね。そのとおりです。少なくとも子供をそんな子供に生んだのは親の責任だ。子供自身にはどうしようもないことなんです。花はじぶんで赤くなろうったって、白くなろうったって、それは不可能だ。ちゃんと先天的にメンデルの法則できまってるんだから。——」
仁木の十六号室と悠子嬢の十一号室とは、廊下をへだててまむかいである。だから、ふたりが話しあっているのにふしぎはないはずだが、仁木というのは実にへんてこなすねもので、廊下でだれと逢ってもろくにアイサツもしないような男だから、いまひどく熱弁をふるっているのにおれはおどろいた。
「あなたはそんなに美人だ。ちっともお化粧しないのに、発光動物みたいにひかってる。ところが、町でみる女たち！　髪をちぢらせ、眉を剃り、トンカチと釘ぬきで頬骨をたたき出ッ歯

をぬき、スポンジで胸をふくらまし、スリコギで脚をねりまわしても、どうにもならんのがウヨウヨしてる。これ遺伝のしからしむるところです。顔かたちだけじゃありません。頭のいい奴わるい奴、性質のやさしい奴に残忍な奴、みんな遺伝なんですな」

論はともかくとして、いい方が毒々しい。おれでさえも礼拝したいような志賀嬢をふだん冷眼にみて、時にこうつっかかるような口をきくのは、天下ひろしといえども、この仁木くらいだろう。

「それじゃ、あなたは教育の力というものをおみとめになりませんの？」

幼稚園の保母をしている悠子嬢の、やさしい、懸命の声がきこえた。

「知識をあたえる、という知育だけなら認めますがね。人間を善人にするとか、何とか、いわゆる徳育のほうはちとどうも」

修身教育反対論者らしい。

「教育というより。環境ですな。環境が、人間に影響することは、ぼくも否定しません。だからいま、遺伝の力が八割だといったんです。あとの二割は、たしかに環境の如何による。しかし、それもね、大きくなってからの環境ではなくって、物心もつかない幼年時代、いやあかん坊時代の環境ですよ。フロイトの精神分析によれば、ですね。――」

仁木という男は、カンにさわるが、いってることは正論だ。

たしかに人間は、遺伝と環境から形成される。これは、おれが刑務所で逢った何百人かの犯罪者の例からみて、そういいたいのだ。おれは彼らをあわれむ。おれは彼らを愛する。

おれは刑務所で、ひとりの怪物に逢った。もう六十をすぎたのに、強姦殺人数十件という大した爺いで、死刑の運命はきまったようなものだが、話をしてみると、そんな化物とは思われない気のいい爺さんだった。――おれは大好きだった。

いま、仁木がいった。あかん坊時代の環境が、その人間の一生に重大な影響をあたえると。――そのとおりだ。おれの両親は、おれが二つのとき強盗に殺された。母親のごときは、犯されて、そのあとなぶり殺しに逢ったのだ。あかん坊のおれはその傍で、血みどろになって泣いていたということだ。

そういうわけで、おれは両親を知らないといっていいのだから遺伝の質がよかったのかわるかったのか、判断のしようがない。また両親がないのだから、それ以後恐ろしく辛い人生をなめてきたことも事実だ。しかし、おれをこんな犯罪者にしたのは、それらよりも、二歳の眼でみたその惨劇の印象ではなかったろうか？

おれはその殺人者を見たのだ。そのとき、この眼で見たのだ。その残刻無残の恐怖をやわらかい脳髄にやきつけられながら、その仇敵をまったく思い出すようすがもない。永遠に！――人間とは実に哀れに、恐ろしいものではないか。

「けれど、仁木さん」

と、悠子嬢はいった。

「遺伝と環境とおっしゃっても、おなじ遺伝でおなじ環境の兄弟で、いい方も、わるいことをなさる方もあるんじゃありません？」

「そりゃおなじ種で、おなじところに植えても、白い花を咲かせる奴もあり、赤い花を咲かせる奴もありますからね。やっぱりメンデルの法則ですよ」

と、仁木は笑った。

「それじゃああなたは、なにか悪いことをなさるとき、それをとめる何かの呼び声をおききになったことはありません？　つまり、良心の声を。——それが教育によるものだとはお思いになりません？」

「悪魔の呼び声はよくききますがね」

と、仁木はなおカラカイ気味だ。

「要するに、ぼくは犯罪者は遺伝と環境と——それから、出来心から生まれてくると思います。彼らはむしろ普通人より悪意がない。悪意があったら、ばかげた犯罪者などにはならない。むしろ悪意という奴は、普通人の中にこそ棲んでいる。——」

なんだか、りくつが支離滅裂になってきたようだ。

「問題は、この出来心という奴です。どこからともなく、ヒョイと空中からとりついてくる見えない悪魔ですね。これは、どんな人間にもふせぎようはない。教育の網の目など、かるがると通りぬけてしまいます。——」

おれは、いつのまにかニヤニヤと笑っていた。

彼のいっていることが、少々シドロモドロになってきたのも道理——さっきから、おれがしきりに彼に共鳴しているのも道理——実は、仁木の論は、おれからの受け売りなのだ。おれの持論なのだ。

このあいだ、おれはいま仁木のいってることと、そっくりおなじことを仁木にいってやった。そのときは、仁木はいま志賀嬢とそっくりおなじことをいって、おれに抵抗したくせに。

仁木が、おれに説伏（せっぷく）されたとは思われない。それほど素直な奴ではない。こいつは実にへんなへそまがりなのだ。人がああいえばこういう、こういえばああいう天ノ邪鬼野郎なのだ。

……

志賀さんは、急にだまった。さすがに気をわるくしたのかと思っていると、ふと微笑しながらいうのがきこえた。

「あなた、そうおっしゃるのは、あの熊倉さんからの感染ね？」

おれはとびあがった。熊倉とはおれのことだ。しかし、あの女は、いつどうしてそんなこと

を知ったのだろう？

「ち、ちがいますよ、ぼ、ぼく自身の思想ですよ」

と、仁木は大いにあわてている。

「そうですか？　それならいいんですけれど、あの方に感染しちゃだめですよ。あなたは、ほんとうはいい方なんですから。……」

と、志賀嬢は、母があかん坊をあやすようにいって、それから階段をおりていった。

おれは、世にもばかげた顔で棒立ちになっていた。「それならいいですけれど、あの方に感染しちゃだめですよ。あなたはほんとうはいい方なんですから……」とはなんだ。それじゃおれがまったく病原体みたいじゃないか。内心ちょっとあの女に参ってる徴候を自覚していただけにおれは平手打ちをくわされたような気がした。

急に猛烈に腹がたってきた。

「そうだ、おれは悪党だ。よく見ぬいた」

と、おれは口をひンまげて、声もなくひとりごとをいった。

「それならそれで、こっちにも考えがある、聖女面をしたナマイキな女め、いまに一ト泡吹かせてやるぞ。……そうだ、そっちが救いたいと思っているそのおかしな天ノ邪鬼を、おれがつかまえて堕してやる。天使と悪魔のたたかいだ。小説や芝居の世界とは、ことがちがうぞ。き

っと悪魔が勝ってみせる！」

廊下をバタバタと二つ三つの跫音がみだれてきた。

「待ちな、待ってくれ、環」

「イヤ、お父さん、ケイベツするわ！」

そんな声がきこえた。九号室の木室老人とその娘の環嬢らしい。

木室老人は人形づくりの職人かたぎ、実によく出来たお爺さんだが、不覚にも娘を女子大など卒業させて、そのうえオールドミスのせいか、環嬢はすぐにヒステリックな声をあげて、父と衝突する。

かんばしった声がきこえた。

「あたし、生きてるの、いや。どうしてあたしを生んだのよ？　だれも生んでくれとたのまないのに。——」

すると、それをなだめるというより、からかうような例の仁木の声がした。

「まあまあ、お嬢さん。……そりゃお父さんだって、あなたを生もうと思ってお母さんとナニしたわけじゃないんだから。……」

こんな説得があるものではない。

それより、たったいま「子供を生んだ以上、みんな親の責任だ。そのとおりです」とかなん

とかやってたくせに。――また例の天ノ邪鬼、あきれた野郎である。

3

出来心。――どこからともなく、ヒョイと人間にとりついてくる見えない悪魔。

こいつはまったくふしぎな奴だ。おれは志賀嬢のせりふに腹をたてて、仁木を犯罪者にひきずりこんでやろうと思いたったが、実はそれほど深刻に決心したわけではない。それなら、直接に志賀嬢に仕返しを決心しただろう。それより、腹をたてつつ、むしろいたずら半分の出来心といってよかった。

出来心とおなじように、おれにはわけのわからない人間の心理がある。それは天ノ邪鬼、つむじ曲りという奴だ。

こいつはどうも人間の本能の一つじゃないかと思う。おれは子供をもったことがないが、もっと若いころ、或る家に下宿していてそう思った。どんなに子供のよろこびそうな御馳走をつくって、どんなにうまくすかしても、それをグイとおしのける。そして大人の呑んでいる辛い酒などを欲しがるのだ。それも酒がうまいと感じるのじゃなくて、ふだん禁じられているから、それで欲しがるようにみえるところがある。やはり、自我、自己主張の発現のひとつだろう。だから、むろん大人になってからもある。そして、おなじ自己主張の発現の一つである虚栄

心とむすびつき易い。歌舞伎の一等席が百円くらいになったら、名流夫人がいまのように押しかけるかどうか。ゴルフをニコヨンがやり出したら、重役連中がいまのように杓子の化物をふりまわすかどうか。――

しかし、それにしても仁木のへそのまがりかげんは、すこし度をすぎていると前から見ていた。きちがいの症状という奴はあらゆる人間がもっているいろいろな性情の一部分が、癌みたいにあたりかまわずニュッと拡大してきたものだそうだが、このつむじまがりも、度をこすと、自己拡大よりも自己破壊の結果をよびおこす。そもそもつむじまがりという性質自体が、すでにその気味をおびているのだ。

おれは、それからわざと仁木に接近した。

そしてこの男の天ノ邪鬼ぶりが、想像以上に念の入ったものであることを知って、実はあきれかえった。よくいえば、簡単にはばかにはできない深味のあるへそまがりだが、要するに病コーコーだ。りっぱな精神異常者だ。他人から強いられたものはみんなきらいになり、禁じられたものはみんな欲しくなるという。――

「きみ、うちは何だったの？」

と、きいてみたら、

「おやじは神主で、小学校の校長だった。物凄いスパルタ教育をやられたから、その反動だろ

う」

　と、自分でも承知している。だから修身教育などするものじゃない。

「おやじが死んだときにね、坊主も呼ばなきゃお経もあげない。ただ棺桶に入れて、にない棒でかつがせて、山の上の先祖代々のお墓にほうりこんでやったよ」

「そりゃ痛烈な復讐だな」

「そうじゃないんだよ。ぼくの村はひどく封建的で、葬式の格好とか、何とか古老がうるさいんだよ。だから、わざとやってやったのさ。もっとも、人間、死んじまってから何をしたってはじまらない。ぼくが死んだら、棺桶も要らん、両手両足をひとつに縄でくくって、焼場にブラ下げていってもらいたいと思ってるがね。……とにかく、そんなことで、村にもいられないことになってしまった」

「……君、よくそんなことで役所がつとまるね」

　仁木は或る区の登記所の役人をしていた。こんな役人にものをたのまなければならない人民の災難が思いやられる。

「出世の見込みはないね。われながら、そう思う。ただぼくはひとのいやがる仕事をすすんでやるし、それに課長がぼくほどじゃないが、これまたちょいとしたつむじまがりだから、それでどうやらなんとかくびがつながってるんだろう」

　そして、彼はふっともの悲しげな表情になった。

「そんなことよりね、こまったことは、このごろちっとも世の中に面白いことがなくなっちまったことなんだ」

「そりゃ、だれだって、そんなに面白いことなんかありゃしないが。……」

「ちがう。きみなんかの愉しみと意味がちがうんだ。つまり、ぼくにとっては、抵抗のあるもの、禁断のものほど――というより、それしか愉しみがないんだよ。ところが、このごろの世の中は、何もかも抵抗がなさすぎるじゃないか。禁断のものなんかないじゃないか。エロ本を読もうと、はだかの女を見ようと、姦通しようと――」

「なるほど、しかし……」

　と、おれは彼の顔をみながらいった。このつむじまがりが、なんと平凡な大衆とおなじく、野球が大好きらしいということを思い出したのだ。

「きみはよくナイターなんか見にゆくじゃあないか。ナイターが禁断の娯楽とも思えないが。――」

「あれは野球を見にゆくんじゃないよ。野球場の或る警備員を見にゆくんだよ」

「警備員？」

「その男の女房が、おれの恋人なんだ。……どうだ、間男がコキュの顔を見にゆくのは、禁断

の娯楽だろう？」

「な、なあるほど。……」

「しかし、それもこのごろ興味を失ったね。女がぼくを追いまわすようになったからね」

そして、こればかりは人間並に、ひどく好色的な笑顔になった。

「ぼくは女を手に入れたらね、その女が死物狂いにいやがり、悲鳴をあげるような可愛がり方をしてやる。ところが、ふしぎだよ。女って奴は、だんだんそのうち、そのいやなことに無上の快感をかんじてくるらしいんだね。……そのときが、おれの愛の終りだ」

おれは、じっと彼の顔を見てきいた。

「きみは、いま一番何がしてみたい？」

「そうだな、まえから考えてるんだが、いちど夏のまっさかりに、オーバーをきて、マフラーをつけて満員電車にのってみたいな」

それで、ゲラゲラ笑いとなった。

こういう問答をかわすくらいだから、志賀嬢にはおきのどくだが、二人はきわめて親密になったのだ。

そのことについて、彼はこんなことをいったことがある。

「実はね、ぼくはなんだかきみがこわかったんだよ」

おれはギョッとした。が、すぐに笑顔をつくって、

「そうさ。おれはこわい男さ。それできみ、はじめあんなにおれにつっかかってきたのかね？」

「いや、こわいから、いっそうきみに近づきたかったんだ」

「それじゃあ、なぜ。……」

「近づきたいと思うと、なんとなくきみにつっかかりたくなったんだ」

「……」

この男らしく、いかにもひンまがった変な心理だ。――そのときおれは、ふっと或ることに気がついた。

「ねえ、きみ。……すると、きみがあの志賀さんにつっかかるのも、おなじ心理かね？」

彼はびっくりしたらしい。じぶんの心の中をのぞきこむような眼つきになったが、急に赤黒い顔をした。図星だ。

「そして、おれとこう親しくなるのも、志賀さんがそれをきらうからじゃあないのかね？」

彼はだまっていた。しかし、おれはこれも図星とみた。なんとこのつむじまがりのこんがらかっていることよ。が、その心理の屈折はともあれ、結果はおなじだ。おれの欲するとおり、彼はおれと親密になった。こんなおかしなことがあろうか。監視者の眼の前で、加害者と被害

者が握手をしたのだ。ただ彼はじぶんが被害者であることを、やがて被害者となることをまだ知らない。

おれはすでに仁木に罠をかけていた。

4

おれは、情婦の悦子を罠につかった。

「そんなこと……あたし、いやよ」

と、はじめ彼女はしりごみしたが、

「何も、おれを裏切ることにはならないよ。そんなことになっちゃぁ、おれの方がこまる。ただ、あいつを釣りよせるだけなんだから。……あいつをとっちめて、そのくびねっこをつかまえておくことが、おれの仕事に必要なんだ。あいつはなにしろ登記所の役人だからな。うまくいったら一千万円だぜ。そうしたら——こんなアパートなどけとばして、銀座の高級アパートへ引っ越そうじゃないか」

と、おだてて、承知させたのだ。

悦子は、たしかに一種の美人にちがいなかった。色が白く、長い顔だ、受け口である。しかしおれは、仁木がこういう顔を好まないのを知っていた。そこがこっちのつけ目なのである。

おれはわざと留守をして、おれを訪ねてきた悦子を、仁木の部屋におしかけさせて、誘惑させた。はじめ彼はへきえきし、たまりかねて、じぶんから部屋をとび出していったこともあるらしい。つむじのまがっているのは仁木ばかりでなく、だれにもある性質とみえて、悦子も彼の苦悶ぶりが、はじめ小癪（こしゃく）にさわり、やがてかえって面白くなったらしく、いくら彼がにげても、わざとドッシリと大きな尻をすえつけてうごかなかった。……

はたせるかな、そのうち仁木の例の反応が起った。彼は悦子をもてあませばもてあますほど、へんな執着にとらえられはじめたのだ。

その機をつかんで、おれはこんどは悦子をひきはなして、こんどは階下の四号室の津田におしつけてやった。

津田もめんくらったらしい。悦子のいうところによると、彼は部屋の隅にかたくちぢこまって、何をいっても、「へい、へい」と恐縮ばかりしているという。可笑しいことに、その悦子がよこをむいていると、トロンとした眼で、悦子の横顔を盗み見ているという。……野良猫のまえに、大鯛がおかれたようなものだろう。きいていて、おれは腹をかかえて笑った。

ところで、さて、問題の仁木だ。ふつうの色恋だって、相手がにげれば追っかけたくなるのが人情なのだ。まして、天ノ邪鬼の大先生である。彼は完全に野球場警備員の奥さんをほうり出した。彼の津田を見る目のいろが険悪になってきた。

そのときに、おれはそしらぬ顔をしてのりこんだのだ。

仁木はねころんで、何か本を読んでいた。のぞいてみると、アウシュヴィッツの大虐殺の写真だ。例の第二次大戦中ナチスが何十万とか何百万とかのユダヤ人を収容所に追いこんで、銃殺、毒殺、いぶし殺しに餓死に生体解剖、およそありとあらゆる殺人方法のオンパレードでみな殺しにしてしまったという記録の本である。物騒なものを読んでやがる。

おれをみると、起きあがってきて、しばらく雑談を交わしたあとで、

「きみ、このごろ悦子さん、へんだとは思わないか？」

と、オズオズといった。

「へん？　あいつはもともとへんな奴さ」

「下の津田をしきりに訪ねてるようだぜ」

「そうかね」

と、おれが気のない顔をしているので、彼は大いに不満らしかった。おれはニヤニヤしていった。

「怒るのはきみの役目だろう。おれはきみにあいつをゆずったつもりでいたんだから」

彼は狼狽した。

「あいつは淫乱さ。おれはもてあましたんだよ。きみはどうだったい？」

「淫乱？　……その点は、ぼくもまだ知らんが、そうかね、淫乱か。ふうむ、そういえば、そんな感じがあるな。……」

深刻な顔で、眼だけ夢みるような仁木をみて、おれは笑いをかみ殺すのに苦労した。

「しかし、その悦子さんが、あんな津田みたいな影のうすい男が気にいるなんてふしぎだな。……」

「彼女は、イカモノ食いだからな。それにしても、実はおれもあんまりいいきもちはしないよ。きみなら、不平はないが――」

「おい、きみ、ぼくはきみに悪いと思って遠慮していたんだよ。それじゃあ悦子さんを、きれいにぼくにゆずってくれるかい？」

「ゆずるもゆずらないも、ここ二、三カ月、悦子はきみの恋人だってことは、アパートじゅうみんなみとめてるじゃあないか」

と、おれはまじめくさっていった。

仁木はこぶしをかためて膝のうえにおき、じいっと何やらかんがえていたが、おれがいつまでもだまっているので、ふっとおびえたような眼をあげた。

「どうした？」

「ねえ。……あいつを殺っつけないか？」

と、おれはひくい声でいった。
「やっつける？」
「くたばらすのだ」
彼は顔いろをかえた。
「まさか？」
笑おうとした。おれは笑わず、いよいよむずかしい顔をしていった。
「むろん、殺っつけるというのは、すこし手荒すぎる。しかし、おれがこんなことをいうのはね、動機はともかく、以前に面白い人殺しの方法を思いついて、いちど実験してみたいものだと、冗談に考えたことがあるもんだから」
「……面白い人殺しの方法？」
「実は、いつか伊豆山温泉の或る旅館に泊ったんだ。その旅館は、道路からみると、玄関にあたる小さな建物がひとつ、ポツンと建ってるだけにみえるんだが、そこから階段を下りると、何十メートルかの大断崖に沿って、三層か四層の大建築物になってるんだよ。おれはその上の方の部屋に泊ってね、下をみると、海岸は白い砂利がひろがって波がおしよせ、松の木がチラホラみえて、実にいいながめだ」
「それがどうして人殺しと関係があるんだい？」

「まあきけよ、ところがあとで下におりて、裏口から下駄をつっかけ、崖を稲妻型に削ってつけられた細い道を海岸まで下りてみておどろいた。さっき上から砂利にみえた海岸は、あかん坊の頭ほどある白い石だらけじゃないか」
「ああ、高いところから見下ろしたからだね」
「そうなんだ。それからね、宿にかえって一階の手洗いに入った。そして何げなく窓から外を見下ろして、ちょっとおれは妙な気がしたね、やっぱり外は細かい砂利の海岸だ。もっと上から見下ろしたのとおんなじじゃないか」
「はてな」
「つまりね、崖はむろん屛風のように切り立っているわけじゃなく、急だがやはり段階がある。それで一階のすぐ外は、ほんものの砂利がしいてあるんだ。ところが上からみるとこの部分はほとんど小屋根にかくされて見えないんだね。おまけにそこに生えている松は小ぶりで、崖のもっと下に生えているのは大木だ。そして背景となっているのは、どっちもひろい海だけだろう」
「……」
「遠いところのものがすべて大きく、近いところのものがすべて小さい。そのため遠近法が無視されて、人をへんな錯覚におとす。――むろん、よくみればあちこち眺めはちがっているが

大体のところはそうなんだ」
「……」
「その錯覚を利用するのさ」
「というと？」
「あいつをはじめ下の部屋に通して、何かの機会をつかんで、こんどは上の部屋に通すんだ。むろん、その二つの部屋は、あらかじめ調べていちばんよく似た二つをえらび、予約しておく必要があるがね、そして窓から――」
「つきおとすのか」
「いや。それじゃ何の芸もない。あの悦子と寝させて、イザというとき、いきなりきみが廊下でさわぎたてるんだ。するとあいつはあわてて、うっかり窓からとび出す。――下の部屋かと錯覚してるからね。ところが、どっこい、ずっと上の部屋だ。あいつは一直線におちていって、あたまを石でたたきわるだろう」
「そんなにうまくゆくかね？」
「ゆくさ。おれが保証する。実際にあの宿へいってみるがいい。きっとうまくゆくという確信ができるから」
「しかし、人を殺すなんて……」

と、さすがのつむじまがりも、のどぼとけをゴクリとひきつらせた。そのために、こっちは、殺すのに最も抵抗をかんじさせない、いちばん影のうすい男をえらんだのだが。――
「きみはあいつに手もふれないのだよ」
おれはそこで一歩退却した。
「よしんば、あいつが窓からとび出してくれず、したがってくたばらなかったとしても、もともとじゃあないか？　おどしてやるだけで面白いじゃないか？」
「それは、面白いが。……」
「仁木さん。どうだ、いちど人殺しをしてみたいとは思わないかね？　これこそ人間にとって、最大の禁断（タブー）なんだが。……ゾクゾクするような魅力をかんじないかね？」
おれはついに彼の泣きどころに触れた。仁木の眼が、だんだん異様なひかりと熱をおびてきたようだ。
「ごらんよ、その本の写真を。――この地上には、一人で何千人も何百人も殺戮（さつりく）する奴もある。だのに、たった一人の男を――しかも、あんな影のうすい男を――ひとつ、ためしにやってみたいと思わないかね？」
「うまく、ゆくなら、やってみてもいいが……」
とうとう彼はいった。おれは、心中、とびあがった。

「うまくゆくさ。おれが悦子をそれとなくケシかけて、伊豆山へアベックでゆかせる。まずくいったら、おれも同罪になるんだから、ヘマなんかやらないよ」

「殺人か。男児この世に生を享けて、たしかにいちどはやってみたい快事ではあるな。……」

と、仁木は深刻な感慨をこめていった。

これで彼は殺人予定者となった。よし、それが曝露されないにしろ、彼はこれで永遠に地獄の囚徒たる烙印をひたいに押されることになる。

やれやれ、天使に一泡吹かせるのも、手数のかかることだ。

5

かならずうまくゆく自信はあった。

仁木には、彼と共謀して、津田と悦子に一杯くわせようといってあるが、事実は悦子と共謀して、仁木と津田を罠におとす計画だったからである。

悦子にはよく教えてあった。おれが上の部屋をとっておくから、そこに津田をおびきこんで、仁木が廊下で大声をはりあげたら、

「あっ、いけない！　あなた、窓からにげて！」

と、火のつくように津田をせきたてさせるつもりだったからだ。

数日後、おれは悦子に津田をそそのかせて、伊豆山へ一泊旅行に出発させた。可笑しいことに、そうさせながら、津田がそれを承諾したときくと、おれはあんまりうれしくなかった。

（よくまあ、あんな貧乏の神さまみたいな面アして、女と温泉に出かけようなんて気をおこすもんだ。案外、ズーズーしい野郎だな）

一汽車おくれて、演出者たるおれが出かけた。

あまりはやくから、仁木を宿にウロウロさせて、万一津田に見とがめられたりすると、すべてはおじゃんだから、仁木はさらに一汽車おくれてのりこんでくるようにいいつけてある。

伊豆山の宿は、碧洋荘といった。

予約しておいたとおり、おれは玄関から階段をおりていってすぐの――四階の「孔雀の間」に通された。

「あとで、もう一人くることになってるんだが」

と、おれは女中にいった。

ずっと下の一階の「亀の間」に、悦子と津田が泊っているはずである。そのあいだのいくつかの階段、廊下は、はじめてくる者にとっては巨大な迷路のようであった。

午後六時、薄暮のころ。――それが「実験」の予定時間だった。仁木は五時にくることになっている。

おれは女中に、

「少し疲れてるから、すまないがふとんをしいてくれ」

とたのんだ。

下の悦子も、何とか口実をつけて、もうふとんをしかせているはずだ。そっちはアベックだから、何といったかしらないがきっと女中を苦笑させたろう。これは、津田に部屋を錯覚させるための準備である。

準備は完了した。

ところが――実に意外な、ばかげているとも何ともいいようのないつまずきが生じた。五時になっても、かんじんの仁木がやってこないのだ。

五時半まで待って、おれはようやくあわて出した。(あいつ、どうしやがったんだ?)おれは、ジリジリした。おれはなるべくそこらをウロウロしたくなかったのだが、たまりかねて、部屋と玄関のあいだの階段を往復した。

六時ちかくになると、悦子が津田を浴室につれ出して――ちくしょう！　あんな野郎に悦子のはだかを見せるのか！　――そのかえり、階段を上ったり下りたりして、結局「孔雀の間」に入りこみ、いっしょにふとんの中に入るはずだ。そして、きわどい瞬間に、仁木が唐紙をあけて、ケタタましい絶叫をあげなければいけないのだ。悦子はわざとおれとは連絡しないこと

にしているから、何もしらず、予定どおり津田と同衾(どうきん)するだろう。そして、声をかけられたとき、津田がもっとも周章狼狽する体勢に追いこむだろう。――しかし、そのもっともきわどい瞬間に仁木が声をかけないと、事態はいったいどうなるのか？

あの女にしがみつかれ、からみつかれ――いくら津田だっていつまでもそのままじっとしてはいられないだろうし、そんなことをしていれば、悦子だって、ほんとにへんな気を起すかもしれない。(何をボヤボヤしてたの？　予定時間に声をかけないのがわるいのよ)と、あとでケロリといいかねない女なのだ。

時刻は切迫してきた。もう悦子と津田が入ってくるかもしれないから、おれは部屋をあけわたさなければならない。

おれは、玄関から下りる階段のまむかいにある娯楽室に入って、ソファに坐って、階段を監視する一方、窓から眼下の海や例のへんな磯を見おろしたり、壁の時計をふりあおいだり、ヤケに煙草をつけたり、消したりして焦燥した。

六時十分前。――仁木はまだこない。

悦子と津田は、もうおれの部屋に入ったろう。……もういっしょにふとんに入ったろう。

……それから、いよいよ時至れりとばかり、手を出し、足を出し……おれはたまらなくなった。

六時五分前。

（ちくしょう、おれの色女だぞ！）

おれはついにソファからはねあがり、「孔雀の間」の前にかけつけた。おれはあくまで蔭で糸をひくつもりであったが、こうなってはもう仁木の野郎の代りに舞台にとび出さなければどうにもしかたがない。

「こらあ！」

おれは、ヤケクソのような声をはりあげた。廊下をあるいていた二、三人の女給がとびあがった。が、中はしいんとしている。あわててドタバタとにげ出す物音が起るはずなのだが――おれは逆上した。

「こらあ！　悦子、津田の野郎！　見つけたぞ、たたッ殺すからそう思え！」

おれは唐紙をあけてとびこんだ。そして、部屋の中にだれもいない――ふとんは冷たく、さっきおれが出たときのままであることを発見したのである。

（あれ！　悦子のやつ、どうしたんだ？）

めんくらって、立ちすくんだとき、廊下でどどっという物音がおこった。

「何だ何だ！」

「人殺しだ！」

「火事だって？」

おれは仰天して、廊下へとび出した。廊下を無数の人がかけてゆく。あちこちの部屋からとび出して、ころがるようにむこうの階段へはしってゆく。

「地震だ！」

というさけびがきこえたのは、あとで考えると、その恐ろしい跫音をかんちがいしたのだろうが、そのときはおれまで狼狽して、そのあとを追っかけた。

事実は、おれの途方もない絶叫に、廊下をあるいていた婦人たちがきもをつぶしてにげ出したのが、この騒動のはじまりらしかったのだが、ふしぎなことにみんな上の玄関へにげないで階下の方へなだれおちてゆく。すべては、この建物からくる錯覚だった。出口は上にあるのに、窓から眼下の海を見下ろしているので、ふとじぶんが高いところにいるようなかんちがいがあって、それでみんな下へ下へとにげ出したのである。

ところが、殺人事件はほんとうに起っていたのだ。

「亀の間」で悦子が殺され、その窓の外に津田が死んでいたのである。

おお、それはなんたる残虐無比の殺戮であったか。悦子はふとんの上で、一糸まとわぬまるはだかに剝かれていたが、眼球をひとつえぐりぬかれ、舌をかみきられ、のどぶえをくい裂かれ、下腹部は血のぬかるみのようであった。

そして、その窓の外に、津田はうつ伏せにたおれていたが、両手はまっかに血にぬれて、そ

して頭をくだかれていた。その傍に、あかん坊のあたまくらいの大きさの石が一つゴロンところがっていて、これに頭をぶっつけたものとみえるが、ふしぎなことに、一階のことだから、窓から地上まで四五尺の高さがあるにすぎず、まわりはこまかい砂利ばかりだったのである。

6

なんたる不運なことであったか！

大騒動の口火をきったおれがあやしまれて、つかまえられてしまったのだ。

あのつまらないさけび声がたたって、おれはすんでのことに真犯人にされるところだった。悦子がおれの情婦だったことはわかるし、おれが前科者だったこともあばかれるし、いやもうおれ自身が二重三重の罠におちた獣みたいにひどい目にあった。

それを救い出してくれたのが、あの志賀悠子嬢であったとは！

なんと、彼女は三階の一室に泊っていたのである。そして、私がいちども一階の方へ下りてゆかなかったことを証明してくれたのである。……いかに疑いぶかい捜査官でも、彼女の天使のように清純な眼だけは、ひと目みただけで信じずにはおれなかったろう。

一夜の取調べのあいだに糸みたいにやつれはてたおれを、彼女はやさしくなぐさめた。朝の熱海の町である。おれは涙をこぼして、おじぎばかりしていた。

「ほんとうにありがとうござんした。あなたがいてくれなかったら、おれはもうどうなっていたかわからんです」

「いいえ、あたしのせいじゃないのです。津田さんが悦子さんを殺したことが証明されたのは……あの方の爪のあいだに、悦子さんの血やら肉やらがいっぱいつまっていたからなんです」

おれは、ゲェッと吐きそうになった。

「しかし、ツ、ツ、津田は、まあ、いったい、どうして――」

「あの方は、ふつうの方じゃなかったのです。きちがいだったのです。しかも……殺人鬼だったのです。……遺伝の血が、なにかひどく興奮したはずみに、発作的に爆発したのだろうと警察ではいっていましたけれど」

「遺伝の血？」

「これをごらんなさい」

と、志賀嬢は、ハンドバッグから折りたたまれた新聞をとり出した。へんな顔でのぞきこんで、志賀嬢のゆびさした個所に眼をやったおれは、あっとおどろきの声をあげてしまった。

そこにある小さな老人の写真に見おぼえがある。それは刑務所でおれの親しくしたあの老人の顔だった。

「大殺人鬼の死刑執行」

という見出しがならんでいた。

「あの津田さんが、この老人の子供だってことがわかったのです」

と、志賀嬢は、ひくい、ふるえる声でいった。

おれは、津田という男は以前どこかで見たようなへんな感じがした理由をはじめて知って、背に水がながれるような気がした。そうか！　道理で――しかし、こちらの苦心惨憺した殺人遊戯の対象が、なんとほんものの殺人鬼であったとは！

しかし、つづいて記事に眼をはしらせたおれは、またもや脳天を槌でうたれたような思いがしたのである。

「さきに世人を衝動させた一代の殺人鬼毛利松吉（六五）は、死刑執行にあたり、さらに三十二年前、神奈川県T町における若夫婦暴行殺人事件を自供したのをはじめとし、その後、迷宮入りをした幾多の殺人事件の真犯人であったことをはじめてあきらかにし――」

三十二年前――神奈川県T町！

「こいつは、おれの親を殺した奴だ！」

と、おれは絶叫した。

志賀さんは立ちどまった。恐怖にみちた眼で、おれをじっとながめた。

「熊倉さん。……」

「おれの両親は、こいつに殺されたんです！」

「……おきのどくに」

と、彼女はつぶやいた。それから、ふかい調子でいった。

「それじゃあ、何もかも、恐ろしい天意ですのね。あなたのさけび声で人々がさわぎ出し、下にかけおりていったので、悦子さんを殺して屍体をもてあそんでいた津田さんがびっくりして窓からにげ出そうとしたんですから。……その窓からころげおちたとき、たったひとつの石にあたまをぶっつけて死んだなんて、ほんとうに恐ろしい神さまの御意志ですわ。……あたしが傍にいながら、とうとうこんな恐ろしい事件をふせぐことができなかったのも、あたりまえかもしれません。あたしは、悦子さんと津田さんが一階から上ってくるのを、じっと待っていたんですけれど……」

おれはあたまがしびれたようになって立ちすくんでいたが、しばらくしてふっと奇妙な顔をあげた。

「悦子と津田を見張ってた？　あなたは、どうして――」

「仁木さんから告白をきいて、びっくりして、事件のおこるのをふせごうとかけつけてきたのですわ」

「仁木が！」

「あのひとは、その告白を、出来心だとおっしゃったわ。出来心でわるいことをするのがふつうだが、出来心でふっとわるいことをやめることもあるのですな、と苦笑しながら。……」

「……くそ！　つむじまがりめ！」

とおれはうめいた。

志賀嬢は、白い日のひかりの中に、まぼろしの聖女のごとく微笑しながら、この「天使と悪魔とのたたかい」にとどめをさしたのだ。

「良心の出来心。それがつまりあの方の受けられた教育のおかげじゃないでしょうか。あの方は、いい方なんです。……そして、あなただって、ほんとうは」

――話はこれで終りだ。かくてこのおどけ者の悪魔は、旗をまいて、人間荘をにげてゆく。

では君の幸福なる生活を祈る。

さようなら。

第二の間借人

まぼろしの恋妻

1

新しき住人、ようこそ。

あたしは、第三の間借人です。あたしは、美しいお話をきかせましょう。

美しいお話？　いいえ、あたしは、はじめ恐ろしい話だと思っていたのです。

この事件の直後、あたしは人生というものの恐ろしさをまざまざと思い知らされたような気がして、ほとんどショックをうけました。けれど、あのひとの結婚のプロポーズをうけいれる気になったのも、そのショックのせいだと思うと、ただ恐ろしい想い出として胸に抱いてゆくのはたえきれない思いがいたします。それどころか、あたしはこの事件から受けた教訓に感謝しなければならないかもしれません。

それに――これはやっぱり美しい話にちがいありません。とくに、これから愛さなければならないひとを持つあたしにとっては、ほんとうに感動的な物語なのです。

まして、偶然発見したこの黒いノートにかかれてあった恐ろしい物語——この人間荘には、ほとんど化物ばかり住んでいるのではないかと思われるような印象を消すためにも、あたしはあの事件をかきのこしてゆく義務があるように思います。

それまで、あたしは人生というものをお伽噺みたいなものとかんがえるくせから、どうしてもぬけきれませんでした。

もともと、高校を出るとすぐ、ひとり東京へとび出してきたのも、母ひとり娘ひとりで、家の大部分をひとに貸して、それで暮してきたような身分ですから、働かずにはいられない事情もあったのですが、やっぱり虹みたいなことを夢みて上京してきたのです。

はじめ、或る計理士のところに、事務員としてつとめました。サラリーは六千円でした。そのちかくの或る家の屋根裏みたいな三畳の部屋を借りました。間代は三千円でした。

あたしはのこり三千円でくらしてきました。ひとりの若い娘が、一ト月三千円で暮す——それがどんなものか、想像がつきますか。

食べるのがせいいっぱいといいたいのです。せめて、ときどき飢えたといいたいのです。けれど、ほんとうのところ、あたしはしょっちゅう飢えていました。

それでもあたしが堕落しなかったのは、あたしが何かを夢みていたからなのです。いまに来る。何か来る、きっといいことがくる。——

そのうち、ほんとうにいいことがやってきました。あたしは有名な少女ジャズ歌手旗雲マリ子嬢のところで働くことになったのです。そこのマネージャーが、あたしのつとめていた計理士のふるい友達だった縁から、その幸運がおとずれてきたのです。

少女歌手、旗雲マリ子——といっても、年はあたしより一つ若いだけですけれど、その生活の豪奢なことは、いままで雑誌のグラビアなどで見たり、想像したりしていた以上のものでした。もっとも、あたしはその邸につとめたわけではなく、その事務所で、マネージャーに使われていただけですけれど、それでも用事があって、なんどかそのお邸にいったので、それをみる機会があったわけでした。

カーテン、ソファ、絨毯だけでも何百万円かかかったとかいう応接間、おなじお仕着せのきものをきた何人かの女中——ちょっとした現代の王女さまでした。みるものすべてが、夢のような生活でした。

人間の暮しの差も、ここまではなれると、羨ましいという気力が起るどころか、ただうちのめされるとみえて、あたしは新しい主人を、それこそ王女のようにあがめました。それに、旗雲マリ子嬢は、あたしたちにほんとうにやさしく、鷹揚(おうよう)で、サラリーも一万円にあげてくれたのです。

あたしはその当座、ただワクワクとして、何もかも感謝のきもちでいっぱいでした。……と

ころが、あたしの人生の罠は、そのときにしかけてあったのです。

サラリーが一万円にあがった！　旗雲マリ子さんのところで働く！

そのうれしさのあまり、あたしはいままで住んでいた三畳の屋根裏部屋をひきはらい、この人間荘アパート十二号室に移ってきたのです。決してきれいだとは義理にもいえないアパートですが、それでも六畳の部屋に入るということは、あたしにとって大した飛躍でした。

そのとき、当然、お金が入用になりました。引っ越しの費用、権利金、敷金など、合計二万五千円ほど余分のお金が。——いままで、食うやくわずの暮しだったのですから、そんなお金のあろう道理がありません。

こまっていると、それを貸してくれたのが、このアパートの五号室の日下部さんでした。日下部さんは、ちょいちょいあの計理事務所にくる人で、このアパートを世話してくれたのも、あの人だったのです。

「なあに、一ト月、千円ずつでも返してくれりゃいいんだよ」

と、日下部さんはいってくれました。

そこだ、そういう甘い親切が、田舎娘の罠になるのさ、とだれもがあたしを笑うでしょう。けれど、あたしだって、それほど向う見ずのばかではありません。むやみやたらにお金を借りたわけではないのです。日下部さんという人は、貧乏な娘のあたしでさえときどきからかいた

くなるような、桁はずれて気の弱い、おとなしい人でした。あとで、これをたねに、あたしをこまらせるような人では決してないと見きわめたからこそ、うっかりあたしもその親切に甘える気になったのでした。……そして、あたしのおちた罠は、実際にもっと予想外のことだったのです。

二回目の千円をかえしたとき——それを一号室の管理人関さんの奥さんに見られてしまいました。それから、関夫人は、あたしの借金のことをさぐり出したようです。そして、おせっかいにも、日下部さんの奥さんにそれを密告したらしいのです。

或る晩、日下部夫人が、血相かえて、あたしの部屋にどなりこんできました。ほんとうに鬼女のようにものすごい形相でした。

「どういうわけで、日下部から金を借りたの」

というのが、最初のあいさつでした。あたしが、金にこまった事情をうちあけても、ろくに耳にも入れません。奥さんは、それまであたしの想像もしていなかった汚らわしいことをかんがえていたのです。

「日下部とあんたと、どんな関係があるの。キリキリ白状してちょうだい！」

あたしは、顔色がみるみる蒼くなるのを、じぶんでも意識しました。

「関係だなんて！」

かっとして、あたしはさけびかえしました。

「なんてことをおっしゃるの！　そんな疑いをうけては、あたしもあたまをさげてはいられないわ。旦那さん、いらっしゃる？　いらっしゃるなら、これからいっしょにいって、日下部さん自身の口から、あたしのケッパクを証明してもらいましょう」

そしてふたりは、肩と肩をぶッつけるようにして、階下の五号室へ下りてゆきました。

日下部さんは、部屋の隅に小さくなって坐っていました。――そしてまあ、なんという男でしょう！　洪水のような奥さんの罵り声、あたしの泣き声をあびせかけられても、ウンともスーとも、一言の弁明もしようとはしないのです。よほど奥さんがこわいらしいとみえて、ただブルブルふるえているだけなのです。あたしはあきれてしまいました。

とうとう、あたしはかんしゃくをおこしました。

「もうけっこうです。お金は明日じゅうにかえします。奥さま、あたしは旦那さんと、御想像になるような不潔な関係はありませんけど、もしあったとしても、こんなイクジナシのデクノボーは、ノシをつけてもらってもいやだわ……」

「まあ！　なんてズーズーしい！」

と、日下部夫人は、卒倒するような金切声をはりあげました。

「ほんとにほんとに、このごろの若い娘は！」

さて、その翌朝早く――あたしは事務所にかけつけました。マネージャーに事情をうちあけて、サラリーを前借しようと思ったのです。つとめて二カ月たつやたたずで、ほんとうに厚かましいかぎりですけれど、ほかにしようはありません。ところが、運悪く、マネージャーは、旗雲嬢の劇場出演の打ち合わせに、昨夜大阪へ発ったということでした。

途方にくれていると、折よく旗雲嬢のお母さまが、十本の指のうち七本まで指環をひからせて事務所にやってきました。あたしは、神さまにすがりつくようにして、お母さまに訴えました。お母さまは、心から同情して、笑いながらポケットマネーを貸してくれました。

あたしは、これでひとまず窮状はきりぬけたと思いました。日下部夫妻には、金をたたきつけてかえしてやりました。

それから三日たって、マネージャーは大阪からかえってきました。その日、アパートからもどってくると、北海道の故郷から電報がきていたのです。

「ハハビョウキ、スグカエレ」

あたしはびっくりして、事務所に電話をかけました。

「こういうわけで、これからすぐ故郷へかえります。母の病気が大したことがないようでしたら、すぐまた上京してきますけれど、もしおそくなるようでしたら、お金はあちらからお送りしてお返ししますと、お母さまにおっしゃっておいて下さいませんか」

電話からマネージャーの恐ろしい声がかえってきました。

「なんだって？ ……きみ、顔に似あわないふてえ娘だな。ぼくの知らないあいだに、とんでもない人から金を借りたそうで、さっききいてそのズーズーしさにたまげていたところだ。この上マンまとふみたおして逃げようったって、そうはさせないぜ」

これが、あの洗練されたスマートなマネージャーの声だろうか、とあたしはしばらくじぶんの耳をうたがったくらい野卑な声でした。

それにしても、なんというかなしい誤解ばかり、この世の中には満ちていることでしょう。あたしは返事をする勇気もなくくずおれるように受話器をかけてしまいました。

あたしは北海道にかえりました。一ト月たって、母の病気がなおったので、また東京に出てきました。あたしは働かなくてはならなかったのです。旗雲嬢のお母さまには、あのひとからお金を借りてかえしましたけれど、クビになりました。それから、あのひとの世話で、おなじ出版社の事務員にしてもらいました。

出版社——それは、あたしにもちょっとした魅力でしたけれど、入ってみると、編輯者は三人という小さなエロ雑誌の出版社なのです。

金を借りて、就職の世話までしてもらいながら、あたしはあのひとをケイベツしてしまいました。それはエロ雑誌の編輯者だからではありません。エロ雑誌の編輯者のくせに、あのひと

にはそれらしいところがちっともないのです。あのひとはコツコツと小金をためて、人に貸して、そしてそのささやかな利子を計算するのを無上の愉しみとしているようなひとなのです。

……

あのひと——八号室の青沼さん。それがこれからあたしが結婚しようとするひとの名です。あたしは、あたしなりに、この世の恐ろしさを経験したつもりでした。それにもかかわらず、あたしが何かを「待つ」くせはなくなりはしませんでした。いいえ、なまじあの夢の国の王女さまの世界をのぞいただけに、いっそうあたしの夢は傲慢にキラビヤカになっていたのです。そんなあたしが、どうして小金をためて人に貸す、小さなエロ雑誌の編輯者青沼さんをじぶんの夫にえらぶ決心をしたか。——

けれど、あたしがその黒いノートにかこうとしているのは、あたしのことではありません。それは結局、あたしがその決心をした理由となった事件のことですが、主人公は十五号室の椎名さんの物語なのです。……

2

椎名さんのことは、第一の間借人もかいています。

「まえはきっといい男だったにちがいないが、まだそれほどの年ではないのに、ひどくやつれ

て、おびえたような眼をしている。ひとをみれば、おじぎばかりしている。毎日、埃だらけのくたびれた洋服の背をまるくして、セカセカとどこかへ出かけてゆく。……」

そして、ひとが何をしているのかときくと、「ぼくは、女房をさがしているんです……」とこたえる椎名さん。ふしぎな常人ばなれのした眼で、「ねえ、君、どっかで、……色白の、まるい頰っぺたをした若い母親が、二つくらいの女の子を乳母車にのせてあるいているのをみたことはありませんか？　それが、ぼくのどっかにいっちまった女房と子供なんですが……」とつぶやく椎名さん。

その椎名さんのことは、第二の間借人もかいています。

「そうだ、あの椎名という男は——三年の刑務所生活のあいだに、見たような気がする。はてな、どういう野郎だったかしらん？

あいつは、どうやら少々イカれているらしい。いつゆき逢っても、

『ぼくの可愛い妻と娘は、どこにいったろう？』

とかなんとか、ブツブツ、ひとりごとをいってあるいている。……」

あたしが、この黒いノートを見つけ出したのは、事件がすんだあとのごく最近のことですけれど、椎名さんがへんなひとだということは、前の間借人同様、あたしも気がついていました。変でもあるし、なぜか哀れをそそる人でもありました。

あたしが椎名さんをつくづく変だと思い、可哀そうなひとだと思い、そのくせひどく胸をうたれたようにかんじたのは、この晩春の午後のことでした。それはこのアパートの中ではなく、武蔵野の野原の中の路上のことでした。

その日、あたしは武蔵野の奥に住む或る作家を訪ねました。作家を訪ねるなどという用事は、ほんとうならあたしなどには関係ないのですけれど、人手が少ないものだから、出来てるはずの原稿をただ受けとりにゆくだけの仕事なら、ときどきあたしもやらされたのです。

用をすませて、駅へいそぐころは、もう日暮にちかい時刻でした。

くるときは、美しく晴れたおだやかな空だったのに、かえるときは、すさまじい風が、青い麦や樹々を海のように波うたせていました。黄塵（こうじん）が薄暮の空にこんとんと渦まいて遠くの森も林も、黄色い霧のなかに、死の国の風景みたいにかすんでみえました。

「寒くさびしき古庭に、ふたりの恋人通りけり。まなこおとろえ口ゆるみ、ささやく話もとぎれとぎれ。……」

あたしは大好きなヴェルレーヌの詩を口ずさんであるいていました。

「お前はたのしい昔のことをおぼえておいでか。

なぜおぼえていろとおっしゃるのです。

ああ、ふたり唇と唇をあわせた昔、

あやうい幸福の美しいその日。
そうでしたねえ」
風が耳に鳴りました。
「昔の空は青かった。昔の望みは大きかった。
けれど、その望みは破れて、暗い空にときえました」
涙がこぼれるようで、そして恐ろしい詩でした。
「からす麦、しげった中の立ちばなし、夜よりほかにきくものもなし」
突然、あたしは立ちどまりました。あたしは路の上で、思いがけなく椎名さんに逢ったのです。
数分間、あたしは声もあげずに、その姿を見まもっていました。
最初は、椎名さんがこんなところにいるなんて意外で、じぶんの眼をうたがったのですが、椎名さんにまちがいないということがわかってからも、その姿があまりに異様で、つよい好奇心にかられたのです。
椎名さんの姿は、アパートにいるときより、広い野中のせいか、いっそう見すぼらしくみえました。ヨレヨレの背広に、あの、やや凄味のある美しい顔も、埃にまみれて、病んでいるようにみえます。が、ふしぎなのはそれではありません。この眼もあけられないような黄塵の中

——ゆく人はみな帽子か腕でひたいを覆い、前かがみにあるいているのに、椎名さんだけは、あたまをあげ、必死に何かをさがしもとめているようなのです。砂の霧のなかに、その眼は大きくひらかれて、妖しいひかりをはなっているのでした。
「椎名さんじゃありませんの？」
やっとあたしはそのまえに立ちふさがりました。
「ああ、あなたですか」
と、椎名さんは眼をこちらにむけました。
「何をしていらっしゃるの？」
「ぼくは、女房と娘をさがしているんです。……」
おどろくより、このせりふはいままでに何度もきいていますし、それから、まるで往来におとしたものをさがしているような様子なのに、あたしは思わず微笑しました。
「あなたの奥さまとお嬢ちゃんが……」
しばらくあとをつづけかねて、
「このへんにいらっしゃるんですの？」
「そうなんです」
と、椎名さんはまたウロウロとまわりを見まわしました。

「七年ほどまえ、ぼくはこのあたりに妻と二つの女の子と住んでいたのです。小さいけれど、明るく、清潔で、花につつまれた家でした。……」

「そのおうちは？」

「いま、ひとが住んでいます。女房と娘は、そこにはいないのです。……」

「いったい、どうなすったんですの？」

「ぼくは……旅に出たんです。そしてもどってみたら、女房も娘もいなくなっちまっていたんです」

あたしはまるで狐につままれたようなきもちでした。しかし、椎名さんはなお夢みるようにいうのです。

「あのふたりは、まるで蒼い天から下りてきたような母子でした。じぶんの妻、じぶんの娘でありながら、ぼくは純化されるようでした。ぼくは、じぶんの人生に、これほど幸福な時期がこようとは、それまで夢にも考えたことはなかったのです。ぼくはしばしば、娘を乳母車にのせて、町へ買物に出かけてゆくふたりの背なかに、透明な翼が生えているようにながめたものでした……」

「それが、どうして——？」

椎名さんは、だまりこんで、うなだれて、ポツリとつぶやきました。

「とにかく、七年前、別れたっきりになっちまったんです」

それから、顔を覆っていうのでした。

「旅からもどってみると、もとのところには、ふたりの影も匂いものこってはいませんでした。ぼくは、ふたりがどこかで野たれ死をしたにちがいないと思いました」

うすぐらい黄塵が、朦朧とその姿を不吉につつみました。

「ところが、十日ばかりまえのことです。ぼくは或る用で、この電車にのりました。生あたたかい、うす曇りの、そして野にはふしぎに明るいひかりの満ちた午後のことでした。この武蔵野をはしる電車からみた風景は、実にふしぎで、美しい。丘をこえ、林をすぎ、ふかい山の中に入ってゆくような気がするかと思うと、ふいに忽然と幻のようにきれいな町があらわれてきます。……しかし、電車の中の客は、みんなねむっているようでした。ぼくもつかれはてて、ウトウトしていました。が、ふと窓をしめようとふりむいて——この麦畑の中の小路に——女房と娘を見たのです。……赤い乳母車をおして、たのしそうにあるいている女房の姿を……むかし通りの、買物にゆくふたりの姿を……」

あたしは、ぎょっとして息をのみました。椎名さんはかわいた唇をなめました。

「ぼくは、あそこの駅へつくと、狂気のようにとびおりて、この路をかけてきました。……けれど、ふたりの姿は、それっきりどこにもみえなかったのです。それ以来、毎日、ぼくはこの

あたりをさがしています。あの丘をこえていったこともあります。あの森の向うへまわってみたこともあります。しかし、ぼくの愛する妻と娘は、ふたたび姿をあらわしてはくれないのです。……」

あたしは、なぜかひどく感動しました。思わず、椎名さんの手をしっかりとにぎりしめたまま、声もなく、うすぐらい風の吹きめぐる武蔵野の中に、いつまでも立っていました。

3

二三日たって、あたしはとなりの志賀悠子さんにこの話をしました。

志賀さんは、女のあたしがみても——いいえ、女のあたしが見れば、男性がみるよりいっそうきよらかな姉のように思われるひとでした。あたしは何でも志賀さんに相談しました。一号室の関夫人とか、五号室の日下部夫人とか、世にもいやな女のいるこのアパートに、それでもあたしをひきとめているのは、ただ志賀さんという存在があればこそといっていいくらいでした。

「あのひとは……お可哀そうに、気がすこし変なのですわ」

と、志賀さんはかなしそうな笑顔でいいました。

「きちがいなのでしょうか。それでも、あたしは、なぜかきちがいとは思えないほど感動した

のですけれど……」

「まあ、かんがえてごらんなさい。七年前に別れたはずの奥さま、ことに二つの赤ちゃんが、七年後のいま、どうしておなじ姿であるいているでしょう」

と志賀さんはいうのです。それから、ふっとあたしをのぞきこんで、

「ごめんなさい、あなたのロマンチックな同情をぶちこわしたりして——いいえ、あのひとは、ふつうの意味のきちがいじゃあないのです。ただその一点だけ、思いつめて、気がへんになっているのです。……あのひとは、どうしてその奥さまや赤ちゃんに別れたといいまして？」

「あの、旅に出て、とかいってましたけど……」

「ずっとまえには、戦争にいってとかいってましたわ」

「まあ、それじゃあ、みんなデタラメなんですの？」

「いいえ、あのひとに可愛い奥さまや赤ちゃんがいたことはほんとうなのです。そして、それをあのひとが必死にさがしていることもほんとうなのです。……」

「志賀さん、あなたはあのひとをよく、御存じなんですの？」

志賀さんは、しばらく返事をしないでかんがえこんでいました。やがて、ほっと吐息をもらして、

「ほんとうは、あたし、知っているのです。おそらく、このアパートでそのことを知っている

のはあたしだけかもしれません。あのひとの素性がしれると、かならずきのどくなことになると思って、だまって知らない顔をしていたのですけれど、あなたには教えてあげてもさしつかえないと思います。きっとふたりで、あのひとのために何かいいことがかんがえてあげられるでしょう。あのひとの本名は、椎名ではありません。……これをごらんなさい」

志賀さんは立っていって、押入れから数枚の新聞をとり出してきました。もう色も黄ばんだ古い新聞でした。日づけをみると……七年もまえのものです。

「あたし、或るとき、これを偶然に見つけ出したの」

と、いいながらひらいた第三面をみて、あたしは思わずあっとさけびました。

「ホテルの窓から乱舞する札ビラ、狂乱の横領魔のあがき」

という大見出しとならんで、

「××省の大汚職事件発覚。被害は一千万円におよぶ」

という大活字の傍に、大きくのっているのは、一見別人かと思われるほど若々しく、ふとってはいますけれど、まごうかたなきあの椎名さんの写真だったのです。ただし、その名は椎名ではなく、船島でした。

七年前のこの事件は、あたしのまだほんの少女時代のものなので、おぼえているといえばおぼえているような、またそれからあとにいくどか起った汚職事件とこんがらがっているような

気もします。……要するに、椎名さんが「旅」といったその行先は、刑務所だったのです。

「ホテルの窓から云々」

というのは、犯行が発覚して、妻子をつれて熱海の某ホテルに逃走潜伏していた船島が、警官の急襲に自暴自棄になり、横領した金の一部をホテルの窓から外へまきちらしたという大それた行為をやったことらしく、そのホテルの窓と、室内に赤ん坊を抱いてつっ伏している女の写真ものっていました。

事件の全貌よりは、あたしは「白面のサギ師、船島の仮面をはぐ」というような記事にひかれました。

「郊外に快適な文化住宅を新築。チャッカリと愛の巣」などという記事といっしょに、前景に花壇のみえる白いきれいな小住宅の写真ものっていました。一千万円ちかい公金を着服したこの若い税金泥棒が、美しい妻と愛児と、どんなにたのしい生活をしていたか、いかにもにくにくしげにかいてありました。

それを読みながら、あたしの耳には、あの風の中の椎名さんの声がきこえました。

「小さいけれど、明るく、清潔で、花につつまれた家でした。ぼくは、じぶんの人生に、これほど幸福な時期がこようとは、それまで夢にも考えたことはなかったのです。ぼくはしばしば、娘を乳母車にのせて、町へ買物に出かけてゆくふたりの背なかに、透明な翼が生えているよう

にながめたものでした。……」

あたしはまた別の記事をみました。

「船島の前歴はハマのヨタモノ。いいかげんな公務員採用試験」

それを読むと、船島は大学を卒業しながら、横浜であばれまわった不良のひとりで、前科こそなけれ、いくどかピストルの弾の下もくぐり、異名を「ハマの豹」とよばれた恐ろしい男だったというのです。もっともそれは、終戦後まもない混乱期のことでした。

「この前歴がありながら、彼が××省の事務官となったのは、亡父の知人に同省の某官吏があり、その紹介によったものといわれるが、彼のヨタモノ時代の仲間某氏（特に名を秘す）の話によれば、彼はそのころ、その剽悍さに於て不良仲間にも舌をまかせるほどの乱暴者であったが、突然その社会から姿をくらまし、みなもふしぎがっていたところ、こんどの事件で彼が何くわぬ顔で××省にもぐりこんでいたことがわかり、一同唖然としているという。——」

それで、彼が逮捕直前、あの凄絶な札ビラの処理ぶりをみせたむちゃくちゃな行動が納得ゆくわけです。このヨタモノ時代の血がよみがえったにちがいないのです。

あたしは、しいんとするような恐怖に襲われました。椎名さんの過去の姿がこわくなったというより、その兇暴なヨタモノ、美しい文化住宅に愛の巣をいとなんでいた公務員、そしていまのあの哀れな半廃人のような椎名さんが同一人であるということに、人間の性質、運命というものが恐ろしくなったのです。

「あなた。……なぜそのヨタモノが、ヨタモノの世界から姿をけしたとお思いになる？」

と、志賀さんがささやきました。

「わからないわ。……」

「あたし、椎名さんが恋をしたからだと思うの。愛らしい恋人を得たからだと思うの」

あたしの耳には、また風の中の声がよみがえりました。

「あのふたりは、まるで蒼い天から下りてきたような母子でした。じぶんの妻、じぶんの娘でありながら、ぼくは純化されるようでした。……」

志賀さんは、もういちどふかいため息をもらしました。

「そして、あのひとがそんな大きな罪を犯したのも、その恋人——いいえ、恋妻と赤ちゃんのせいだと思うの。……」

それから、ふっと耳をすませて、

「今夜も、椎名さん、いないわね？　昨日もいないようだったし、まだ武蔵野をうろついて、奥さまと赤ん坊をさがしているのかしら？」

「志賀さん、その奥さまは、椎名さん——いいえ、船島の罪を知っていたのでしょうか？」

「おそらく、何も知らなかったと思うわ」

「それじゃあ……突然、船島がつかまって、どうしたのでしょう？」

「さあ、どうしたのかしら。むろん、家など没収されたでしょうしね。……ただ、びっくりして、うちひしがれて、赤ちゃんといっしょに、おなじように泣きじゃくりながら、どこかへにげていったのでしょう。……」

突然、あたしはコミあげるようにさけんでいました。

「志賀さん、あの椎名さんがみたという母子は、ほんとうにそのひとたちじゃなかったのでしょうか……その可哀そうな母子は、きょうも武蔵野の小路を、幻のようにたのしそうに歩いているのじゃないでしょうか？」

志賀さんは、ぎょっとしたようにあたしを見つめて、それから、

「ばかね、あなたは」

と、笑いました。……むろん、それはあたしがとりみだしたので、そんなことのあるわけがありません。

4

そのとき、階下で大きなさけび声がしました。一号室の管理人関さんの声でした。

「ええうるさいガキだな、気がちがいそうだから、どっかへつれてゆけ！」

あたしは志賀さんと下へおりてみました。玄関のところに、火のつくように泣いている二つばかりの赤ん坊を抱いて、関さんの娘さんがボンヤリと立っていました。

関さんの娘さんといっても、もう三十ちかく、関夫人とそれほど年はちがわないのですから、むろん関さんのまえの奥さんの娘さんでしょう。あたしはそれまで見たこともなかったのですが、昨日の朝突然どこからかかえってきたのです。

このアパートにふるくから住んでいる九号室の木室老人の話によると、三年前にも、それから五年ほど前にも、どこからかフラリとかえってきたことがあるそうです。けれどたいてい三四日ののちに追い出されて、またどこかにきえていったそうです。……「可笑しいことに」と木室老人はいいました。

「それが、いつも二つくらいのあかん坊をつれているんだよ。おッぱいをのませているところをみると、じぶんの子供にちがいない。しかし、まえとおなじ赤ん坊であるはずがない。いったい、まえのあかん坊はどうしたものかな」

可笑しいどころではありません。かんがえてみると、恐ろしいことでした。木室老人のいうところによると、父親もおなじとは思えないというのです。その娘さんは、あたしがみても正常なひとではない――きちがいというよりすこしあたまがぼうっとしているようなところがありました。

恐ろしいのは、その当人もさることながら、その親の関さんでした。娘と大して年のちがわないいまの奥さんに気がねをしていることもあるでしょうが、そればかりでもないようです。

あたしのきらいなことで、五号室の日下部夫婦と双璧でした。

間代をあつめにきたついでに坐りこまれて、お門ちがいの説教をなんどもきかされたことがあります。

関さんは、この世でえらそうにしている人間、幸福そうにくらしている人間は、みんなおたがいによろしくやっている狡猾な偽善者ばかりだというのが持論でした。政治家や実業家はいうまでもなく、芸術家や芸能人もそうだというのでした。「ねえ、新聞雑誌のゴシップなどをみると、この連中はみんな友情があつくて、欲がなくて、義理がたくって、気前がよくて、サッパリした快男児ないし佳人ばかりですぜ。へん、それであんなにお金がもうかるかってんだ」——だから、いつか画家が派閥で展覧会の入選作品をえらび出すのではないかという疑いをうけた日展事件の起ったときなどは、「それみたことか」と、鬼のくびでもとったようなよろこびようなのです。

関夫人の方はおせっかいな投書狂でした。あたしからみても、あのひとがひたすらに正義を愛する女性とは思えません。世の中の何にでも不平をもつ、他人の不幸に快感をかんじるきのどくなひとなのです。

「ほんとに、手あたりしだいにハラんでくる野良猫みたいなひと！」

あたしたちがおりていったとき、そういってドアをピシャリとしめたその狐のような顔がみえました。

娘さんは、あかん坊を抱いたまま、玄関にボンヤリと立っていました。暗い夜は雨にぬれています。

あたしたちが傍にちかづいても、娘さんはふりかえりもせず、かるくあかん坊をゆすりながら、雨をみていました。その顔は微笑しています。このひとは、いつもニコニコとあどけなく笑っているのです。

きているものは、ボロといってもいい着物でした。けれど、その顔には、哀しみも苦しみもあとをとどめない幸福そのもののような表情がうかんでいました。それはきみわるくもあり、ひかりかがやくようにもみえました。

「くるわ……くるわ……きっとくるわ」

ブツブツと、娘さんはつぶやいていました。

「あたし、こうして待っているのだもの……きっと、くるわ」

「ねえ、何がくるんですの？」

と、そっと傍によりそって、志賀さんがささやきました。

「何だかわかんない。……」

依然として暗い雨の往来をみながら、娘さんはケロリとしてこたえました。

「けれど、きっとあたしのところへやってくるの……」

それから小首をかたむけて、

「あ……きこえた……きこえたわ。……」

「何が？」

「あたしをよぶ声が――」

何もきこえません。きこえるのは、蕭条(しょうじょう)たる雨の音ばかりです。が、娘さんはなお夢みるような表情で、眼をかがやかせて、耳をすませているのでした。

あたしの背に、ぞーっと水のようなものがながれました。それは、このひとのあたまがまともでないことを知ったからではありません。……あたしだ、あたしとおなじことだ！　そう思ったからなのです。

わかります。この人は、何かを待っているのです。夢みているのです。野良猫みたいに追い出されては世の中をうろついて、子供をはらませられてはかえってくる。どんなに恐ろしい、かなしい思いをしてきたことでしょう。それでもこのひとは何かを待ち、夢みることをやめない性質なのにちがいありません。

「ねえ。……」

ふいに志賀さんがおし殺したような声でいいました。

「このひとにきれいなきものを着せて、あかちゃんを乳母車にのせて、椎名さんにみせてあげたらどうかしら？」

あたしは口もきけないで、眼を大きく見ひらいて志賀さんの顔をみていました。

「あの、こ、このひとが、椎名さんの――」

「ばかなこと、おっしゃい。まだそんなことをいってるの。椎名さんのあのあかちゃんが、こんなあかちゃんのわけがないじゃありませんか」

「それじゃあ……どうなるんですの、そんなことをして――」

「どうなるか、あたしにもわからないわ」

志賀さんの眼は、しかしキラキラと異様なひかりをたたえてきていました。

「けれど、何かが起るような気がするの。乳母車を押すまぼろしの恋妻……その一点だけ狂っているあのひとの頭に、何かの反応が起ると思うの。それがあの可哀そうなひとを救うすばらしい一つのトリックになるような気がしません？」

あたしの眼もかがやいてきました。あたしもふいにそんな気がしてきたのです。

「思うわ。そんな気がするわ。面白いわね、やってみましょうよ。……」

そして、女二人のこの善意にみちた突飛な智慧がどんな結果をよび起したことでしょう？

5

椎名さんは、二日たってからかえってきました。いったいそれまでどこをうろついていたものか、服はビショぬれ、足は泥だらけ、袖のあたりに麦の穂がくっついているという姿で、やつれはて、熱もあるらしく、部屋に入るとドサリとたおれるという始末です。

階段のところで見つけたあたしは、大声で志賀さんをよび、ふたりで介抱して寝かしてやりました。

翌る日は、美しく晴れました。あかるい初夏の日ざしのなかに、町は白くもえあがるようでした。ちょうど日曜日です。遠い電車の音、どこかで鳴っている風鈴の音、のどかな金魚売りの声、犬の声、それから「サッちゃんが一イ、エイコちゃんが二イ……」などいう子供の声。

——耳をすませば、そんなもろもろの声が、いっそう巷のしずけさを深めているのです。

あたしは志賀さんにいいつけられたとおり、椎名さんの部屋に入りました。志賀さんは、あの関さんの娘さんをつれてどこかに出ていったとのことです。

「やあ、どうも、たいへんな世話をかけちゃってすみません」

熱もひいたらしく、椎名さんはしきりにペコペコあたまをさげました。あの麦畑の中でみた

ときとちがって、眼は正気にもどり、あたしはこんどにかぎって、それがかえって不安になりました。

「あの……奥さまは見つかりまして？」

おずおずというと、すうっと椎名さんの眼がくもりました。

「いいえ、まだ……」

そしてあたまをかかえこみました。やがてあげた眼には、またあの異様な苦悶と錯乱の翳がただよっていました。

「しかし、女房と娘は、たしかにいるのです。乳母車をおして、どこかを——」

そのとき、あたしは窓のところに立っていました。

むこうの町角から、赤い乳母車をおして若い母親があるいてくるのがみえました。……むろん、志賀さんが美しくしたててやったあの母子なのです。

あたしは胸がドキドキしました。椎名さんのみた幻影は、あたしの知らないはずなのに、その世にも美しく幸福そうな母子の姿をみたときに、あたしはそれがほんとうに椎名さんのさがしているあの母子のような気がしたのです。

「椎名さん。……」

あたしは息づまるような声でいって、ふりかえりました。そのあたしの顔に、椎名さんもた

だならぬものを感じたのでしょう。へんな表情で、フラフラと窓ぎわに立ってきました。
そのときあたしはうしろのドアがひらく音をききました。あたしはあっと思わずさけびました。そこに二三人の警官が立っていたのです。
あたしはいまでも、なぜそのとき警官がそこにきたのかわかりません。それはあたしたちの計算には絶対になかったことなのです。が、それ以上にびっくりしたのは、椎名さんの態度でした。
「……」
椎名さんは、背後の音も気がつかぬ風で、凝然と往来を見おろしているのです。その眼はかっととび出すようでした。唇がヒクヒクとひきつり、それから——ニンマリと笑ってきました。
「見つけた。……とうとう、見つけた。……」
風のようなつぶやきが、そののどの奥から吹いて出ました。
あたしの恐怖のさけび声に、椎名さんはふりかえって警官の姿をみました。次の瞬間、椎名さんは獣のようにとびあがって押入れにかけつけたのです。そしてトランクをひきずり出し、中からおびただしい札束をとり出しました。
「ちくしょう！　おまえたちのために、金をかくしておいたのに！」

そう絶叫すると、椎名さんは、あっというまもないうちに、その札束をひきちぎり、窓から木の葉のようにまきちらしはじめたのでした。
警官たちは殺到してそのうしろから羽がいじめにしました。
「ばか！　何をする！」
「よさないか、船島！」
「横領金の一部をかくしたまま出所して潜伏してるという密告があったのはほんとうだったのだな！」
あたしは茫然とたちすくんだまま、そんなさけびをききました。
それで警官たちがやってきたのがわかったような気もし、わからないような気もします。密告……だれがそんなことを密告したのでしょう？
けれど、そんなことより、あたしの胸と眼を打ったのは窓の下のあの母親の声と姿でした。黄金色の日光の中に、雨とふる札ビラをあびながら、ウットリとしてあのひとはさけんだのです。
「あたしは待ってるわ。……あなた、あたし、いつまでも待ってるわ！」
それはたしかに正気の声でした。
あたしはこの母親が、こちらのつくりあげた仮装のまぼろしではなく、椎名さんのさがして

いたほんものの恋妻であったことを、そのときはじめて知ったのでした。

椎名さんはふたたび警察にひかれてゆきました。

あの哀れな母親が正気にもどったのはその一瞬で、彼女はふたたびもとのあたまのおかしい女にもどり、風のように人間荘を追い出されてゆきました。

あたしのお話はこれで終りです。美しい——いいえ、やっぱり恐ろしいお話です。あたしはこの人の世の恐ろしさに衝撃されました。愚かな夢は身ぶるいして捨てました。

あたしは、あたしに金を貸した男のところへ参ります。貧しい月給をやりくって、ひとに小金を貸して、利子を計算している、つましい、けなげなたのもしい雑誌記者のところにお嫁に参ります。

もうそれをケイベツなどはいたしません。ほんとうのたしかな幸福は、きっとそこから見つかるでしょう。いいえ、見つけずにはいられません。

それがあたしの夢なのです。

では、あなたの幸福な御生活を祈ります。さようなら。

第三の間借人

人間荘怪談

1

新しき住人、ようこそ。

——といいたいのはヤマヤマだが、ほんとをいうと、おれは、おきのどくさま、といいたい。そうでなければ、十二号室の押入れの壁のひびから出てきたこの黒いノートを見る人間は、クソクラエ、といいたい。

しかし、何もしらず、おれの次にこのアパートの十二号室に入ってくる奴は、きっとあるだろう。入っても、この黒いノートを見なけりゃ、知らぬがホトケで、案外ノーノーと暮してゆくかもしれん。そんなら、しあわせだ。その証拠に、おれのすぐまえには学生夫婦、そのまえにはタクシーの運転手が住んでいたらしいが、この黒いノートを見つけ出さなかったとみえて、天下タイヘイな顔で引っ越していったということだ。少なくとも、そいつらはこのノートに何もかいてない。

第一の間借人のかいているところによると、それはこのノートに何かかく一番目の男という意味だそうだから、してみると、おれは第四の間借人ということになる。

そして、その意味での第三の間借人が、こんなことをかいている。「この人間荘には、ほとんど化物ばかり住んでいるのではないかと思われるような印象をけすためにも――」とか何とかかいている。印象じゃない。ほんとうにこのアパートは、化物アパートなんだ。

実は、おれは恐ろしくって恐ろしくって、逃げ出さずにはいられない――どころか、実際にもう荷づくりをしてあるのだが、このときになって偶然この黒いノートを見つけ出したら、なぜかこの十二号室に巣くう見えない悪魔にトリ憑かれたように、こんな文章などかいたこともないくせに、どうしてもおれの見聞きした怪談をかいてゆかずにはおれなくなった。

だいたい、おれがこのアパートにくることになったわけもロクでもないことだし、第一歩からしてエンギがわるかった。

それまでおれは、田舎の或る町の螺子（ねじ）工場で、旋盤工をやっていた。もともと喧嘩が大好きで、勉強は大きらい、読むのはスリラーばかりといっていいおれが、それでも高校だけは出たのは、元軍人のおやじに尻をひッぱたかれたからだ。が、学校はもうそれでカンベンしてもらって、町工場ではたらき出したのだが、一年めにそのおやじが死んだ。おッかない頑固なおやじだったが、死なれてみれば、親一人子一人の暮しだったから、のどから何かとび出しそうで、

おれはお通夜の晩にあびるほど酒をのんで、生まれてはじめて女郎買いをした。そうせずにはいられなかったんだ。それでもなんとか葬式をすまして工場へ出たら、そこの主人が、おやじのお通夜の晩におれが女郎買いをしたという評判をもうきいていて、テメエはメカケをもってるくせに、ケントウちがいのお説教をはじめやがったから、大きなお世話だ、アカの他人におれのキモチがわかるかって、またワーワー泣けてきそうになったものだから、テレカクシにひッぱたいてやったら、たちまちクビになってしまった。

それで東京へとび出してきたわけだが、一ト月ばかり山谷のドヤ街にゴロゴロしてたら、つい文無しになっちまって、気がついたら腹ペコになって、雨の夜の場末の裏町をあるいていた。背に腹はかえられないとはこのことだ。おれは強盗をやろうと思った。

あのときはじめて知ったのだが、強盗ってものは、やられる方よりやる方がおッかないものだ。秋の雨がくびすじから背中へながれこむのに、からだがほてッて、そのくせ、足が、ガタガタとふるえた。

イザとなると、なかなか適当な場所と人間にぶつからないもので、そのうち一方が工場らしい長い塀で、一方がドブ川のさびしい通りへ出た。

塀のかげの暗いくぼみにかくれて、向うの角の電柱にボンヤリともった電球の下をあるいてくる人間をテイサツする。こんどはあまり寂しすぎて、ちょっと人が通らない。

こっちはこんなに腹をへらしてるのに、タダで電気をくってる電球までシャクにさわってきた。

一番めは、手ぶらの夜学生だ。次は四、五人つれだった酔っぱらいだった。三番めは、何だか大きな風呂敷包みをかかえているが、恐ろしいボロボロの服をきた男だった。しかも、電球の下を通るとき見えたところでは、おれよりずっと背がたかく、力も強そうだ。おれの同類か、それとも前を通ってゆくとき、プンとへんな匂いがしたところをみると、乞食かもしれん。四番めはお巡りだったので、おれはキモをつぶして、平グモみたいに塀のくぼみにハリついた。

その次にきたのが、蛇の目をさした爺さんだ。背は小っちゃく、やせて、右足をひきずるようにしているが、ちらっとみえたところでは、品のいい御隠居然として、もじりの外套をきている。

(こいつだ!)

と、おれは思わず立ちあがった。もう空腹のあまりか、待ちくたびれたせいか、腹のあたりが板みたいにかたくなって、それをホゴさずにはいられなかった。

爺さんはノロノロと歩いてきた。

「おい」

と、おれは突然とび出して、歯をガチガチ鳴らしながらいった。

「カ、金、金!」

ところが、爺さんは、どうしたのか、ワッともキャッともいわなかった。しばらくだまって、おれの方をのぞきこんでるようすだったが、

「きのどくだが、金はあまりないよ。わしは貧乏な爺いだからね。さあ、財布に五百円もあるかどうか……」

「そ、それでいい、それをくれ」

と、おれはせきこんだ。爺さんは笑った。歯がぬけているらしい。

「うちにかえると、もう少しあるだろう。いっしょにおいで」

「何いってやがる、そんなウマいことをいって——」

「大丈夫、大丈夫、安心しておいで。すぐそこのボロアパートだよ」

こういうのが、婆さんみたいに、実にやさしい声なのだ。きみがわるい一方で、おれはまた泣けそうになった。

なんだかヘンな具合になって、気勢がそがれて、おれは先に立って歩き出した爺さんにフラフラくっついていった。こんなバカな強盗ってないが、ほんとにおれはそのときキョトンとした顔をしていた。

爺さんは、途中でおれに夜泣き中華ソバをオゴってくれた。おれはほんとうに涙をこぼしな

がら、七杯くった。これで無条件降伏だ。

道々、おれの年だの、故郷だの、故郷をとび出してきたわけだの、ポツリポツリきいていた爺さんは、突然、

「おや？」

と立ちどまった。ゆく手の汚ないアパートの入口から、鉄砲玉みたいにひとりの男がとび出してきた。

「青沼さん、どうしたんです？」

と、爺さんはきいた。脳天から出るような声がとんできた。

「女房が、階段からおちて重傷だって知らせが、いま警察からあったんです！」

「な、なんですって？　どこの階段から？」

しかし、その男は、返事もしないで、走っていってしまった。

アパートの入口には、七、八人の人影があつまって、ガヤガヤとさわいでいる。それにかこまれているお巡りが、その知らせにやってきたお巡りだろう。爺さんはちかづいていって、もういちどきいた。

それによると、このちかくに何とかいう大きな月賦屋があって、そこでは月賦で、家具、衣料品、皮製品、電気器具、なんでも売っている。そこで、あの青沼という人の奥さんが、どう

したのか二階の手すりからまっさかさまにおちたらしい。

「ああ、あの手すりはひくいから、子供なんか危いと思って、あたし投書してやろうと思ってたのよ」

と、狐みたいな顔をした女がさけんだ。あとで知ったことだが、これはこのアパートの管理人の奥さんだった。爺さんも声をふるわせて、

「しかし、子供じゃあるまいし——」

「どうやら、そのちかくに三面鏡の売場があって、どこまで離れたら全身が入るかって、あとずさりしたら、おッこッちゃったらしいんですな」

と、お巡りさんはいった。

「そ、それで、怪我はどうなんです？」

「旦那さんにはいわなかったが、病院の方じゃ、もういかんといってましたが」

「ああ、あの奥さんが、可哀そうに！」

と、爺さんは涙声でいった。さっき、ひどく度胸のいい爺いだと思っていたが、あれは度胸がいいのじゃなく、生まれながらやさしいたちなんだと、おれにははじめてわかった。

さわいでいるところへ、外からまたひとり、ひどくスタイルのいい洋服を来た背のたかい男がかえってきて、話をきいてびっくりして、

「そりゃたいへんだ。ぼくも病院へいってくる!」
と、かけ出した。それはいいが、うしろを見送って、おれはなんだかへんな気がした。たしかにはじめてみる顔なのに、どっかで見たことがある。——これもあとでわかったのだが、十四号室の座光寺という人だった。しかし、座光寺なんて変った名をきいても、いよいよおぼえがないが。
何はともあれ、これが、おれがこの人間荘アパートに住みつくようになった夜の話だ。おれを救ってくれたのは、九号室の木室老人だった。

2

最初に来た夜に死人が出るなんて、まったくエンギでもないが、しかしおれはこのアパートにつれてきてもらったおかげで、刑務所ゆきをまぬがれたわけだ。
木室老人ほど親切な爺さんはまたとあるまい。おれを空いている十二号室に入れてくれ、その権利金まで貸してくれ、ちかくの町工場に就職の世話までしてくれたのだから、ホトケさまとよりいいようがないが、この老人はだれにもそうらしい。おれのつとめた町工場の主人も、むかしこの爺さんにちょっとした恩をうけたそうだ。
こんなボロアパートに住むだけあって、むろん金持ちどころか、九号室でひねもす婆さんと

内職の日本人形をつくっていて、その方ではちょっとした名人なんだそうだが、とにかく今どきのスピードじゃない、お茶をのんでるときの方が多いのだから貧乏もあたりまえだ。しかしいかにも名人らしく、鶴みたいに品のいい、アカヌケのしたいい顔をしている。
このよく出来た老人が、ほんものの娘だけは人形をつくるようなわけにはゆかなかったと嘆息するから、おれのおやじとおんなじ悲劇だ。もっとも、娘の環さんは、おれとちがって、なんと女子大を出たらしい。どんなハズミで女子大までいったのか、銀ぶちめがねをかけて、いつもツンツン月夜みたいな顔をして、とにかくおッかない三十娘だ。あんないい父親を、すっかりばかにして、いつも叱りつけてばかりいる。
「わしが貧乏な職人育ちだものだから、ついムリをして、不相応な背のびをしたバチがあたったよ」
と、いつか爺さんは愚痴をこぼした。
おれは恩をうけたせいばかりでなく、この爺さんのいうことなら、なんでも身に沁む。よく爺さんくさいお説教をするが、おやじとちがってかえってうれしいからふしぎだ。いつかこんなことをいった。
「明治の人間は、三十四十ころからもう爺い爺いしてたようだし、また自分からそうなろうとしていたように思うな。それであんな結構な国をつくったんだからおもしろい。いまのひとは

どうだい、五十になっても六十になっても大変若くって、若いのはいいが、色気の点ばかり若くって、とうとうお国をこんなにしちゃったじゃないか」

爺いは爺いらしくしろ。爺いであんまり若気のいたりみたいなことをいったりしたりするのは、きみがわるいというんだ。なるほど、木室老人はいかにも爺さんくさい。右足をちょっとひきずるのも、中風のきみがあるのかもしれない。

工場で二度めの月給をもらったとき、おれが例の月賦屋でラジオと電気コンロとアコーデオンを買いこんできたら、ひどく叱られた。それから、涙をながしながら、こんな話をしはじめた。

——青沼夫人の話だ。

青沼夫人とは、おれがきた夜、月賦屋の二階からおちて死んだ奥さんだ。——そして、いまにして思えば、それこそこの部屋の三番めの間借人、つまり、おれのまえにこの黒いノートに、

「あたしは、あたしに金を貸した男のところへ参ります。貧しい月給をやりくって、ひとに小金を貸して、利子を計算している、つましい、けなげなたのもしい雑誌記者のところにお嫁に参ります。もうそれをケイベツなどはいたしません。ほんとうのたしかな幸福は、きっとそこから見つかるでしょう。いいえ、見つけずにはいられません。それがあたしの夢なのです」

とかいた、感心な娘だ！

「それはほんとうに可愛らしい奥さんだった。そして、しッかりものだったよ。このアパートの、お前さんのいまいる十二号室からわしのとなりの八号室へのお嫁入りじゃというのでな、一本の廊下の端から端へ、七八間の嫁入り道中とは前代未聞じゃった。もっとも結婚式場は仲人役のわしがちかくの或るところを世話してあげたが、あれが戦後派式というのかな、呼ばれた人は、仲人役のわしをふくめて、みんな会費をとられたよ。それから、新婚旅行にもゆかん、その費用でミシンを買ったという。わしはひざをたたいて感服した」

と、木室老人はしゃべり出した。

「いや、若いがたいしたしッかりもので、カロリーとかミネラルとかいって、肉は安い骨か臓物ばかり買ってくる、人間には鉄が要るとかいって、売れ残りのホーレン草ばかり食うとった。わしは金槌でもかじった方がよかろうと笑ったがな。いや、はじめは感心しとったが、こんなにくまれ口をたたきたくなるほど、だんだん変なことになってきたよ。妙なところで緊ってるくせに、いやもういろいろな機械を買うこと、買うこと。——」

「機械？」

「写真機、トースター、電気ガマなんぞはいいとして、肺の衛生のためといって電気掃除器、快眠のためといってベッド、ビタミンをとるためといってミキサー……生活のゴーリ化、ゴーリ化と死物狂いにいっとったが、ゴーリ化もいいが、ちっともゴーリ化されとらんのは財布の

ほうで、これがみんな月賦屋からはこばせたもんだ」

おれは、爺さんがおれを説教するのに青沼夫人の話をはじめたわけが、やっとわかった。

「あの奥さんは、まえに流行歌手の秘書だか小間使いだかしとったそうで、そのときに見た夢が忘れられなかったのではないかな。それとも、月賦という奴はありゃ賭けごとみたいなもんで、クセになったらだんだん深みにおちる。とにかく、お金はその場じゃ大して要らんのだから、三つ月賦があれば、三つにナレて、ふっと四つめをやりたくなるものらしい。だから、ヒョイとみて、じっとその品物のまえに立ってると、フラフラと買いたくなって、どうにもじぶんでおさえがきかなくなるものらしい。そのうち、電気冷蔵庫、テレビときた。このアパートでテレビをもっとるのは、おとなりだけじゃ。しかし、まあ考えてごらん、六畳にいまの品物がみんな入るかどうか。——」

「みんな、入ってるんですか？」

「ふしぎに、入ることは入っとる。人間の一念というものは恐ろしい。わしはのぞいて、ため息をついた。ふたりとも、電気冷蔵庫に腰かけて飯をくい、電気ガマを枕にねとる始末だ。……それでも、夫婦仲はよかったなあ。あの旦那は、まったく奥さん孝行だったなあ。若いに似ず、なかなかの経済家とみたが、それが飴みたいにトロトロになって、奥さんのなすがままになっていたからね。わしはとなりの部屋をみて、あきれかえって、これじゃからだもシンケーもつまいと思ったが、ふたりともニコニコしてるから、いまの若い人は丈夫なものだと安心したが、やっぱりいけなかった。そのゆきついたさきが、あの三面鏡の災難だ。可哀そうなことをした。……」

おれもいまこの黒いノートにかかれてる、あの奥さんの結婚まえのソーレツな決意をよむと……だから娘の決心なんてアテにはならない……などとは思わない。ただカンガイムリョーである。

爺さんも、泣き笑いみたいな表情をして、

「しかし、いまになってみれば、ばかなひとたちだとは思わないね。お葬式をすますかすまさないうちに、青沼さんはその三面鏡を買いこんだじゃないか。女房がそれほど執心して死んだとあれば、買わずにはいられないといってね。わしはそれをきいて、モライ泣きをしたよ。……月賦もここまでくると、鬼をも泣かせるね。……」

これじゃ、説教が説教にならないじゃないか。

木室老人がこんな話をしてから三日ばかりたった或る夜のことだ。突然、廊下でけたたましいさけび声がきこえた。おどろいてとび出すと、八号室の青沼さんが、ドアをあけて廊下にとび出して、ボンヤリ立っている。

「どうしたんです？」

木室老人も、十一号室の志賀悠子さんも、向いの十四号室の座光寺さんも顔をのぞかせた。

座光寺さんは、どこかのキャバレーのバンドマンをしているそうだが、今夜はお休みらしい。

青沼さんはその名のごとく真っ青な顔色をしていたが、急にニヤニヤ、しまりのない表情で笑い出した。

「ああ、なんて、ぼくは幸福なんでしょう」

「きみがわるいね。青沼君」

と、座光寺さんがいった。

青沼さんは、雑誌の記者なんだそうだ。おれみたいな大して教育のない人間は、記者だなんてきくとへへーと感心してしまうが、青沼さんのやっているという雑誌は読んだことがある。すげえ、エロ雑誌だ。が、それをつくっている青沼さんは、こっちがもういちど、へへーと見なおすくらい、クタびれたキューリのような顔をしていた。あんな雑誌つくってるので、つくるだけで消耗してしまったのかもしれない。

青沼さんは、きみのわるい笑顔で、

「いや、女房が出たんです。……」

「えっ、で、出たあ？」

「ど、ど、どこに？」

と、木室老人と志賀嬢が息をひいてききかえした。

「鏡の中に」

「……」

「三面鏡の中に」

「……」

「いま、ヒョイとぼくがのぞきこんだら、まんなかの鏡と左の鏡にはぼくの顔がうつってるのに、右の鏡には、ぼくじゃなくって、女房の顔がうつって、ニヤリとぼくを見つめていたんです。……」

そして、水をあびたように立ちすくんでいる一同をしりめに、青沼さんは舌なめずりして、またフラフラとじぶんの部屋に入ってしまった。

3

三面鏡の二面だけにじぶんの顔がうつり、他の一面にべつの人間の顔がうつる。しかも、それは、その鏡への欲望のために横死した女の顔である。ああ、恐ろしい女の執念ではないか。……それがほんとうなら、おれの好きなスリラーによくいう怪奇センリツのきわみだが、おそらく何かのまちがいだろう。しかし、まちがいにしても。……

青沼さんは、とうとうイカれてしまったにちがいない。木室老人は、「若いに似ず、なかなかの経済家」なんてウマいことをいったが、アパートのほかのひとの話では、たいへんなケチンボだったらしい。そのケチが、あれほど度はずれた月賦狂の奥さんのお尻に鼻の下をながくしてしかれていたというから、よほどネツアイしていたとみえるが、その奥さんが突然死んで、のこったのは部屋をうずめる品物とその月賦ばかりときては、あたまが少々おかしくなってもムリはない。

青沼さんは、よく勤め先を休むようになった。葬式のとき、北海道から死んだ奥さんのおふくろさんがやってきて、遺骨をもってかえったが、そのときも「雑誌の〆切がせまっていますので」とかいって会社へ出ていったのに感心したが、あれが働き者としての最後の努力だったとみえて、それから二タ月もたたないうちに、ちょくちょく会社を休むようになった。部屋からあんまり出てこない。蒼い顔をして、小便だけに出てくる。しかし、いつか、何かの用事でおれがのぞきこんだら、ミシンとベッドの谷の底で、テレビの喜劇をみて、ひとりでゲラゲラ笑っていた。

おれがそのことを木室老人に話したら、

「それだって、少しオカシいよ」

と、心配そうな顔をした。

「それに夜中の一時二時にも、ゲタゲタ笑う声がするぜ。そんな時刻、テレビは何もうつしてやしないだろう？　……また三面鏡で奥さんに逢ってるのかな」

「よしてくれ、おじさん」

と、おれは手をふった。

町の電線にこがらしが鳴るようになって、突然、青沼さんはひさしぶりにオーバーをきて、ボストン・バッグをもってあらわれた。

ちょうど日曜だったので、おれは部屋で、電気コンロでパンをやいていたが、急にニクロム線が黒くなったので、けげんな顔で廊下に出てみると、斜め向うの十四号室の座光寺さんも顔を出した。

「停電ですか」

「君のところもそうか。じゃあ停電だ」

など話しているところへ、旅行姿の青沼さんがあらわれたのだ。

「おや、どこへ？」

「ちょっと北海道へ」

「ちょっと？　そりゃたいへんだ。なんか急用ですか」

「いや、女房のお墓参りをしてやろうと思いましてね」

と、青沼さんは、細ぼそとした声でいった。そういえば奥さんの故郷は北海道で、お葬式のときお母さんがやってきた。母一人娘一人らしく、泣きながら遺骨もひったくるようにもっていってしまったようだ。

「はあ、そりゃ……」

いい心がけだと他人がいうのもおかしいが、旦那がお墓参りをしてやれば、あの奥さんも成仏して、もう三面鏡に顔を出さなくなるかもしれない、と思ったが、まさかそれも口に出しかねた。

「それじゃあ、どうぞ元気でいってらっしゃい」

「北海道はもう雪なんじゃあないか」

と、口々にあいさつすると、青沼さんはキョトキョトして、

「木室さん、いますか？」

と、九号室のドアの方をみる。

「おや、知らないんですか。木室さん御夫婦は、けさ歌舞伎を立見してくるといって出かけましたよ。お嬢さんもどうしたのか、この二三日いないようだし」

「実は鍵を、あずかっておいてもらいたいんですがね」

「鍵なら――」

と、座光寺さんがいいかけると、

「いや管理人にゃわたしておきたくないんです。どうも、あの人は信用ならん」

と、ひとりごとをいって、しばらく考えこんでいたが、すぐに十一号室の志賀さんの扉をノックした。

志賀さんは在室していて、顔を出して、青沼さんの話をきいて、おなじように「それはそれは」といった。ちょっと涙ぐんで、どうぞ、あたしの分もお参りしてきて下さいましねなどといっている。

すると、――あとで思うと、あれが虫の知らせというものであったろうか――青沼さんは、実に不吉な妙なことをいい出したのである。

「ありがとう、ありがとう！　ほんとうに、女房は、ぼくの女房になるまえからあなたの親友でしたねえ。女房は、しょっちゅうあなたの話ばかりしていましたよ。――」

「妹のような気がしていましたわ。あんないい方が、なんて運のわるい――」

「このアパートは呪われてるんです。ずっと以前に三号室の刈部夫人があたまを石でわられるし、十三号室の山名さんは階段からおちて死んだし、四号室の津田君は、温泉にいって、高いところからおちて石であたまを割る。そして女房も月賦屋の二階からおちる。同じ手口です。……」

「手口って？　まるでだれか犯人がいるみたい。……」

「いや、犯人はわかってるんです。刈部夫人をやっつけたのは二号室にいた高力という三文作家、山名さんを殺したのはその十二号室にいた夜学生、とね。……」

志賀悠子嬢はだまって青沼さんをみている。しかしその眼は恐怖でいっぱいであった。

「あなた、山名さんを殺したのが、あの夜学生の方だったなんて、どうして御存じなんですの？」

「女房が話してくれましたよ。それもあなたへの恋のためだったんですってね」

「まあ」

「といって、あなたに責任はないけれど……いや、ぼくのいいたいのは、そんな相つぐ惨劇の個々の犯人じゃなくって、その背後に感じられる呪いの神の影なんです。同じ手口というのは、その神の手口の意味なんです。……」

「あなたのおっしゃること、ちっともわかりませんわ。……」

と、志賀さんはかなしそうにいった。青沼さんははっとわれにかえって、

「あっ、ぼくはこんなことをいいにあなたを呼び出したわけじゃなかった。実はあなたにおねがいがあるんです。ぼくの部屋の鍵をね、留守ちゅう木室さんにあずかっておいてもらいたいんだけど、いまいないらしいから、もどったらこれをわたしておいていただきたいんです。

……」

と、鍵を志賀さんにわたした。

「はい、承知しました」

「木室さんは、おつとめがあるわけじゃなく、たいていひるまいらっしゃるから――というのは、実はぼくはまだたくさん月賦の未払いがあるので、旅行がながくなって、もし払わないと、月賦屋の方で品物の回収にくるかもしれない。しかし、大部分支払いずみのものもあるから、ただ回収されちゃ損ですからね、あと少しはらえば、その品物は完全にこっちのものになる。そこのところを木室老人に御一任しますとお伝えねがえませんか？」

「御一任というと？」

青沼さんは、モジモジして、

「つまり、木室さんに立て替えておいていただきたいんで……」

座光寺さんが、おれの横ッ腹を肘でつッついて、小声でいった。

「チャッカリしてるな。……」

「鍵ならこっちにあずけておいてもおなじだろうと思って、ずいぶん信用がねえなといままで考えてたんですがね。……」

「そんな御一任ならゴメンだよ」

なるほど、木室老人なら、それくらいのことはやってくれるかもしれない。さすがに面とむかってはたのめないから、存外木室さんが留守と知ってのうえでの、図々しい伝言かもしれん。青沼さんも気がとがめたとみえて、弁解した。

「もしぼくが永遠にかえらなかったら、むろんその品物を御老人がどう処理して下すってもけっこうですといって下さい」

「あら！　永遠にかえらないなんて！」

「いや、これは冗談です」

そして、青沼さんはもういちどおれたちに別れの挨拶をして、フラフラとアパートを出ていった。気のせいか、そのうしろ姿の影がうすいようだった。

夕方になって、木室老夫妻が芝居見物からかえってきた。おれは、志賀嬢が木室さんに八号室の鍵と青沼さんの伝言をつたえているところにゆき逢った。

「はてな」

と、それをきいて、木室さんはくびをかしげた。

「その伝言はおかしいな。いくら北海道へ女房の墓参りにゆくからって、そんなに長くかかるわけがわからない」

「あたしもへんだと思ってきいてたんですけど。……」

「お嬢さん、あのひとが永遠にかえらないってのは、そりゃ冗談じゃないんじゃないか」

「えっ」

「まさか、あのひと、死んだ奥さんのお墓のまえであとを追うつもりで出ていったのじゃあるまいね？」

「まあ、どうしましょう？」

と、志賀さんは顔色をかえた。

そこへ、座光寺さんも顔を出す。頭をあつめて話しあっているうちに、だんだん不安の度がましてきた。両手をねじり合わせてだまっていた志賀さんが急にいい出した。

「どなたか、北海道へ追っかけていって下さる方はないでしょうか？　あたしがゆくといいんですけれど、都合のわるいことに、四五日ちゅうにどうしても埼玉県までゆかなくちゃならない仕事があるんです。むろん、旅費はあたしにもたせていただいて。……」

「しかし、あなた、ただ北海道とだけで、青沼さんのいった先がおわかりか」

と、木室老人が眼をまるくしていった。

「ええ、亡くなった奥さんから、まえにきいたことがあるんです。部屋の手帳をみれば、わかるんですけど、なんでも苫小牧のちかくでしたわ」

「旅費が出るなら、ぼくがいってもいいな」

と、座光寺さんがいった。

「あなた、キャバレーは？」

「いや、どうも不景気なバンドでね、いっても足代が出るか出ないかっていうようなありさまだから」

「あんた、そうして下さるか？」

と、木室さんはしっかりと座光寺さんの手をにぎって、それからくびをたれた。

「いま、志賀さんが、ありがたいことをいって下すった。わしも一ト肌ぬがなくちゃあいけないところだが、こういう話で、恥をうちあけます。実はきょう出かけたのはお芝居じゃない、病院なので、娘が流産したのです」

老人は赤い顔をした。娘さんはオールドミスのはずだったから、みんなびっくりしてしまった。

「その経過があまりよくなくって、情ないことに、いまのところわしは身うごきがつかんので……」

こういうわけで、すぐ座光寺さんは志賀嬢から旅費をもらって北海道へ立った。

――ところが、翌日の夜である。おれは実にわけのわからない事件にぶつかってしまった。

工場の主人の命令で、上野の銅線屋に使いにいったのだが、ひどい吹き降りだった。その中を、或る交叉点にくると、向うにグデングデンに酔っぱらったひとりのルンペン風の男をみた。

それが、なんと、北海道へいったはずの座光寺さんみたいにみえたのである。

はっと思ったとき、シグナルが赤に変って、眼のまえを自動車の大群がはしり出し、信号が青に変ったとき、もうその男の姿はなかった。

その夜の嵐は、珍らしい冬の颱風だった。颱風は北上して、津軽海峡でたいへんな惨事をひきおこした。あの誰でも知っている、青森を出航してまもなく沈没した十二月七日の青函連絡船阿寒丸の事件だ。

4

阿寒丸事件をつげるラジオの臨時ニュースがあったのは、そのあくる日、おれが工場からかえった直後だった。びっくりして立ちあがったところへ、木室老人がとびこんできた。

むろん、二日まえに北海道へ旅立ったふたりの知人があるのだから、これはことだ。

「しかし、青沼さんはもう北海道へわたっちまったあとでしょう」

「わしもそう思う。が、あの座光寺さんは？」

おれは、眼を宙にすえてしまった、昨夜の上野駅ちかくの交叉点の怪を思い出したのだ。

「途中で道草をくっていなけりゃ、あのひとも北海道へいってると思うが」

「それがね、木室さん、妙なことがあるんですよ」

と、おれは昨夜のことを話した。
「まさか？　……なにかの見まちがいじゃろ？」
爺さんは笑い出した。
「キャバレーのハイカラなバンドマンで、現在は不景気じゃとはいえ、このアパートでいちばんりっぱな背広をきとるあのひとが！」
そういわれれば、おれはあたまをかいてひっこむよりほかはない。
あくる朝、新聞をみると、阿寒丸の乗客千百十三人はみんな溺死している。そして、東京都関係の乗客名簿をみて、おれはあっと声をあげてしまった。青沼さんの名が、そこにあったのだ！
おれは新聞をもって、木室さんの部屋にかけこんだ。木室さんの老妻は、あれ以来娘さんの入っている病院に泊りづめだとかで、部屋には爺さんひとりだった。
「木室さん、青沼さんが死んだよ！」
「わ、わしもいま見てびっくりしとるところだ。本来なら、もう北海道へわたっているはずなんだが、してみると、東北のどこかに途中下車でもしていたのかな」
「……なんてことだ、夫婦そろって、運のわるい人だなあ！」
「しかし、座光寺さんの名はないようだね」

――翌る日の夕方、くたびれたような顔で、その座光寺さんが帰京してきた。くたびれていても、やはり立派な男前で、あのルンペン姿など想像のしようもなく、おれはばかなことを考えたものだと苦笑いした。
きいてみると、青森まではいったが、空模様があやしく、海が荒れそうだというので、船によわいたちだから、市内に一泊したら、阿寒丸があの海難で、胴ぶるいして逃げかえってきたという。――
「しかし、その阿寒丸にはさきにいった青沼さんが乗ってたんだね。もし、ぼくも乗ってたら、見つけてひきずりおろしてやったんだが」
と、座光寺さんはくやしがった。
「そういえば残念だが、まあ、あのひとはよほど死神にとり憑かれていたんだな。あんたの運がよかったんだと思うよりしかたがない」
と、木室老人はいった。
「ぼくなんかより、もっと運のいい連中もいましたよ。ホテルにドヤドヤ十人あまりおしかけてきましてね。いちど船にのったがなかなか出港しないので、イヤ気がさして、タラップを下ろしてもらって下船したって連中が――」
その幸運な人々の話も、きょうの新聞に出ていた。それらの人々の名は、きのう死亡者の中

に出ていて、きょうとり消されている。しかし、むろん青沼さんは、その中に入ってはいなかった。

「せっかく旅費までもらいながら、申しわけないことになっちゃった。志賀さんにあやまらなくちゃならないが――」

「志賀さんは、けさからいないが、埼玉県とかへ」

「ところで……青沼さんも奥さんも死んじゃって、あの遺産はどうするんです？」

と、いままでヤケに恐縮していたくせに、座光寺さんは急に薄情なことをいい出した。が、まさに遺産だ。おれも、青沼夫妻をきのどくだと思う一方で、少なからぬ興味をもった。

が、爺さんはもういちど新聞をみて、くびをふった。

「まだ、そんなことを考えるのははやい。青沼さんが死んだということがハッキリせんうちは。……早まって、妙なことをして、ヒョッコリ本人がかえってきたりすると、一任されたわしの立つ瀬がない」

翌る日、志賀嬢がかえってきたが、彼女とて座光寺さんを責めるわけにもゆかなかった。

阿寒丸の溺死者は、続々とひきあげられているらしかった。海におちて、漂流中のもの、船内にとじこめられて死んだもの――そのたびに、死体と姓名が、青森におしかけた遺族に確認されて、新聞に発表された。しかし、一日、二日、まだ青沼さんの名は出なかった。

万一――と、理由もなくかけていた期待は、三日めに破られた。なんと青沼さんは、北海道苫小牧の沖合までながれていって、その沖で漁船にひろわれたのである。ポケットの名刺からその名がわかり、勤務先の雑誌社の社員がいって確認したと新聞に出た。

それを読んだとき、おれはゾーッとした。青沼さんの奥さんの故郷が――したがって、お墓が苫小牧にあることを思い出したからだ。青沼さんは死骸になってからも、はるばる海をわたってそこに近づこうとしたのだろうか。

おれは、その晩、悪夢をみた。灰色に濁った北の海の、うすぐらい、わびしい潮けぶりの底を、あの長い髪の毛と藻をもつれさせながらながれてゆく、蒼い青沼さんの顔を。――その胸の上には、一羽の大きな鷗がとまっていた。……

――さて、そうなると、あらためて青沼夫婦の「遺産」が、アパートじゅうの物凄い関心のまととなった。

ところが、その鍵をあずかった木室老人がいうのだ。

「いや、あの部屋はあけてはいかん。青沼さんの会社の方にきいたところ、あのひとにはまったく身寄りがないらしいので、北海道の奥さんのおふくろさんの方へ手紙を出してある。あのおふくろさんがおいでなさってから、鍵をわたした方がまちがいないから」

いかにも、むかしのひとらしく、律儀な考えだ。

そういってから、四、五日たって、或る夜おれがアパートにかえってみると、入口のところに管理人の関夫人が立っていた。病院へ出かけた木室老人を待っているのだという。

「何の用です？」

と、きくと、彼女は一通のハガキをふりまわした。

「北海道から、木室さんに来たんです。青沼さんの奥さんの遺骨をもってかえってから、おふくろさんはどっと床についてしまって、ここ一ト月くらいは絶対安静だというんです。それでアパートの管理人に立ちあってもらって、品物を処分してその金を送ってもらいたい——といってるんですけどね」

他人あてのハガキを読んで、大いに意気ごんでいるところが、いかにも関夫人らしい。

そこに、木室老人が、ヒョロヒョロとかえってきた。関夫人がそのハガキをつきつけると、老人はかなしげにくびをふって、ケロリとしていった。

「実は、その鍵をいまとられてしもうた」

「えっ？」

「そこの工場わきの暗い路をもどってきたらな、ふいに乞食みたいな大男が覆面してあらわれて、財布ごめもっていってしまったわ」

おれは棒立ちになってしまった。あたまにキーンとなにかつきあげてきたような感じだった。

乞食みたいな大男……はてな、それは、おれがいつか——いや、このアパートにきたはじめての晩、おなじところで見た奴じゃなかったか？

そう思い出したのは、部屋にもどってからのことだ。しかし、そのほかにまだ何かあたまに腫物（はれもの）みたいにかたまったものがある。霧のようにけむったものがある。……その正体が、どうしてもわからないのだ。

（あれは何だったかしら？　あれは……）

しかし、おれ以外のアパートの連中は、むろん木室老人のいうことを信用しなかった。合鍵なんてしゃれたものはないから、それをつくるにしても一週間くらいかかるとのことで、関夫人は、きこえよがしにいっていた。

「いくら死んだ人に鍵をあずかったからって、まるでじぶんのものみたいに……品物をひとり占めになんか、絶対させやしないから！」

それなのに、なんと木室老人は、実に妙なことをはじめたのである。鍵をとられてから二日めに、彼はどこからかリヤカーをひいてもどってきたのだ。リヤカーには、風呂敷づつみが山のようにのっていた。それをはこびあげるとき、ちらっとみたら、それは洋服やカメラや電気ガマやミキサーやトースターなどらしかった。妙に長いものは、電気掃除器だったにちがいない。

木室老人は、いったいどうしたのだろう？ 娘さんが入院して、金もないはずだし、だいいち、それらのものはいつか爺さんが笑ったものではないか。いや、青沼夫妻が熱烈に月賦で買ったものとソックリではないか？

「木室さん、ど、どうしたんです？」

と、あっけにとられてきくおれに、

「なに、お前さんの知ったことではない」

と、爺さんは気むずかしい顔でいって、それらの品物をじぶんの部屋にはこびこみ、ドアをバタンとしめてしまった。

5

学校が大きらいだったほどであって、なんというおれのあたまの悪さか？

おれが突然ねどこからとびあがったのは、その真夜中のことだった。木室老人のふしぎな行動について考えあぐね、くたびれてついウトウトしかかったとき、はっとおれのあたまにひらめいたことがある。

おれはスタンドをつけようとしたが、電気はつかなかった。停電らしい。が、闇の中に、おれは腕ぐみをして坐ったまま、ひかりみたいなものをハッキリと見ていた。胸が、ドキンドキンと鳴っていた。

そのとき、どこかでかすかに何かきしむ音がきこえた。それから、ひどくはばかりつつ、何かが廊下をうごいてゆく気配を感じた。耳をすませたおれには、それが十四号室から八号室へあるいてゆく音だとあきらかにわかった。

おれは部屋をぬけ出して、八号室のまえにしのびよった。ドアに耳をあてると、中からたしかに物音がきこえる。

おれはいきなりドアをひきあけた。鍵のかかっているはずのドアは、パッとひらいた！

闇のむこうで、あわてて だれかが立ちあがったようだ。おそろしい沈黙が凍りついて、しばらくして、スルスルと何やらすべる音がきこえ、バサリとおちた。いまうごいたもののために、布きれか何かがすべっておちたらしい。それを合図に、

「だれだ？」

と、おし殺したような声がきこえた。

「おれです。……座光寺さん」

向うはまただまりこんだが、やがて怒った声で、

「きみ、何しにきたんだ」

「あなたこそ、何しにこの部屋へきたんです」

「きみに答える必要はない、かえりたまえ」
「あなた……木室さんから鍵をとった強盗は、あなたですね？」
おれは、さっき、やっとその強盗——おれがこのアパートへきたときに逢った乞食が、あの上野駅ちかくの十字路でみたルンペンとおなじ人間だったことに気がついたのだ。あれはやっぱり座光寺さんだったのだ！
しかし、それでいよいよこの男の正体がわからなくなったことも事実だった。
「まだききたいことがある。……あなた、ほんとうに青森へいったんですか？」
「な、な、なぜそんなことをきくんだ？」
「あなたが北海道へ発ったあくる日の夕方、おれは上野駅ちかくで、あなたによく似た酔っぱらいのルンペンを見たんだ」
座光寺さんはまただまって、それから小さな声でいった。
「そうか。……実は、ゆかなかった」
おれはあきれてしまった。それでまあ、よくも青森のホテルに泊ったなんて、あんな話ができるものだ。
「新聞を読んで、青森のさわぎを想像して、あんなことをいったが……こいつは空出張といってな、役人のよくやる手だ。しかし、役人とちがって、ゆかなかったのにはわけがある。実は、

おれはな、まえから……あの木室って爺いをタダモノじゃないとにらんでいたんだ。あいつはこの部屋の鍵をあずかってるが、ここの財宝を横領するおそれはなかろうか、こいつはちょいとうかつに東京をはなれるわけにはゆかんぞ、と——」
息づかいが、シドロモドロにみだれているようだった。
「いったい、あなたはどういう人なんです？」
「おれか。おれは……私立探偵だ」
「えっ、探偵？」
「そうさ。だから、あんな服装をすることもあるんだ。わかったか」
——すると、そのとき、どこかでクックッと笑う声がきこえた。破れ障子の風にはためくように、きみのわるい笑い声だ。それは壁ぎわのベッドの下からきこえてくる。ふたりはとびあがった。
「だ、だれだっ」
「わしじゃよ」
と、木室老人の声がきこえた。
「こりゃおかしい。探偵だとは、恐れ入った。コソ泥め」
「コ、コソ泥？」

「おまえさんの商売は、ズーッとむかしから泥棒じゃないか。リューとした洋服で出ていって、泥棒をやり、またリューとした洋服にもどって、かえってくる。……今夜は、さてどっちの姿をしとる？　まあ、電燈をつけろ」

フラフラと手さぐりにスイッチをひねったおれは、あわてて、

「電燈は、停電ですが……木室さん。あなたは――」

と、あえいだ。

「どこから入ってきたんです？」

「このベッドの下の壁に、きょう穴をあけたのさ。となりのわしの部屋からな。……しかし、わしをタダモノではないとは、さすがにジャの道はヘビで、よく見ぬいたなあ。……フフフフ」

「ジャの道は、ヘビ？」

「じゃから、わしは後輩のやることをいままで眼をつむって、知らん顔してやったのさ」

おちつきはらった、やさしい声だ。おれは、おれがこの爺さんに強盗をしかけた夜のことを思い出して、ゾッとした。

「もっとも、いまはただの人形づくりだがな。……大正時代、東京じゅうをふるえあがらせた霞小僧とはおれのことだ」

パッと電燈がついた。

ベッドの向うで、木室老人はニヤリと笑っていた。いつもとおなじ好々爺の顔だが、なぜか物凄い妖気みたいなものが全身をつつんでいた。イヨウ！　大先輩！　といいたいような姿だった。

立ちすくんだまま、しかし座光寺は奇妙な顔で、キョロキョロまわりを見まわした。木室老人は、歯のぬけた口で笑った。

「おとといの夜、てめえの盗み出したものが、みんなあるのでおどろいてやがる。はははは、おれがもとにもどしておいてやったのよ。おめえが売りはらった電気ガマ、洋服、ミキサー、電気掃除器、みんなおれがゆきさきをつきとめて、失敬してきて、この穴からかえしておいた。てめえ、調子にのって、今夜はもちっと目方のかかるものをはこび出そうと、また入ってきやがったんだろ？　これらの品物をそろえたおひとのあの苦労をかんがえてみろ。人情がなさすぎるぞ。……おれは死んだ奥さんのおふくろに、金にかえては送らねえ。この品物を送ってやるつもりだ。ただそのためには、月賦の残りを払わなけりゃならん。そのためには、せッせと人形をつくらなけりゃならん。そのためには、ちっと日数がかかる。……」

爺さんのいいかたが、例の説教調になった。

「てめえ、志賀のお嬢さんから金をもらって、みんな飲んじまいやがったんだろ？　そこへた

またま船が沈んで、その死人の中に青沼さんがいたものだから、こいつはしめたと、ノコノコ手ぶらでかえってきやがった。そこまでは、まあいいが、こんどは死人の品物を狙うとは、あきれた野郎だ。このごろの泥棒は人情がなくって、智慧もなくって、メチャメチャだ。わしは、歎かわしいぞ。だいたい、むかしの泥棒は……」

「まけた、爺さん。……」

と、座光寺はヘナヘナとくずおれて、電気ガマに尻もちをついて、感電したみたいにまたとびあがった。

顔をしかめながら、へんな笑顔をつくって、

「しかし、爺さんのむかしが大泥棒だったというなら、話は簡単だ。――どうだ、ここで手をうって、三人、山分けとゆかねえか。なあ、先輩。……」

そのとき、おれはうしろに何か異様な気配をかんじた。何かがうごいたわけではない。音がしたわけでもない。……それなのに、何かをかんじたのだ。ふりむいて、おれは、

「……」

かっと眼をむいたきり、声も出なかった。ギャッという声が出たのは、座光寺ののどからだ。

そこの三面鏡の一面だけに、青沼さんの蒼白い顔が浮かんで、じっとこちらを見ていた！

それは一秒足らずなのに、その逆立った髪、かなしげな眼、ポカンとあけた黒い口まで、ハ

ッキリみえた。と、その顔は向うをむき、遠ざかり、何十人という人影が、浜辺の風の中に立って、荒れ狂う海をみている風景になった。

それは、部屋の一方にうつっているテレビの反射だったのだ。

おれはとび立っていって、ツマミをひねった。声が出はじめた。

「……悲劇の翌朝、津軽の海の浜辺に立って、もはやかえらぬ人々を呼んでいる遺族たち。――これもまた、今年さまざまの事件のうち、私たちの胸に忘られぬ想い出をのこす一つでありましょう。……」

そのアナウンサーの声をかきけすように、座光寺はもういちど尻もちをついて、泣くような声をはりあげた。

「ゆるしてくれ！　ゆるしてくれ！　ここの品物はもう盗らねえから！」

それは「今年の回顧」と題するテレビのニュース番組だった。

あとになってわかったことだ。……あのテレビは、あのときはじめてうつり出したのではない。青沼さんが旅に出てから、ずーっとうつりつづけだったのだ。それが、覆いのために外からかくされて、声も出さなかったから、それまで気づかれなかったのだ。

OFF-ON VOLUME のツマミはかるくうごく。これがまわると電源が入り、映像がうつる。

そこをさらにちょっとまわすと音が大きく出はじめるが、青沼さんが出かけるとき停電していたので、彼はうっかり、テレビは切ってあるものと思って覆いをかけたのだ。その覆いがツマミにふれて、また、映像だけがうつるところまでうごかしたにちがいない。……

無人の部屋で闇黒の中で、主人公二人は死んでいるのに、その死人の執念の炎のように、音もなく、何日も何日もひとりでうつっていたテレビ。――

が、おれがギョッとしたのは、その恐ろしさの第一波が去ったあとだった。はてな、青沼さんは、死んでいるはずではないか。もはやかえらぬ人々を呼んでいる風景の中にいるはずはない。そのかえらぬ海底の船から、苫小牧の沖へながれていったはずではないか？　あれは、やっぱり幽霊なのだ！

けさ、木室老人が妙な顔で入ってきて、ボソボソという。

「おかしいぞ。あのテレビはたしかに切ってあるのに、昨夜、八号室で男と女のたのしそうな笑い声がケラケラきこえたが――」そういう木室の爺さんそのものが化物じみた顔だった。

おれはにげ出す。こんなお化けアパートには、もういられない。

だが、――この黒いノートのオキマリらしいから、次の間借人にあいさつだけはのこしておく。お前さんの幸福なる生活を祈る。チキショウ、さようなら！

第四の間借人

殺人保険のすすめ

1

新しき住人、ようこそ。

私は第六の間借人である。私は恐ろしき「運命の物語」を御紹介したい。

「運命」などという言葉はあんまりクラシックで、いまではベートーヴェンの音楽くらいしか愛好する人もあるまいが、それなら「偶然」といってもよろしい。運命とはすなわち偶然の集積だからだ。

「偶然」とは、軽い言葉だ。人は、「偶然、銀座のビヤホールで課長と逢った」とか「そこを出たら、偶然、課長がバナナの皮にすべってころんだ」という具合につかう。「偶然失恋した」とか「偶然頓死した」とかいう風にはつかわない。

しかし、人間は偶然に戦争さえするのだ。ヒットラーが生まれなかったら、第二次世界大戦は起らなかったかもしれない。そしてヒットラーの両親のベッドに蚤が一匹いたら、母親の姿

勢がかわり、父親の何億という精虫のうちの別の一匹が卵管内をおよいでいって、ヒットラーは生まれなかったかもしれない。そしてその蚤は……私は冗談をいっているようだが、ほんとうに厳粛にいっているのだ。

私の結婚も偶然であった。私はもし上京しなかったら、妻となるあの女に逢わなかったにちがいない。しかも、あのとき上京しなかったら、あの女のいた会社に就職できなかったにちがいない。そして、あのとき上京したのは、田舎の町でふと汽車を見たからである。その町へいったのは、村の路をあるいて、サーカスの広告紙が足にからまったからである。サーカスの広告紙が足にからまったのは、風が。……

こんなことは、実はわかりきった話かもしれない。お伽噺などにも、針一本ひろったために大変な幸福を得たとか、針一本車からぬけていたために種々の難儀に出会うとかいった話がよくあったようだ。しかし、大昔からすべての人がかんじているこの思想を、あらためて私に、恐ろしいほどの新鮮さでよみがえらせたのは、このアパートの十四号室の住人座光寺君の新商売の宣伝をきいたのが原因だ。

その座光寺君の話さえきかなければ……座光寺君に逢わなければ……このアパートに私が住むことにならなければ……私はあんな目にあうこともなく、またこんな文字をつらねることもなかったわけだ。

そして、考えてみると、私がこの十二号室の第六の間借人になったのも実に偶然だった。私は住むところをさがしていたが、別にこんな汚いアパートの一室を借りる気はなかった。

十日ばかりまえ、このアパートの外をとおりかかったら、窓から薬罐がとんできた。よく晴れた春の午後で、それはハッキリ見えたのだが、私は一方の眼が義眼で他方が近視だから、目測をあやまって、薬罐が眼鏡にぶつかり、レンズの破片がまぶたをきって出血した。薬罐をなげたのは、階下の五号室の日下部夫人である。むろんこの砲弾の目標は窓ぎわにあたまをかかえていた日下部氏だが、ひどい夫婦もあったもので、私の災難をみても知らない顔であったが、そのとき二階の十一号室の窓から志賀嬢が見ていて、あわててかけ出してきてくれたのが、私がこのアパートに悪縁をむすぶようになったもとなのだ。

しかし、志賀さんは、実に親切なお嬢さんだった。かけ出してきてすぐにアパートにつれこんだ。

「お気をおつけになって……、この階段はあちこち腐って、ほんとにあぶないんですのよ。ずっとまえ、ここから落ちて亡くなった方さえあったんですから」

「はい、ありがとう」

そして彼女は、私をじぶんの部屋につれこんで、まぶたの傷の手当をしてくれた。

私はこんなひとのいるアパートなら住んでもいいと思った。きいてみると、偶然、となりの

この十二号室が空室だという。――
　こういうわけでこの人間荘に住むことになって、その結果、けさ、座光寺君の珍説をきくことになったわけである。座光寺君は、廊下で志賀さんをつかまえて、こんなことを話していた。
「どうも毎日すみませんね」
「いいえどういたしまして」
「毎日、新聞を借りながら申しわけありませんが、どうもこのごろの新聞は面白くないですね」
「ほほ、あたしがつくっている新聞じゃあないから、どうにもしようもないわ。――でも、どうして？」
「人殺しがないもの」
「あら、それなら結構じゃありませんか。あたしなんか、どうして新聞はこう人殺しや火事や汚職の記事ばかりで紙面をうずめるのが、好きなのか、もの申したいくらいだわ。まるでこの世が犯罪にうずまってるみたい。――世の中がこんなにザワザワトゲトゲしているのは、きっと新聞の責任もあってよ」
「美談ばかりでうずめたら、だれもたいくつして、新聞は買わんでしょう」
　座光寺君という十四号室の男は、実にえたいのしれない人物だった。何をしているのか、わ

からない。――
　この黒いノートを読んではじめて知ったのだが、第一の間借人にその「洗練された洋服」を讃えられたこの男の正体は、第四の間借人の曝露するところによると、なんと泥棒だったらしい。
　それが、このごろ泥棒できない事情ができて、「目下、失業中」というわけだ。第六の間借人たる私のみたところでは、その洋服は垢に洗練されて、彼が以前に夜の商売中に変装していたらしい姿を、まっぴるまからさらしものにしている。新聞さえも志賀嬢に借りて読むしまつだから、窮境は察するにあまりある。
「しかし、全然人殺しがないこともない。四つ五つはのってますな。面白くない日でこうだから、ぼくの殺人保険は、きっと成り立つ商売だと思うがなあ」
「またあの話？　ばかばかしい、あなたずいぶんその話をしつこくおっしゃるけれど、すこしは本気なの？」
「本気も本気。……人間貧乏すりゃ、何でもやりますさ、命売りますってかいた紙を胸にブラ下げてあるく男さえあるんだもの、それにくらべりゃ、殺人保険はだいぶ高等の智慧ですよ」
　私は扉（ドア）をあけて、廊下に出てみた。
「おはようございます」

と、志賀さんは笑いながらお辞儀をした。

「やあお早う。ところで、座光寺君、いまおかしな言葉をふと耳にしたが――」

「へへ、殺人保険ですか」

「そうそう、人に殺されたときのための保険ですか？」

「それならふつうの生命保険ですよ。ぼくのいうのは、人を殺したときの保険なんです」

2

ラクハクせる泥棒、座光寺君は、妙に真剣な表情で言い出した。

「ごらんなさい、ここに四つほど人殺しの記事がのっているでしょう。第一は、酒場で酔っぱらって喧嘩をはじめ、ビール瓶で相手をなぐり殺した男。第二は、ええと、これだ、返事のしかたがわるいと叔父に叱られてかっとなって締め殺した青年。第三は、女の子をひき殺したタクシーの運転手。第四は、突然気がちがって出刃庖丁で母親を刺し殺した出戻りの娘……」

「それがどうしたんです。ありふれた事件じゃあありませんか」

「そうでしょう、この世の人殺しの大半は、まあこんなものです。五年かかって人を殺すなんて思慮メンミツな奴は、探偵小説の中にしか出てきやしませんよ。実際あり得る人殺しの九分九厘までは、計画的より、突発的にやるもんです。つまり、朝起きてみたら殺人者になっていた。……」

「朝起きてみたら、殺人者になっていた。――」

「ね、いい文句でしょう、ぼくはもし殺人保険という商売がうまくゆくようなら、キャッチフレーズにつかおうと思ってるんです」

「恐ろしいキャッチフレーズだな。……」

「人はいつ人を殺すかもわからない。――でもいいです。べつに恐ろしくはないですよ。物騒な時代で、人はいつ死ぬかわからないと、よくいわれるじゃありませんか。この場合、死ぬとはむろん自然死の意味じゃあなく、ということはつまりだれかに殺されるということで、殺される以上、殺すものがあるはずで、だから人はいつ人を殺すかわからない――ということになるんです」

泥棒にも三分の理というが、三分の理どころか三段論法、いや四五段の論法を座光寺君は駆使した。よほど練りに練り、しゃべりにしゃべりぬいた話術にちがいない。

「その証拠に、土肥さん、あなたがこのアパートに入るとき、偶然、日下部さんの奥さんに薬罐をなげつけられたそうですね。薬罐だったからまだいいようなものの、あれが水爆だったらどうします？」

私はふき出した。

「笑いごとじゃあありませんよ、そんなら煮え湯でもよろしい。それでも結構死ぬかもしれない」
「なるほど」
「ところが日下部夫人は、その直前までまさかじぶんが人殺しになろうとは夢にもかんがえていなかったにちがいないんです。少なくとも旦那に対しては殺意があったかもしれんが、あなたにはなかった。それで人殺しの罪で牢屋にゆくのは、大いに不平にちがいない。もっともぼく個人としては、あのおかみさんが牢屋にゆくことは、アパートの浄化のためにも賛成ですが……」
「まあ、ひどいことを！」
と、志賀嬢がにらんだ。
「いや、商売大事です。そうさせないのがぼくの商売なんだから」
「まるで、日下部さんの奥さんが、実際にこの土肥さんを殺したみたい……」
「いや、わかりませんぜ。あのおかみさんのドーモーさからみてもいままで四人や五人、人殺ししたかもしれない。……いまの旦那は六人めという話じゃあありませんか。……とにかく女って奴は恐ろしい魔物だから」
「おいおい、座光寺君、その殺人保険ってえと——」

「つまり、偶然ですな、偶然の人殺しで刑務所にゆくのはかなわんというために、アリバイの証人になってやる商売なんです」
「そんなに簡単にアリバイの証人になれるものじゃなかろう。ほかに目撃者がいるかもしれんし……」
「その場合はしかたがないですな、生命保険だって、いつもきれいにまるまるもらえるとはかぎってないんだから。……しかしこの世は偶然だらけですから、偶然目撃者のいない偶然の人殺しが、そりゃ想像以上にありますぜ、きっと……」
「それで、被保険者は、君に何をかけるんです？」
「やっぱり掛金ですな。ふだんから、ぼくに金を払っていただく。……」
と、座光寺君は舌なめずりした。
虫がいいというより、私はばかばかしくなったが、当人はひどくまじめな顔をしているので、私は笑いをとめて思わずのぞきこんだ。
「しかし、そんなことで誰も掛金を出す奴はいないよ。死ぬことは人間いつか確実に死ぬんだから、生命保険の存在意義はあるけれど、すべての人がかならずしも人を殺すとはかぎらない。ましてや将来、偶然に犯すかもしれない過失致死のために——」
「そうでしょうか？　あなたはいままでの人生で、あいつをイッチョウやっつけてやりたいと

考えたことはありませんか？」

彼の声が陰にこもったので、私は思わず、ゾッとした。

「そうだな、そういわれれば、人間、一生にだれもそんな気を抱くときがあるかもしれない。……しかし、それなら偶然じゃなく、完全な殺人でしょう」

「実はそのお手伝いをしてもいいと思ってるんです」

と、座光寺君のいうことはいよいよ凄い。

「おっしゃるように、人間、必要のないところに金は払いませんからな」

「というと、君が代って人を殺してくれるというわけか」

「ブルル、とんでもない。殺人鬼じゃああるまいし。……その殺人が警察にくさいと感づかれたとき、犯人の身代りに立つんです」

「そんなにうまくゆくものか」

「ゆきますよ、あらかじめよく打合わせておけば。……よくヤクザの喧嘩などのとき、子分が犯人にしたてられて自首することがあるじゃありませんか」

「しかし、その身代りになっちまったんじゃあ、もう商売はできないじゃあないか」

「なあに、ぼくは地下に潜行しますよ。金さえあれば、ぼくは十年でも十五年でも、時効になるまでもぐってみせます」

「地下にもぐったら、やっぱりあと商売にならんよ」

「地下にもぐって商売するんです。もともと殺人保険株式会社と看板をブラ下げてできる商売じゃあないし……。つかまったって、ほんとの犯人じゃないから、そのうちウヤムヤにしてみせる自信があります」

「ウヤムヤになっちまったら、身代りの意味はないでしょう」

「むろんね、はじめからそれだけ練る殺人計画だから、ちょっとやそっとでばれないように仕組むんです。しかしいつばれるか……いつばれるかと、そのあいだの殺人者の心配といったらたいへんなものです。このとき万一の際の身代りがいてくれるとあれば、どんなに心づよいか。……経験者でないとわかりませんよ」

「経験者？」

座光寺君はちょっと狼狽した。私はじっとその顔を見つめた。

「それにね、被保険者にとって、その万一の際、君がはたしてほんとうに身代りに立ってくれるかどうかわからないじゃありませんか」

「立ちますよ、立ちますよ」

と、彼はムキになっていった。

「げんにぼくは実際にやったんです。いまはじめて白状しますが、実際にこの保険に申しこん

だ人があったんです」
「えっ、さ、殺人保険に？」
と、思わずかすかなさけび声をたてる志賀嬢に、
「しいっ」
と、座光寺君は声をひそめ、やや蒼い顔で、
「土肥さんは、土肥さんのまえにその十二号室に入っていたひとだから知らないでしょうが、玉虫という御夫婦があったんです。そのひとにたのまれて……やったんです」
「まあ、玉虫さんたちが！」
と、志賀嬢はまたさけんだ。
「いったい誰を？」
「奥さんが、旦那さんを」

3

——この人間荘アパート十二号室の押入れの奥のひびから出た黒いノート——この部屋に代々すんだ間借人たちの記録を読む人、つまりあなたは、これを発見されるくらいだからきっと注意ぶかい人だろうと思う。

だから、この記録が、第四の間借人から、私、すなわち第六の間借人へとんでいることに気がつかれただろうと思う。

実は、このあいだむろん第五の間借人があったのである。私はそれによって、彼らがどんな夫婦であったか、どうして座光寺某のばかげた「殺人保険」などに入るようになったかを、あらためて私の筆で御紹介しようと思う。

玉虫廉介が、香苗（かなえ）と結婚したのは、賭による。

香苗は会社の事務員をしているくせに、ひどく驕慢（きょうまん）な女で、それは彼女がたいして美貌でもないくせに、ふしぎな肉感があって、どんな男でも彼女と話をしていると、何だか花粉にむせかえるような気分になって、眼をそらすので、大いに自信をもったせいらしい。

なかでも、玉虫廉介と同僚の伴真五郎が、フラフラになった。そしてふたりとも、彼女への贈物を競争のあまり、借金だらけになってしまった。

或る晩、会社が火事になった。ふたりとも近くに下宿していたのでかけつけると、何千人かの弥次馬の中で、バッタリ香苗に逢った。そして彼女が息をはずませてささやいたのだ。

「守衛の巌さんが、さっき大きな包みをもち出して、あそこの倉庫にはこんだわよ」
「大きな包み？」

廉介と伴は顔を見合わせた。ふたりは明日が月給日であることを思い出したのだ。守衛の巌さんが持ち出したのがそれであることは明白だった。

夕方から吹き出した風の向きが変って、もえさかる炎の色がどよめき渦まく群衆を獣じみて照らし出した。

「おい……倉庫がやけるぜ！」

「いってみよう」

廉介と伴は、もういちど眼を見交わした。おたがいに、眼が、あぶらをぬったようにひかっていた。ふたりはこのときほどおたがいが親友だと熱烈に感じたことはなかった。

ふたりは倉庫にかけつけた。そこは風下で、もう眼もあけられないような熱風が吹きつけていた。消防隊はもう一つ手前の建物にかかっていて、あたりは颱風の眼みたいに人影がなかった。

倉庫の入口に巌さんは立って、何かさけんでいた。にげるににげられず、いるにいたたまれない立場の中に、彼は逆上しきっていた。その入口に大きな包みがおいてあるのをみて、廉介と伴が猛然とかけよった。

「あっ、泥棒——っ」

煙でよくみえなかったのか、のぼせていたせいか、巌さんの絶叫がやぶれた。廉介のからだ

がぶつかった刹那である。

鞭にたたかれたように廉介ははねあがって、そののどくびに両手をかけた。ドサリとたおれてなお宙をかきむしる守衛の足を、伴がつかんで、倉庫の中にひきずりこんだ。そのあいだに廉介が包みをかかえてにげ出した。

すべては時のはずみ、もののはずみというよりほかはない。少なくとも、火事と群衆の渦巻がかもし出した異常心理にちがいなかった。十分前まで、ふたりはこんな大犯罪を犯そうとは夢にも思わなかったのである。

火事は終り、守衛の巌さんは焼死体となって発見された。

巌さんが倉庫の入口まで札束をはこんだのを見ていたものは香苗しかなかったとみえて、それは完全に焼失したものと認められた。

札束はふたり——いや、香苗を入れて、三人のあいだにのこった。

廉介と伴は、わがことなれりとほくそ笑むより、それをながめて蒼くなった。熱病からさめたような思いだった。しかし、巌さんのことがある以上、それはとどけ出たくても、できなかった。

「これだけあると、結婚できるわね」

と、ポツリと香苗がつぶやいて、はじめてふたりの男の顔に血色がさした。

誰が誰と結婚できるといったのかわからない。——ただ、彼女が三分の一の金をもって他の第三者と結婚することはその金の性質上ゆるされなかった。

　といって、三人が三分の一ずつわけて、廉介か伴のどちらかが、香苗と結婚する。——すると彼は恋する女を得たうえに、結局三分の二の金を得ることになるのである。そんなことは、益々以てゆるされない。

「それじゃあ、結婚した組が全部の三分の一、しない奴が三分の二としたらどうだろう？」

「すると、あたしのねうちは、この三分の一ということになるの？」

　男たちは沈黙した。ややあって、一人が、

「いったい君はどちらと結婚したいの？」

「あんた方はどっち？」

　と、香苗はききかえした。

「どっちって？」

「金か、あたしか——」

　こういい出したが、じぶんのこの問いを、一瞬まえまで彼女は考えていなかったにちがいない。しかし、この着想を口にした彼女は、急に奇妙にかがやく眼でふたりの男を見くらべた。

　男たちはまた沈黙した。

「ぼくは君がほしい」

「ぼくもだ」

　思えば、三人とも若かった。香苗は笑った。この女が一生のうちにみせた最も美しい笑顔であったろう。

「とにかく、これは重大というより、恐ろしいことだよ。誰かに不平ができると、三人とも身の破滅になる。……よくあることだ」

　と、伴がふるえながらいった。そのとき香苗が妙なことをいい出した。

「あたしはね、どっちも好きなの、どっちかをえらぶと、きっとあとで後悔しそうなの。あら、ごめんね。……でも、ほんとうにいっぺんには決められないのよ。ね、麻雀で決めない？」

「麻雀」

　三人とも、そのころ麻雀狂だった。

「麻雀をやってね、もしあたしが三人のうちで一等なら、そのときはかくごしてあたしが決める。あなた方のどちらかが勝ったら、勝った方が選択の優先権をもつとするの。三人の意志をからみ合わせて、あとは神様に火花をちらしてもらうのね」

「麻雀は、四人要るぜ」

「だから、麻雀屋で、全然知らない人をひとりさがして、仲間に入ってもらいましょうよ」

そして、恋と黄金を賭けた麻雀が行われたのだ。麻雀屋でさがしたもう一人の男A氏は、お盆のようにまんまるい顔をしたひどく陽気な男だった。

東南西北（トウナンシーペー）は、伴、A氏、廉介、香苗の順だった。

このA氏は前宣伝はさかんだったが、やり出してみると驚くべき未熟者で、すぐに廉介に満貫ちかくをふりこんだ。しめたと思っていると、こんどは香苗が伴に同じくらいをふりこんだ。それっきり彼女はヤケになったようにメチャメチャにふりはじめ、廉介と伴だけが、死物狂いになってたたかった。気のせいか、彼女は伴の欲しい牌（パイ）ばかりを出すようだった。

勝負の最終回、しかし廉介は伴よりもわずかばかり勝っていることを知った。しかしその回にかぎり、危険な紅中（ホンチュウ）が一枚あってふることができずテンパイできなかった。もし伴があがれば、それで勝負は逆転することはあきらかで、しかも伴が容易ならぬテンパイをしていることは、その異様な眼つきから看取された。

廉介は歯をくいしばった。紅中さえ通ればテンパイできるのだ！

彼はついにそれをふり出すことを決意した。

伴がツモって、すぐにそれを捨てた。次にA氏がツモった。

「あがった」

と、A氏がとんきょうな声をあげて、うれしそうに笑いながらじぶんの牌をひらいた。最低

点にちかいあがりであった。

伴が顔をゆがめてじぶんの牌をたおした。彼は紅中をただ一枚、頭待ちにしていた。小三元で、満貫の手であった。

「あたし、いまそれを出してあげようと思ってたのに！」

と、香苗はつまんでいた紅中をみせた。廉介とおなじである。

「お、おれもだった！」

と、廉介は背に冷汗をおぼえながらも、ゲラゲラ笑った。勝負あったのである。A氏のおかげで、彼は勝ったのだ。

麻雀屋を出てから、三人は公園にいった。

「しかたがない。香苗さんは君にわたす。ぼくは……満州にでもゆくよ」

と、伴はうつろになったような、またサバサバしたような笑顔でいった。

「そうだ。……ぼくたちは別れた方がよかろう。一生涯ね」

と、廉介はいった。

こうして彼は妻を得たのである。

4

それは戦争前の話であった。それから十何年かがすぎた。

玉虫廉介と香苗夫婦は四十歳ちかくになって、おちぶれはてたからだを、このボロアパート人間荘の十二号室になげこんだ。

廉介と香苗は、ふたりが結ばれた因縁も忘れていた。同時に若さも夢も失っていた。だんだん貧乏になりながら、いよいよ旺盛になってくる香苗の性欲を、廉介はもてあました。いつもからだがうつろで、後頭部に鈍痛があり、吐気をおぼえた。何もかもうまくゆかないのは、すべてこの肉欲のかたまりみたいな女にあるとさえ思うようになった。……しかも、彼は彼だけの意志で妻と別れるわけにはゆかなかった。そのときだけ、遠い恐ろしいあの犯罪の追憶が、心の底から澱（おり）みたいにゆらめきのぼった。

そして——この悪縁につながった夫婦のあいだに、ようやく運命の斧がふりおろされたのである。

或る夏の日曜日、廉介は、いまつとめている会社の役目で、大阪へゆくことになった。それは、相当多額の現金を至急とどける役目だった。ふと彼は、この金をもってどこかへにげてゆきたい欲望にとらえられた。しかし四十という年齢が、すぐ彼を苦笑させた。

ところが、アパートを出て駅にゆくと、そこに彼の同僚がひとり、人待ち顔に立っていた。むろん待っているのは彼ではない、男か女か、子供かもしれない。ただその男は会社の外で社のだれかに逢うと、きっと金を貸してくれというへんなクセを持つ男だった。廉介はためらった。実にバカバカしい話である。彼は大金をもっているが、じぶんの金ではない、またかりにじぶんの金であっても拒否すればなんでもないことである。それなのに彼は——あいつ早くゆかないかな——と遠くでグズグズと見まもっているうちに、気がついてみると、たとえいま電車にのっても東京駅で一時間ばかり待たなくてはならないという始末になっていたのだ。それで彼は一応アパートにひきかえした。

まさに針一本から大変なことになるとはこのことだ。

アパートに入ろうとして、ふと背後の往来を通りかかっただれかが、「あ！」とかすかなさけびをあげるのをきいて、彼はふりかえった。

そこに四十年輩の、色のくろい、しかしいかにも貧乏たらしい背広の男が立って、眼をまるくしてこっちを見ていた。

はじめ彼は、それがだれだかわからなかった。

「……玉虫君じゃあないか？」

しゃがれた声で呼びかけられて、廉介は相手の姿をみていたが、急に顔色がかわった。

「君か！」
「うん」
といって、相手はちかづいてきた。伴真五郎であった。のばしてきた手を廉介はにぎったが、力がなかった。
「どうした？」
「いや、満州からひきあげてきて、さんざんな目さ。いまこのとおり保険の外交をやってるしまつだ」
「御家族は」
「あれっきり、ひとりだよ」
伴はニヤニヤ笑った。煙草のやにで黄色くなった歯は、以前とは別人みたいにいやしい感じがあり、しかも土くさい生命力にあふれて、廉介は不吉な予感がした。
「ほかに身寄りはなし、たよりになるのは君たちだけだから、ずいぶんさがしまわったぜ。むかしのあの会社はつぶれちまって君はいないしさ。それが十何年もたってから、こんなに簡単に逢えるなんて……ほほう、こんなところに住んでたんだね……」
この男が、むかしのあのことを、いきなり廉介に想い出させようとしていることはあきらかであった。不吉な予感の程度から、彼の心は吐き気をともなう不快感に変った。

それにしても、いまアパートにもどってきたことは、なんたる失敗であったか。ちょいとしたメフィストフェレスを避けようとしたあまりに、彼はとんでもないサタンにぶつかってしまったのだ！
「ところで、これ、いる？」
サタンはサタンの表情をむき出しにして、小指を出してみせた。
廉介のあたまに遠い声がよみがえった。
「……そうだ。……ぼくたちは別れた方がよかろう。一生涯ね。……」
が、それは弱々しく、そのかわり遠い声が、これはあらあらしく耳の奥に鳴りひびいた。
「……破滅というより、恐ろしいことだよ。だれかに不平ができると、三人とも身の破滅となる。……」
廉介は、ともかく伴をつれて十二号室にあがった。香苗をみて、伴の最初に発した挨拶は、
「よっ、香苗ちゃん、スゲエスゲエ、ヤルセないほど、女盛りになったねえ！」
という言葉であった。
それからまもなく、この敗残の旧友は、むかしの約束もどこ吹く風と、恥しらずにちょいちょいこの人間荘を訪れるようになり、夫婦のあいだからいつも千円二千円の金をせびっていた。
そして夫婦のあいだの寝物語に「あいつ」という言葉が鬱陶しいひびきをもってくりかえされ

るようになった。

——それでなくてさえ、近年稀な暑い夏であったのに、ふしぎなことがある。

予想もしなかった苦労がふえたのに、玉虫夫妻がむしろ健康的になったことだ。廉介はひどく色が黒くなり、食欲旺盛になり、香苗の方はいよいよ色白に、ますますタップリ豊満になってきたことだ。若い日、恋を争った三角の一頂点があらわれて、それがこの中年の夫婦のホルモン剤となったのであろうか。

とはいうものの、夫婦の会話は、しだいに深刻になってきた。

「あいつ……保険をやっているといったけな。保険といえば、香苗、おまえ、あの座光寺君の殺人保険の話をきいたことがあるかい？」

ふっとこんなことをいい出したのは廉介であった。

「あるわ。あの……人を殺したとき、身代りになってくれるとかいう。——」

「ありゃ、ほんとに出来ることだろうか？」

「あなた……何をかんがえてるの？」

香苗は恐怖にみちた眼をむけた。狭い部屋いっぱいになった青い蚊帳（かや）の、つぎはぎだらけの天井をじっと見ていた廉介は、急に首をこちらにむけて、香苗の厚ぼったくふくれあがった唇を吸った。

それから、ひくい声でいった。

「おれたちは……死ぬまであいつにつきまとわれるのか？」

こうしてふたりは、熱心に、座光寺の殺人保険のことについて語りあった。

この胡乱（うろん）くさい保険の話は、語れば語るほど、ふしぎに迫真力が出てきた。しかし、彼らにとって、要するにいちばんの不安は、果して座光寺が信用できるかどうか、ほんとうにアリバイの証人になったり、万一の際犯人の身代りになってくれるかどうかということだった。

そしてついに廉介は、実に奇想天外な実験案をもち出したのである。

「どうだ、おまえひとつ、おれを殺してみないかね？」

「えっ、な、なにをいうの？」

「はははは、まさかほんとうに殺されちゃあたまらない。嘘に殺すんだよ、偽殺人だよ。……そしておれは殺されたものとして、半月か一ト月この世から消滅してみる。むろん、座光寺の保険に入ってからの話だよ。そしてそのあと、警察におまえがうたがわれてるとかなんとか、座光寺にいってみろ、そのときあいつがどんな態度に出るか。……」

「嘘に殺すって？」

「だから、このアパートか何かで、屍体となってころがってるわけにゃいかん。屍体がみえなくなる方法でなけりゃあこまる。……というと、まあ崖か何かから、海か河へでもおちるまね

をするのだな」

「あなた、そんなまねして大丈夫？　あなた泳げないじゃあないの？」

「ははは、そこを夫婦共謀してうまくやるのさ。敵を欺かんと欲すれば、先ず味方を欺かなくちゃいかん。――で、その結果――もし、座光寺が信用できるようならば、だな。……」

青い蚊帳の上を這っていた蜘蛛が、ふいにじっとうごかなくなった。

5

「ええ、奥さんに、旦那を殺したいんだが、殺人保険に入ってききめがあるだろうかってきかれたんです」

と、座光寺君は重々しくいった。

「動機は？　ときくと、いいひとができたからさって、ニヤリとしたその笑い顔の、いやすごいこと――まったく女は化物ですな。なに、当殺人保険株式会社といたしましては、保険金さえ払いこんでいただきゃあ、動機の問題は問わないのをたてまえとしているんです、ぼくは、ようがす、とひき受けたのみならず――」

座光寺君は志賀嬢の顔をじっと見つめながらつづけた。

「智慧さえ貸してやりましたよ。奥さんのいうには、旦那の屍骸がでると足がつくから、出来

れば崖から海へつきおとしたいっていいますから、そりゃいい思いつきだってほめてやりましてね、それをもっと専門的に指導発展させてやったんです。つまり、ぼくと玉虫氏と汽車で北海道へ旅行しましてね。……」

「ああ、そういえば、あのときあなたは玉虫さんといっしょに留守しましたわね」

と、志賀さんはかすかな声をあげた。もう笑いの翳はなく真っ蒼な顔色であった。

「あとで奥さんがそっと飛行機でとんでいったんです。ぼくは彼氏を石狩湾に面する或る断崖につれ出して、用があるような顔をしてひとりちかくの料亭にひきかえした。そして断崖の上で待っていた彼氏は、さきにそこについて岩かげにかくれていた奥さんにつきとばされて、海へおちてゆきましたよ。あの旦那は金槌だそうで……ぼくは、それをこちらの料亭の二階でビールをのみながら、ハッキリ見てたんです。しかし一応嫌疑がかかるとすれば、玉虫氏と同伴して北海道へいったぼくにかかってくる。奥さんはすぐに札幌にひきかえし、千歳からまた飛行機で東京にもどってくる。……」

「もどってこないじゃあないの」

と、志賀さんがいった。

「もし、あなたのいうことがほんとうなら、奥さんはどうしたの？」

「さあ、それが……」

と、座光寺君は急に心ぼそげにくびすじをかいて、
「そのはずなんですが、いったいどうしたんだか。……」
「なんだかピンからキリまでおかしな話だな。まあ、君の話がほんとうだとする。しかしそんな打明話をペラペラしゃべるようじゃ、保険に入った甲斐がないじゃないか」
と私は、急に夢からさめたように笑い出した。
「いや、それにはわけがあるんです。あの奥さんは保険金をまだ半分しか払ってないんです。あと半分は、それがうまくいって東京にかえってからとか何とかいって……ひょっとしたら、あのまま行方をくらましたのは、それを払いたくないからじゃないかと、このごろムカムカしてきましてね、向うが破約したなら、こっちも秘密厳守の義務はないと。……」
と、座光寺君はいよいよムキになって、
「それに、あなた方があんまりぼくのいうことを信用なさらんから、つい」
と、声をひそめて、
「どうか、だまっていて下さいね。ぼくは殺人はしない。しかしあくまでも殺人者の味方だから、どうぞ御用のときは、座光寺保険をお忘れなく。——」
「ええ、用のあるときはきっと思い出しますわ」
と、志賀嬢は子供をあやすように笑っていった。

座光寺君が、肩をそびやかして十四号室に入ったあと、私は苦笑した。
「少しイカレてますな」
「ほんとに」
と、志賀嬢も笑顔でうなずいたが、
「でも、殺人保険の話は正気ですわ」
「えっ、すると、あの話は——」
「あのひとの知ってるかぎりではほんとうだと思います。むろんあんな保険はアテにはなりません。インチキです。あんなにあとで他人にしゃべるくらいですもの。……ほんとにじぶんが身代りにならなくてはならないようになったら、一目散ににげ去ってしまうでしょう。しかし、あの人の殺人保険の話の目的はほかにあるのです。つまり、それはああやってしゃべることが目的なのです」
「よくわからないな」
「なぜ？」
「あのひとは、あたしたちをおどしてるつもりなんです」
「殺人者よ、おれもお前の仲間だぜ、安心して白状するがいいって——」
彼女の声はささやくようにひくかったが、私は蒼白になった。

「土肥さん。お話があります。きいて下さいます？」
ふたりは、私の十二号室に入った。

6

「土肥さん。……あなたは、玉虫さんを御存じですね？」
と、志賀嬢はしずかにいった。ながいあいだたってから私はこたえた。
「はい。……」
「玉虫さんは、まだ生きていらっしゃいますね？」
私は志賀嬢の眼をあおいだ。それは満月のように私の片眼を射た。
「はい。……」
「土肥さん、玉虫さんのことをきかせて下さい」
と、志賀嬢はやさしい声でいった。四十男のこの私が、しだいに慈母にあまえる赤ん坊か、催眠術にでもかけられたようになったのは不思議である。
私はしゃべり出した。
「あの男は、じぶんのどこか狂ってしまった人生をたてなおしたかったのです。すべてを清算して出なおしたかったのです。過去の大犯罪からにじみ出る粘液を拭きおとしたかったのです。

それは、伴が出てきたから、急にそんな気持になったのではありません。女房もその汚ならしい粘液だったのです。ずっとまえからそう考えていたんです。しかし、伴が出てこなければ、彼もそのスッキリしない不徹底な人生をそのままつづけていったかもしれませんが、伴が出てきたことによって、むしろそれを機会に、すべてから脱出しようと考えました。そこに殺人保険のことを口ばしるあの頓狂者がまかり出ました。彼はそれを逆用してやろうと思いました。彼はそう思いたってから、夏のあいだ、ずっとプールにかよって、いままでできなかった泳ぎをおぼえました。そして女房にじぶんを海におとさせる芝居をさせ、その手ちがいでほんとに海で溺れ死んだように見せかけようと思いました。……」
私はふいに志賀さんの眼を見あげ、小さな声でいった。
「いや……ほんとうをいうと、チョッピリこんな考えがあったかもしれません。死人はすべての嫌疑の外にある。何をしようと、だれもとらえる者はありません。たとえ、過去の罪を知る者を、この世から消したところで。――」
志賀嬢はかすかに身ぶるいした。
「でも、そのときのつもりは、ただ女房から永遠に別れる、すべての過去から断ちきってしまいたいという欲望だけだったと思います」
「……」

「北海道の断崖に彼が立っていると、約束どおり女房が岩かげから出てきました。遠くの料亭で、座光寺が見ています。そして女房は彼を海につきおとしました。その刹那——彼は女房の眼に——恐ろしい本物の殺意をみとめたのです！」

「……」

「女房も彼とおなじことを考えていたのでしょうか？　いや、そうではない。女房は伴とむすびついたのです。そのことがハッキリわかったとき、彼のからだは海におちていました。その崖が二間ばかりの高さだったことが倖せでした。いちどふかくしずみ、大波に断崖の真下のくぼみにおしつけられて、彼は息をつきながら、にげたいはずの女房に物凄い怒りをかんじました。女房はしばらく崖の上から海をのぞきこんでいましたが、そこから彼の姿はみえません。彼女がさけび声ひとつたてないので、彼は、女房が偽殺人ではなくほんとの夫殺しを考えていたことがいよいよハッキリしました。が、あんまり夫の姿が波に浮かんでこないので少し心配になってきたのでしょう。彼女は、崖をまわり、岩をつたって海ぎわまでのぞきに下りてきました。その足を彼は海の中の岩かげからふいに手を出してムンズとつかみ、波の中にひきずりこんだのです。……ああその水中の抱擁——あなた、泳げるのね？　とさけんだ彼女の最後の息吹——彼はこのとき、十何年ぶりかで彼女に愛をかんじ、ちょっと後悔したといいます……」

「……」

「まもなく座光寺がやってきて、へんな顔をしてキョロキョロしていましたが、岩かげにひそんでいる彼と死体を発見できなかったようで、やがてかえってゆきました。彼はそのあとを追うようにして東京にもどってきました。そして、海におちたとき傷ついた右眼を義眼にし、近眼鏡をかけ、義歯をはめ、隆鼻術をほどこし、髪のかたちをかえたのです。玉虫廉介はこれでこの世から完全に消えました。ただそのとき、この死人はむかしの約束をやぶって彼を恐喝し、彼の女房をうばった伴真五郎を片づけました。しかし、世の何びとも死人をとらえることはできません。そして彼はまったく別の人間として新しい人生にふみ出してゆこうと思ったのです。……」

「……」

「ただ、そのうれしさに浮かれて、いたずらッ気が起り、このアパートのちかくを徘徊して、知りあいの日下部夫妻が彼をみてもむかしの彼とは思いつかないようなので、いよいよ面白がって、またこの部屋を借りたのが、やはりまちがいのもとでした」

「……」

「じぶん自身鏡をみてもわからないほどうまく変ったつもりなのに、どうしてあの座光寺が見ぬいたのかわかりませんが、志賀さん、あなたはいつ彼が私であると知ったのですか？」

志賀嬢は微笑した。

「最初あなたがここにおいでになったときからですわ」

「えっ、あのときから？　ど、どうして？」

「あの日——あなたは明るい外光の中から、急に暗いこのアパートに入っておいでになりました。そのうえ、あなたの眼鏡はくだけ、しかも一方の眼は義眼でした。このアパートの階段はあんなに腐ってて、よほど気をつけないと危いところがあるのです。それなのにあなたは、最初からその危いところをさけて、心得顔で階段をお上りになりました。そこで——あ、このひとは、このアパートにはじめて来たひとじゃない！　と思いついて、そしてあらためてしげしげとあなたの片眼をのぞきこんで、はじめて玉虫さんがあなたとわかったのですわ、土肥さん」

「そ、それで……あなたは、いままでどうしてそれを知らない顔をしていたのです？」

「それほどまでにして顔を変えるには、よほどふかい事情があろうと思ったからなんです。……そうまでして、どうにか新しい人生にのり出してゆこうとなさったのに、可哀そうな玉虫さん！」

志賀さんは胸に十字をきって、じっと私の顔を見つめた。

「あたしは、あなたがこのままどこへ旅に出られようととめる気にはなりません。何もかも忘れ、座光寺さんのことなども忘れておしまいなさいといいたいんです。でも……あなたがこれからどうなさろうと……すべては神さまの御裁きにまかせます……」

——いま、ここにこうしてかいていて、私の頰からはなお涙がながれる。

志賀嬢のいった意味はよくわかる。これ以上罪をかさねないで、自首して出よといっているのだ。

しかし——このまま逃げてゆくか、自首するか、いずれにせよ私はあのチョコザイな座光寺に思い知らせてやらなくては気がすまぬ。彼が逆立ちしても手伝うことのできない人殺しをやらなければおさまらない。即ちあいつ自身をやっつけてやるという仕事を。

そう思うと、それではなんのためにこれほど苦心惨憺して顔を変えてしまったのか、この姿で、また新しい殺人の人生をはじめるのか、おれはやっぱりその呪われた運命からのがれることはできないのか！　と、しらずしらず涙をながさずにはいられないのだ。

五番目の間借人は私である。しかしその記憶は、私の胸の中にだけあった。

不幸な六番目の間借人となって、はじめて私は、この黒い殺人のノートを発見したのであった。

さわれ、この恐ろしき壁の中のノートよ、ねがわくば、もはや一行たりとも人殺しの告白を記録するなかれ。

そして、次の間借人よ、ねがわくば君が平安にして幸福なる生活を送られんことを！
さようなら。

第六の間借人

淫らな死神

1

——日がしだいに暮れてきた。

私は窓ぎわのトランクに腰を下ろしたまま、氷結したようにうごかなかった。

私はこの人間荘アパート十二号室に入って、この部屋の代々の住人の記録した黒いノートを読みおえた。第一の間借人から、第六の間借人まで……それは哀れな人間獣たちの殺人の記録といってよかった。

第一の間借人たる学生は、隣室の女性を崇拝した。ひとりの醜い盲人がむかしの恋人をさがしていた。その恋人が隣室の女性だと学生はかんちがいした。そこで彼女を不幸にしたくないと願うあまりに彼は盲人を殺してしまった。それは「錯覚」による殺人であった。

第二の間借人たる詐欺漢は、その隣室の女性のきよらかさに反撥した。そしてひとりの天邪鬼を利用して、その男に殺人を行わせ、彼女に一ト泡吹かせようとして、結果的には彼が人殺

しをしてしまった。それは「出来心」による殺人であった。

第三の間借人たる可憐なサラリーガールは、消え失せた妻を恋う男を同情するあまりに、その隣室の女性とはかって、その妻を突如として眼前に出現させたために、彼を発狂させてしまった。殺人ではなかったにしろ、これは「善意」による犯罪であった。

第四の間借人たる職工は、彼自身は何もしなかったといってよかったが、みすみす自殺行に旅立った男を、それをふせぐべく、その女性から旅費までもらいながら、みんな飲んでしまって依頼をはたさなかったために、ついにその男を死なせてしまった或る泥棒氏の話をかいた。これは「怠慢」による犯罪であった。

第五の間借人たるサラリーマンは、曾て火事という異常環境で突発的に殺人を犯し、のちにその罪から永遠にのがれるために、じぶんをかりに世の中から消滅させてしまおうともがいて、かえってその妻を殺してしまった。妻が、彼のいつわりの消滅計画に乗じて、ほんとに彼を消滅させようとしたのに反撃したのだから、これは一種の「正当防衛」による殺人であった。

そして第六の間借人は……その殺人をかぎつけた男、座光寺某を殺してきえた。

一ト月ばかりまえにおこったその事件のことを、私はこのアパートに入るまえ、管理人の関夫人からきいた。座光寺某は、或る日狂犬にかまれ、その結果恐水病にかかって、犬のように吠えまわりながら狂い死んだという。——

「その犬がね、十二号室に住んでいた土肥というひとのひろってきた犬なんですよ。まあ、こんなアパートの二階に住みながら、犬をひろってくるきもちがわからないわ。いったい、あたし犬や猫を飼うひとはきらいなの。そりゃあ本人は可愛いでしょうけどね、他人にはかみつく、ワンワン吠えて安眠のじゃまはする。猫なんか飼われたら隣近所、魚の番人をしていなけりゃならない、じぶんのたのしみのために、そんなに公衆にめいわくをかけていいものでしょうか。日本じゅうの犬猫が食べる量だってたいへんでしょ？　日本は食糧輸入国だっていうのに！　あたし日本が食糧の自給が出来るまで、犬猫を飼うことを禁じるように新聞に投書してやろうと思ってるの」

と、関夫人は、私がその狂犬を飼っていた当人のごとく、にくにくしげにいった。

「しかもその土肥さんったら、引っ越しのあとにその犬を部屋にのこしていっちゃったの。そしたら、その座光寺さんが夜中に十二号室に入っていってね、犬にかまれちゃったのよ、犬ばかりじゃなく、品物もすこし置いてったから、泥棒にしのびこんだのじゃないかしら？　天罰テキメン、たちまちワングリかまれちゃって、狂犬病にかかっちまったんだけど、土肥さんもその犬が狂犬だったことを知らないで、手なんかかませてたとしたら、どこかでおなじように狂い死んだかもしれないわ。……あなた、どうか犬猫など飼わないでちょうだいね！」

「はい、承知しました」

しかし私は、この黒いノートで、土肥氏がその犬を狂犬にしたてて――少なくとも狂犬と知っててひろってきたことを知ったのである。

一番めの話を読んでも、私はことさら不審を抱かなかった。二番めの話を読んでも妙には思わなかった。三番めも……いいや、私は漠然たる恐怖、殺人そのものの恐怖というより、その背後にながれる異様なものの恐怖をおぼえていたが、それが何か、具体的につかまえることはできなかった。

しかし、「第六の間借人」の記録を読んで、私は硬直してしまったのである。へんだ。……どこかが、へんだ。……

よく考えてみよう。

第五の間借人たる玉虫氏は、北海道で細君を殺し、まったくちがった顔の土肥氏となってこのアパートにもどってきた。アパートの住人たちはそのことを誰も気がつかなかったが、ただ十一号室の志賀悠子さんだけが知った。

座光寺という男が、「殺人保険」というたわけた新商売の宣伝をした。殺人を欲する人のために、そのアリバイをつくり、身代りとなってやるというアイデアである。

のみならず、彼はそれが単なる思いつきでない証拠として、その実例をあげた。玉虫夫人が玉虫氏を殺そうという願いを抱いていることをきいて、彼が玉虫氏と北海道に同行し、そのあ

とから夫人がひそかに飛行機で北海道に飛んで玉虫氏を殺したというのである。そして、もしこのことが問題になったら、じぶんが玉虫氏殺害の容疑者として責任を負うというのである。

彼はそんなことを正気でいったのだろうか。そうではない、と志賀嬢はいう。

「あのひとは、あたしたちをおどしてるつもりなんです。殺人者よ、おれもお前たちの仲間だぜ。安心して白状するがいいって。――」

殺人者をして、殺人を告白させる一つの有効な手段はなんであるか。それはこちらもまた殺人者である、同類である、と相手に親近感をもたせることである。つまり座光寺は土肥氏が北海道で細君を殺してきた玉虫氏であることを見ぬいて、それとなく脅迫しているのだというのである。そのための「殺人保険」談義だというのである。

しかし――その玉虫氏は、さいしょ座光寺の「殺人保険」の話をきいたことから細君殺しの事件にまですすんだのではなかったか！

話の前後が、逆だ。なるほど玉虫氏は十何年かまえに一つの殺人を犯した。しかし、そのことを座光寺は知っているはずはない。知っているなら、その事件だけで脅迫すればよい。玉虫氏が細君の殺意の手からまぬがれたのは偶然といっていいのだから、もし玉虫氏がほんとうに死んでしまったら、脅迫の対象はなくなってしまうではないか。

座光寺は、この夏、玉虫氏が何もしないうちに、殺人保険の話をはじめたのだ。それは、や

はり彼のとっぴなあたま、苦しマギレの生活から生み出された珍商売のアイデアにすぎなかったのだ。そのとき脅迫の意は、まったくなかったのだ。彼は土肥氏が玉虫氏とは全然知らなかったのではないか！

そしてこんども——おなじことではなかったのか。

それでは彼はなぜ「北海道の殺人」の話を、ベラベラしゃべったのか。

「殺人保険」の宣伝にしろ、彼のあたまがいかに愚かしいにしろ、何かの下心がなくては口外できないはずの事件である。下心は何か。彼は何をいおうとしたのか？

「北海道へ飛行機でとぶ殺人！」

私は、愕然（がくぜん）として立ちあがった。私のあたまに、第四の間借人のかいた、津軽海峡を苫小牧にながれ去る青沼氏の屍骸のまぼろしがかすめすぎたのである。舞台はおなじ北海道であった。

2

はじめて、ここで私は間借人の記録が異様な変貌をとげるのを感じた。

第四の間借人はそれを「怪談」だといった。

八号室の青沼さんは、北海道にある亡妻の墓にゆくべく旅立って、津軽海峡で連絡船阿寒丸の遭難事件にあって溺死した。誰しもがそう思って疑わなかった。

ところが——「悲劇の翌朝、津軽の海の浜辺に立って、もはやかえらぬ遺族たち——」のアナウンスされたテレビニュースの中に、その青沼さんの顔がうつっていたというのだ！

このテレビニュースを、青沼さんの知人はだれも見なかったにちがいない。そして、偶然それを見た座光寺、木室老人、第四の間借人は、それを幽霊だと思った。

それも当然だ。青沼さんが阿寒丸にのったというのは、その乗船名簿からあきらかであり、さらに彼の屍体が苫小牧の沖に漂流していたことは、それ以上にあきらかなのだから。——私も第四話を読んだとき、このふしぎな事実を、単にふしぎと思うだけで、そこから一歩も出ようとはしなかった。

しかし、もはやかえらぬ遭難者の沈んだ海を、その遭難者が浜辺で見物しているということはあり得ない。

青沼さんは、阿寒丸で遭難しなかったのだ！　彼は少なくとも、その翌朝までは生きていたのである。

それでは、船客名簿に彼の名がのっていたのは、どういうわけであろう？　その名簿にのりながら、実際は船にのらなかったということがあり得るのか。

その可能性は、第四の間借人の記録の中にある。

すなわち、「いちど船にのったが、なかなか出港しないので、イヤ気がさして、タラップを

下ろしてもらって下船した」幸運な一群の人々があったという事実が。――その連中の中に、青沼さんがまじっていたのではないか。その人々はあとで名乗り出て、死亡者の仲間からとり消された。しかし名乗りでなければ、むろんとり消されないにきまっている。

が、そのときまで生きていた青沼さんが、三日めに溺死体となって、灰色に濁った北の海の、うすぐらい、わびしい潮けむりの底をながれていったのは？

彼は、そのあとで殺されたのだ！

どうやって？

私は、ここで、玉虫夫人が玉虫氏を北海道の小樽ちかくの断崖からつきおとした方法を思い出した。場所はちがうであろう。が、青森か、おそらくは函館のちかくで、おなじような手段でやられたのではあるまいか。

座光寺は、テレビニュースから、のちに青沼さんの死の怪奇さを感づいた。彼が玉虫夫人をそそのかした殺人法の話というのは、それから想像していった思いつきではなかろうか？

だが、誰に？　なんのために？

私は恐怖の突風に背を吹かれたように、部屋をとび出した。

だれかに助けてもらいたかった。だれかにきいてもらいたかった。

夕ぐれの廊下は森閑として、人影もなかった。

となりの十一号室の志賀嬢はまだかえっていない。一つおいて、九号室の木室老夫妻は、ひっそりと人形を作っているのであろうか。八号室の青沼夫妻はすでにこの世にない。そういえば、向い側の十三号室の山名氏、十四号室の座光寺君、十五号室の椎名さんのあとにはいまどんな人が住んでいるのだろう。十六号室の仁木さんは依然として天邪鬼をたのしんでいるのだろうか。

しかし、私はこのときなぜか十号室の脇坂さんのことを思った。

このひとは、この黒いノートに一度も登場していない。ただ第一話に、「ここには、本だけあって、女ッ気はない――」という説明があるばかりだ。これだけ哀しい、恐ろしい、涙と笑いと血にいろどられた人間荘の歴史の中に、ただの一度も顔を出さない男。――本だけを相手にしている人。

それは私に「哲人」という言葉を思い出させた。私を助けてくれるのはこの人だ、と私は直観した。

この黒いノートを、手記者以外の人間にみせることは、極めて危険であった。破滅的事態をひきおこすおそれは充分あった。……けれど、なぜか、その相手が脇坂さんにかぎり安全であるような気がした。

私は、十号室の扉をあけた。そのとたんに、

「わっ」
と私はさけんだ。
頭上で、ピカリと何かひかったと思うと、そこから滝のような水が、ザアッと部屋じゅうにとびちったからである。――その下に、ベッドをおいて、脇坂さんは、あおむけに、ながながと寝そべっていた。むろん、顔から胸、腹まで水だらけになったが、はね起きるでもなく、彼はニヤニヤ笑った。
「やあ。……ひさしぶりですね」
と、脇坂さんはしずかにいった。やせた青黒い顔と、白髪まじりの頭に、水滴が冷たくひかっていた。
私は、アングリと口をあけて、天井を見あげた。そして、そこに一つのフラスコが吊るされて、そこから一本の紐が扉とつながっていることを発見した。つまり、誰かが扉をあけると、フラスコがかたむいて、中の水が注ぎおとされるメカニズムになっていたのである。
「な、なんのまねです。これは？」
「いま、とりかえたばかりなんですよ、それと」
と、脇坂さんは、手にしていた書物で、一方の書棚の上にあるフラスコをさしながら、ユックリと起きあがった。

「へえ？」
「あのフラスコに入っているのは、濃硝酸なんです」
私は口もきけなかった。
「あ、あぶないことを――こっちが、人殺しになっちまうじゃあありませんか」
「なあに、自殺の遺書はかいてあるんです。はてな、どこにいったかな。さがせば、そこらに埃まみれになってるでしょう」
そこら――部屋は、書物で充満していた。壁もたたみも、まったくみえないほどの書物の山、書物の沼であった。
「ぼくみたいなもののところには、まず誰も訪ねてきやしませんがね、万一だれかがあけると、――ぼくはいっぺんにあの世にいっちまう。ただ、いつも硝酸のフラスコを吊るしておくと、臭くてしようがないので、ときどき下ろしてああいう具合に栓をしておいて、代りにいまのように水をいれたフラスコを天井に吊るしておくんです。が、それをくりかえしてると、――とくに、ひるねからさめたときなど、ふっと、いま吊るしてあるのは水か硝酸かわからなくなることがある。実際に、硝酸のフラスコを吊るしているときに、誰かがドアをあけると？　――そう思いながら、その下でエロ雑誌などを読んでいるのは、なんともいえないスリルですな」
「スリルどころか、死んじまうじゃあないですか」

「ぼくは、もう死んでいるんです。……たいくつで」
脇坂さんは、私の顔をじっとみて、
「あなた、だいぶ年がよりましたね」
「ええ、さまざまの世間をまわってきましたから」
「世間はおもしろかったですか？」
「おもしろいことも、辛いこともありました」
「そうですか」
なんだか、へんである。脇坂さんはまじめな顔をしていた。が、急にアクビをしていった。
「ぼくはね、おそらくあなたと大して年はちがわないんですよ。それなのに、この部屋にじっとしてるだけで……活字の世間をさまよっているだけで、こんなに白髪だらけになっちまいました」
「なにか……むずかしい勉強をしていらっしゃったんですか」
「いや、あなたとおなじ……要するに肉欲と食欲の世界をさまよっていただけです」
「ここで？」
「活字だけのね。笑っちゃいけない。人生は一行のボオドレールにも若かない。――むろんこいつも、そこの本にあった言葉だが」

私はともかく、黒いノートをさし出した。
「それじゃあ、ひとつ、これを読んで下さい」

3

――黒いノートを読みおえた脇坂さんは、顔をあげた。無感動な眼であった。
「これが、このアパートに起ったほんとうの事件だから、ぼくはつまらんね。登場人物をみんな知ってるから、空想の余地がないもの。幻影の恋妻――といったところで、あのうすばかの女の顔を思うと――」
私は彼が、山名氏を殺した夜学生のことについて、一種感動の声をあげるかと思ったが、それについて、彼は何も言わなかった。それで私は言った。
「いや、空想の余地があるんです。たとえば、第三話に、椎名さんが、横領した公金をかくして、このアパートに潜伏してるのを知って警官がふみこんできたわけを、だれがそんな密告したのだろう、とありますね。あなたは誰だと思いますか？」
「なるほど。――密告といえば、第一話で、高力氏の部屋のドアに『今夜十時ごろ、白鳥ホテルにて、十二号室の男と三号室の女が密通している』と密告した奴もいるね。投書狂の関夫人じゃあないですか？」

私は沈黙した。この哲人のところに相談にきたことを少し失望もしたし、またそうであってくれたらという願望に両手をねじり合わせたいようであった。

「それなら、第二話で、伊豆山の碧洋荘で、一階の窓から、わずか四五尺の地上におちた殺人鬼津田が、どうしてあたまをくだかれていたのでしょう?」

「そばにころがっていた、赤ん坊のあたまくらいの石にぶつかって――」

「その石は、はじめからそこにあったのでしょうか? そこの地面は、みんなこまかい砂利ばかりだったというのに」

「というと?」

「津田が窓からとび出したとたん、上からその石がおちてきて――」

「上からというと、天からですか?」

私は、このばかげた声には耳もかさず、うわごとのように、

「上から――上から――」

と、つぶやいた。心臓が鐘みたいにつき出した。私は白鳥ホテルの裏側の闇の中で、刈部夫人がコンクリートのかたまりであたまをくだかれた事件に想到したのである。

「脇坂さん、あなたは白鳥ホテルを知ってますか?」

「このちかくの淫売宿だろ? 名はきいてるが、ぼくは興味はないですね」

「その裏側に窓が――あれはトイレットにあたるのかな――小さな窓が一つあいてるのを知ってますか?」

「知らんですな、そんなもの」

「刈部夫人のたおれたのは……いまから思うと、その窓の下だったんです!」

「……というと、刈部夫人のあたまを割ったものは、高力さんじゃあない、だれかが、上からコンクリートのかたまりをおとしたのだというのですか?」

「……ああ、わかった、あの夜のことが!」

「何がわかったんです、だれがそんなことをやったというんです?」

私は書物の上にドサリと腰をおろして、髪の毛に手をつっこんだ。

「座光寺が殺されたわけがわかった。あいつが、殺人者よ、おれもお前たちの仲間だぜ、安心して白状するがいいとおどした相手は、土肥氏ではなかったのだ。座光寺は、別の或る殺人を――青沼さんの死の秘密を感づいて、そのために殺されたのだ。……」

脇坂さんは、ふしぎそうに私の顔を見つめていた。

「それじゃあ、青沼さんはなぜ殺されたのだろう? それは、彼が山名さんを殺したのが夜学生だということを口ばしったからだ。なぜなら、山名さんは過失死として処理され、その犯人が夜学生だなどと誰も知らないはずだから。……彼は、このアパートに起った殺人の背後にあ

るものを感づいてはいなかったのだが——そのために彼は、この世から消されてしまった。……」

脇坂さんは、またアクビをした。ぼくはひとりでつづけた。

「青沼さんは、そんなことを誰からきいたのだろう？　それは奥さんからだ。奥さんは、この黒いノートを読んで、ここにかいてあることだけは知っていたのだ。だから、奥さんは、青沼さんのみならず、ほかのだれかにもしゃべったかもしれない。そのために、ひょっとしたら、彼女が月賦屋の二階からおちたのも……」

私は、ふるえあがった。

「ほんとうは、彼女は何も知りはしなかった。それまでの、刈部夫人の事件、津田の事件について、その真相を知らないからこそ、ほかのだれかにしゃべったのだ。だが、津田はなぜ殺されたのだろう？　刈部夫人はなぜ被害を受けたのだろう？　わからない。……ぼくにはわからない。——」

「あなた、何をそんなにコーフンしてるんです？」

「脇坂さん、あなたはこれを読んで、昂奮しないのですか？」

「……ぼくは、現実に起ったことには、何もコーフンを感じない」

と、この木の根ッこみたいにひからびた哲人はいった。こんどは、私がキョトンと彼の顔を

みた。

「どういうんです、あなたは？」

「ぼくは、活字か写真じゃないと、なんの興味も起りません。小説や映画で泣いたりこわがったりするけれど、現実には何も泣くほどのことはないし、こわがるほどのこともない。活字か写真にうつし出された女性には性欲をかんじるけれど、現実の女性をみても全然食欲をおぼえないんです。食欲といえば、ぼくは、名物、珍味、うまいものの案内記が好きでね、ここに何十冊も買ってあるが、実際にそのものをくっていちども感服したことがない。旅行もしかり、どこにいったって、少なくとも日本に関するかぎり、おなじような山があり、畑があり、どこかで見たような人間が、おなじようなことをしゃべったり、おなじようなことをしてうごいたりしている。その失望があるから、ここにこうしてじっとしている方がマシだと思うようになったんです。女もいまいったように、おなじことでね、現実に性交して、魂が重力圏外に飛んだり、水爆的爆発状態になんかなったことがない。エロ小説を読んだ方が、よっぽどコーフンしますよ。……」

「あなたは、例外ですよ。特別ですよ。……」

「と、じぶんで思って、こうしてひきこもってる次第ですがね。しかし、案外ぼくとおなじような人間は世の中に多いんじゃないか？　とにかく飯をくいながら読む、便所でも読む、電車

でも読む。……だんだん活字の世界だけで満足し、活字の世界じゃないと満足しない連中がふえてゆくんじゃないでしょうか？」

「まさか？」

「まさかって、たとえばあなただって、映画や芝居をみて、ジンワリと涙をうかべることはあるでしょう。しかし、隣人のぼくが下顎骨脱臼とか腸ネンテンでも起して七転八倒しても、あなた、同情してくれますか？」

「脇坂さん、これは冗談をいってる場合じゃない。……このアパートの中の人々が何人も殺された事件なんですよ！　それにあなたは、関心がないのですか？」

「ない。……電車にのる、銀座をあるく、映画館に入る、どこにいっても、夜、昼、ウジャウジャと人間がいる。あの連中が、このぼくの一生になんの関係があるのか？　このアパートの住人だって、それと何にも変りませんよ。……誰が死のうと、誰が殺されようと――」

〝誰が殺そうと〟――それが問題なのだ、と私は思った。しかし私はもはやこの男に何も話す気にもなれず、また立ちあがる気力も失せて、そこにボンヤリと坐っていた。すると脇坂さんは、急にへんに眼をひからせてしゃべり出した。

「だいたい、人間ってものは、内心だれもが人間を殺したがっているんですよ。……」

4

「何を妙な顔してるんです？　ほら、このノートの中で、座光寺君もいってるじゃあありませんか。美談ばかりでうずめたら、だれもがたいくつして、新聞は買わんでしょう、人殺しの記事がないと、新聞はおもしろくない、とね。真実です。殺人保険業者なるがゆえの発言ではなく、誰もがたしかに人殺しの記事をおもしろがる。――」

「おもしろがる？　こわがるんじゃありませんか？」

「不快な恐怖じゃないですよ。その記事について語り合うとき、人々は快感にちかい生き生きした眼をしていますよ。なぜだろう？」

「それは――」

「いろいろと理屈はつけられるでしょう、スリルとか、刺戟とか……しかし、どれもが、同語反復で、根本的な説明にはなりません。それより、人間ってえものは、だれもが人間を殺したがっているのだ、だから人が人を殺す話を、じぶんのこの欲望の代償として、瀉泄(しゃせつ)の快味をおぼえるのだ、といった方がすべてを解きます」

「へえ、なぜ人間は人間を殺したがっているんです？」

「それは、たとえば、あなた、ぼく、誰でもよろしい、ひとりの人間がここに存在するまでに、

父、祖父、徳川時代から戦国時代、ずうっとさかのぼって原始時代、いやそれ以前から、ほとんど無数といっていい祖先がつながっているでしょう。彼らが生きてきたからこそ、われわれがここにいるわけです。が、彼らが生きるために、食欲と性欲を満足させるために、どれだけ猛烈な争闘をしてきたか、人間の最大の敵が野獣ではなく人間だということになってから、もう何万年か何十万年かになるでしょう。その結果、どんなに多くの敵や仲間を殺してきたか、その数は実に尨大なものだとは思いませんか？　その期間は無限にながく、その争闘は必死のものでしたから、その行為に対する欲望、快感は、われわれ子孫の血のなかにつたえられている。いわば殺人染色体ともいうべきものが、われわれの精虫や卵子にコビリついている。それが殺人の話に歓喜の声をあげるのだとは思いませんか？」

　私はだまっていた。胸におぼえがあるから、抗議はできなかった。

「小さな殺人ばかりじゃない、戦争というものがそうなんです。戦争という言葉、行為に人間がかんじる壮快さは、誰もがもつ殺人染色体のせいなんです。だから、人間が人間を殺すなんて……特別のものじゃない、それほどコーフンしなくたっていいんです」

　彼は妙にやさしい眼で私を見た。

「しかし、なんですな、この世の中は、いくら大学がふえてみんな利口になっても、養老保険が出来ても、錯覚による殺人もあれば、怠慢による殺人もある。出来心なんて妙なものによる

犯罪もあれば、善意による犯罪すらある。そのうえ、誰もが、殺人染色体という本能悪といおうか遺伝悪といおうか、恐ろしいものを持っている。探偵小説では、殺人鬼というものを登場させることをきらいますがね、実際に、この世の中には殺人鬼というものが相当数存在するんです。たとえば、津田君のような……先天的な、本人もどうすることもできない怪物がいるんです。これらの犯罪には、教育も刑罰も、なんのききめもない。地上天国なんて、永遠に夢ですな。……だから、あなた、ここにじっとしていらっしゃい。ぼくのように、活字の中の女を愛し、活字の中の珍味を味わいなさい。活字は殺すことができず、殺される心配もありません。その方が、安全で、賢明です。……」

「あなたは……恋をしたことはないのですか？　現実の女性に」

　と、私はかすれた声でいった。脇坂さんはじっと私を見つめた。空気が風船からもれるように、小さな声でいった。

「実は、あります」

「へえ、そ、それは、どんな――」

「あなたの恋したのと、おなじ女性。――」

「えっ」

　私はピョコンと立ちあがった。脇坂さんは、弱々しい、恥ずかしげな微笑をうかべて、

「彼女は……この世のものではありません。あんな女性にマトモに恋すれば、あなたのような悲劇が起るのは当然です。あなたは、天罰をうけたのです。ぼくはここで、彼女の衣ずれの音、小さな歌声、やさしい呼吸をきき、そのきよらかな眼と唇と手足を想像しつつ……ここでエロ小説を読むのです。それなら、生命に別状はない。……」

そして、この愚かしさの至境に到達した哲人は、溜息をついていうのだった。

「ほんとうをいうと、ぼくがこの部屋にとじこもってすべて満足しているのは、活字じゃあなく、隣室に彼女がいるせいかもしれません」

私はうなだれて、扉をあけて、外に出た。

5

廊下に出て、三歩あるいて、私は顔をあげた。私の背にゾーッと名状しがたい感動と戦慄(せんりつ)がはしった。

十一号室の扉に手をかけていた志賀悠子さんがふりむいた。大きく見ひらかれたその眼にも、異様な衝動がかがやき出すのがみえた。

「……かえっていらっしゃったのね」

と、彼女は、おさえた声でいった。

「何年になりますかしら？　あれから。……」

「ええ、ぼくの部屋にも、何代か、いろんな人が移り住んだらしいですね。……」

「あなた、ずいぶんお老けになったわね」

「四号室の津田君が殺され、十五号室の椎名さんが警察にひかれ、八号室の青沼夫妻が殺され、十四号室の座光寺君が殺された。……」

志賀さんは、じっとぼくの顔をみた。ふたりの問答がくいちがっていることに気がついたのである。志賀さんは、その後のぼくの運命をきこうとし、ぼくは執拗にその後の人間荘の春秋についてきこうとした。

「あなた。——」

と、彼女はやさしくいった。

「だしぬけに、妙なことをおっしゃるわね。津田さんも、青沼さん御夫婦も殺されたんじゃありませんよ。座光寺さんも、犬に……」

「まあ、土肥さんが、なぜ？」

「座光寺君を犬に殺させたのは、ぼくの前住者土肥さんだったのです」

「土肥さんが、奥さんを殺したことを座光寺君に知られたと思って——その実、座光寺君はそんなことは知らず、知っていたのは青沼さんが殺されたということだけだったのです。青沼さ

んを殺した奴が、座光寺君の私立探偵ぶりに恐怖して、たくみに土肥さんに座光寺君を消滅させたのです」
「青沼さんが殺された？　誰に、なぜ？」
「なぜというおたずねだけにこたえましょう。青沼さんが奥さんに、津田君や山名君の死の秘密をきいたと思われたから。……そのために、青沼夫人も殺されたのではないかと思われるふしがあります」
「津田さんの死の秘密？」
「津田君は、碧洋荘の窓からおちて、下の石にあたまをぶっつけたのではなく、窓からとびおりたとき、三階からなげおとされた石にあたまを割られたのでした。あのとき、津田君が窓からとび出すことは、犯人は事前に知っていました。……仁木君からきいて」
志賀さんは、聖女の仮面のように無表情に、美しく私を凝視していた。やがて、言った。
「そうです。そしてあなたは、青沼君が津軽海峡で殺されたとき、このアパートを留守にしていらっした」
「碧洋荘の三階にいたのはあたしです」
恐ろしい沈黙の数分が、アパートの廊下にすぎた。
「あなたは、なぜ津田が殺されたか御存じですか？」

「それがわかりません。……ただ彼は殺人鬼毛利松吉の血をうけた人間であり、……あなたは、聖女でした」
「あたしも、毛利の娘です」
私は電撃されたようであった。
「津田は、あたしの義理の兄弟でした」
と、志賀嬢はかわいた声でいった。
「もっとも、母はちがいます。母は……貴族でした。あたしを生むまえから未亡人でした。毛利松吉に犯されたのです。けれど……あたしが少女になってからも、毛利とつき合っていました。あたしは、いくども気高い母が毛利の血なまぐさい腕のなかで、よろこびにもだえ狂う姿を見ました。その毛利が死刑になったという記事をみて、あたしは刑務所をたずね、あらためてその罪の履歴をしらべてもらって、そして、四号室の津田が彼の子供であることを知ったのです。津田はあたしの兄弟でした。けれど、あたしは彼を殺さずにはいられませんでした！」
私は、声もなかった。
「それは……あたしの血をのろい、血をにくみ、それをかくそうとするための殺人だったのでしょうか？　それ以後の殺人も、殺人の罪をけすための殺人だったでしょうか？　いいえ、そうじゃない、今にして思えば、みんなあたしの血のした業なのです。あたしは殺人鬼の娘、悪

の化身だったのです。そうでなければ、あの可哀そうな椎名さんを密告するなどということができたわけはありません。……もっとも、あの関さんの娘さんが、ほんとうに椎名さんの奥さんだったことはあたしも知りませんでした。あれは、ただ悪意にみちたいたずらのつもりであったのです。……」

志賀さんの顔がしだいしだいに変ってきた。眼が妖しいひかりをたたえ、頬が酔ったようにぼうっと染まり、唇がぬれてひかってきた。私は彼女の話はもとより、その変貌ぶりに妖怪をみるような恐怖にうたれた。

「あなた……あなたは、どうして山名さんを殺したの？」

と彼女はかがやく眼で私を見た。私はながいあいだだまっていた。やがて押し殺されたような声でいった。

「ぼくはあなたが好きでした。山名さんのさがしているひとがあなたとすれば……あなたがきっと不幸になるような気がしたのです」

こんどは志賀さんがだまりこんだ。それから、のどをあげてけたたましく笑い出した。このひととして、いままできいたこともない女獣のような笑い声であった。

「あなたは、あたしの職業を何だと思います？」

「……幼稚園の保母でしょう？」

「いいえ、淫売婦です！」

「……」

「仕事場は、あの白鳥ホテルでした。あたしは、あなたと刈部さんの奥さんのあいびきを、そこで見ました。刈部さんの奥さんはそのために……」

彼女は急にだまって、深沈たる眼の中にぼくを吸いよせた。

「あたしも、あなたが好きだったのですわ。……」

この刹那、ぼくは何もかも忘れて、あやうく彼女の足もとにひざまずくところだった。ぼくは、ここを出てから、さまざまな苦しい人生をわたってきた。そして、疲れはてて、ふたたび彼女という聖なる灯をしたってかえってきたのだ。けれど、けれど、けれど、ああ！

エピローグ

「あたしは死神です」

志賀さんはちかよってきた。そして、ぼくのくびに腕をまきつけ、接吻した。そしてしずかにぼくの口の中へ舌をさしいれた。おお、なんたるなまめかしい吐息の芳香であったろう。……そのまま、彼女はささやいた。

「あなた……あなたは、いまおっしゃったようなこと、だれにおききになりまして？」

「……」
「脇坂さんでしょ？」
「……」
「あのひとが黴くさい本のなかで考えたことね？　そして、それをあなたに教えてくれたのね？」
ちがう、ちがう、あいつは世の中でこれ以上はない愚物だ、廃人だ！　とぼくはさけぼうとしたが声は出なかった。
唇ははなれ、彼女はあるき出し、十号室の扉に手をかけた。
ぼくの頭髪は逆立った。
「やめて下さい！　あの男は……殺すにもあたらない！」
しかし、彼女は扉をひらいた。
そのとたん、中で身の毛もよだつ悲鳴がきこえた。扉をひらいたまま立ちすくんだ志賀さんの表情から私はそこで何事が起ったかを知った。
あれだ！　あの廃物野郎は、私の出たあと、また濃硝酸のフラスコを天井に吊るして、ベッドに寝っころがっていたにちがいないのだ！
が、こちらにもの問いたげにふりむいた志賀さんを見た瞬間、私はさけばざるを得なかった。

「その男は……死にたがっていたんです！　あなたの罪じゃない」
「そう、それでは、あたしが生かしてあげましょう」
「——え？」
「あなたは、あたしのところへもどってきましたね。なんのために？」
「——あなたに救ってもらおうと思って」
「それじゃあ、あたしが人を救うこともできる女だということを見て下さい」
そして志賀さんは十号室に入って、扉をしめた。中で鍵をかける音がきこえた。
それから十号室で何が行われたか。どんな光景が展開されたか、私は知らなかった。——が、その中から数分して、異様な男と女の声がきこえはじめた。骨髄からしぼり出されるような男のあえぎ、そして、あの刈部夫人の声など虫の羽音のように思い出される兇暴きわまる女のうめき声だった。
また数分すぎた。
扉がひらいて、脇坂さんが出てきた。いや、それは——頭髪はくずれおち、眉も鼻も口も真っ赤にくずれた化け物だった。
そいつがぼくを、そこだけ白くひかる眼でじっとながめ、ケタケタと笑った。
「君！　……この世は生きるに値するね！」

そういうと、彼は歓喜と陶酔にみちた足どりで、大股に階段の方へあるいていった。ぼくは茫然として、閉じられた十号室の扉をながめやった。が、その扉がふたたびひらかれようとするのをみると、あわててとびついた。

扉はうごく。死物狂いにおさえつける。この淫らな死神を、ふたたび出現させたら私はどうなるか。恐怖と恋しさにもだえる私を、人間荘の闇がつつみ、しだいに私の力は萎えてきた。扉はジリジリと、しずかにひらいてくる。……

解説

長谷部史親（はせべふみちか）（文芸評論家）

本書『誰にもできる殺人』は、『十三角関係』（本文庫既刊）や『夜よりほかに聴くものもなし』同近刊）などとともに、山田風太郎の現代ミステリーの代表作のひとつである。あたかも連作短篇のように読み進めることができると同時に、全体を通しての卓抜な仕掛けが用意されており、その構成の妙は読者の胸に鮮やかな印象を刻み込む。

そもそも舞台となっているのは、何と「人間荘」と名づけられた木造アパートであり、多くの人々の欲望の入り交じる世界が、読み始めるやいなや繰り広げられてゆきそうな予感を与えてくれる。なおかつ、そうした期待は裏切られることがない。だがそれにしても、なぜ「人間荘」などという名前がついているのであろうか。周到にも作者は、冒頭に次のような一節を設けて、簡単な説明を加えている。

だれが、こんな——平凡すぎて、あまりにも意味ふかい名をつけたのか。それにしては、

これは貧しい、わびしい場末のアパートであった。おそらく、戦後まもなく作られた安普請であろう。外の板壁にぬった青ペンキはまだらに剝げおちて、枯葉をあちこちにコビリつかせたまま、腐ったような色をしていた。

そして「玄関ともいえない玄関」を入ると、廊下をはさんで左側に五つ、右側に二つの部屋があり、その奥に便所と炊事場と二階に上る階段があるという。一階が七室なのに対して二階には、一階の便所と炊事場の真上にもそれぞれ部屋が作られているため九室である。つまり全十六世帯が、一か所のトイレと炊事場を共同使用していたのであった。

本書の物語の時代背景は、たぶん昭和二十年代末から三十年代初頭であろう。今から四十年あまり前のことである。私の記憶では、少なくとも昭和四十年代までの学生下宿は、炊事場までが共同だったかどうかはともかく、概ねこんな構造のものが多かった。たとえ安普請でも木造建築は意外に長持ちするので、現在でも探せば見つかるかもしれない。

余談ながら、庶民の生活感覚の原点である共同住宅の様相は、世相を如実に反映する。主に首都圏に焦点を合わせるなら、太平洋戦争の痛手から復興し始めた時期と、高度経済成長を経験した昭和四十年代とでは、建築設計の基本理念が明らかに違う。かつてアパートには風呂などないのが普通だったのに、新しく建てられたものほど、キッチン設備はおろか戸別にバス・

トイレが付いているのが常識となってきた。

こうした経緯のせいで、いわゆる町の銭湯が営業不振の末に、廃業に追い込まれた例が少なくないらしい。だがおよそどんな業種でも、社会の変遷に伴って需要が減少すれば、淘汰されるのは世のならいである。そう考えると、銭湯をサロンにたとえる日本固有の文化が衰退へ向かったのを、ことさらに嘆くのは時代錯誤の迷妄ともいえよう。しかるに現代の学生が、むろん全部ではないにせよ、オートロック付きの高級マンションに〝下宿〟しているなどという話を聞くにつけ、隔世の感を抱かざるをえない。

ともあれ本書『誰にもできる殺人』で描き出される「人間荘」は、戦争に敗れてからまだ日が浅かった日本の庶民層が、豊かな物質文明の恩恵を享受する少し前の雰囲気を今に伝えてくれる。すでにTVの本放送が始まっていたにもかかわらず、受像機はほとんど普及していなかった。電気冷蔵庫や電気釜など、家庭電化製品を保有していたのも少数派である。戦前からのラジオ受信機ですら、持っていない人が少なくなかった。

そんな「人間荘」の十二号室が空き、新たな住人が引っ越してきたことによって、本書の物語は幕を開ける。この住人は、部屋の押入れの奥の壁と柱の隙間に、一冊の黒い厚いノートブックが隠されているのを見つけた。それは、その部屋の代々の住人が書き継いできた人間観察の記録であり、さらに忌まわしい犯罪の記録でもあることが判明する。

このノートブックに「第一の間借人」として登場するのは、若い勤労学生であった。彼は間もなく、隣の十一号室に住む志賀悠子という女性に心をひかれてゆく。その一方、十三号室に住む山名という目の不自由な人物が、戦争のせいで生き別れた恋人を探しているという話を耳にする。山名は、このアパートの中で恋人の声を聞いたと主張するが、自分の目で確認することはできないし、相手は名前を変えているようであった。

十二号室の新たな住人である学生は、山名の恋人が誰なのかをつきとめようとする。そうするうちに、この学生はアパート住民の一人である人妻と密通し、さらにその人妻が何者かに石で殴られて入院してしまった。学生は、山名の探している相手というのが、実は志賀悠子なのではあるまいかと考え、山名に対する嫉妬めいた感情から殺意をつのらせるに至った。彼は階段の手摺りに細工を施し、山名を転落死させる。ところがその直後に、自分の推測が間違いだったことに気づき、淋しくアパートを去って行った。

問題のノートブックは、第二の住人へと受け継がれる。彼は、刑務所から出たばかりの前科者であった。彼は隣室の志賀悠子の清らかな美しさに反感を覚え、事件を起こして慌てさせてやろうともくろむ。特殊な立地条件をもつ温泉旅館を思い出した彼は、顔に見覚えのある気がする四号室の津田を、不慮の事故に偽装して殺す巧妙な計画を立てた。

彼はまず、自分の情婦を津田に接近させて、くだんの温泉旅館に誘い出すことに成功する。

その場に踏み込んで津田を死に追いやるのは彼自身ではなく、同じアパートの十六号室に住む仁木の役割のはずであった。ところが予期せぬ手ちがいが生じ、彼は殺人犯として逮捕されそうになってしまう。そのとき、なぜか同じ旅館に逗留していた志賀悠子が、彼のアリバイを証明してくれたおかげで助かり、彼もまたアパートを去ってゆく。

かくして黒いノートブックは、十二号室の第三の住人に受け継がれた。そして第六の住人に至るまで各々の手記が順々に書き込まれ、そのたびに何らかの犯罪が発生する。それぞれの詳細については本文に譲り、ここでは改めて繰り返さない。ただ物語の終わり近くで、個々の事件を振り返りつつ本質に迫った箇所があるので、その記述に基づいて簡単に整理してみることにしよう。

そもそも第一の間借人の場合は「錯覚」による殺人であり、第二の間借人の事件は「出来心」による殺人であった。また第三の間借人である女性は「善意」による犯罪を引き起こし、第四の間借人である職工の犯罪は「怠慢」に起因する。そして第五の間借人は「正当防衛」による殺人を犯し、第六の間借人は過去の事件をかぎつけた人物の口を封じるため相手を殺して去って行く。だがその背後には、恐るべき真実が潜んでいたのである。

ちなみに『誰にもできる殺人』は、昭和三十三年一月から六月にかけて『講談倶楽部』に連載された。ひとつのアパートを舞台に、その住人たちの間で起きた犯罪連鎖を描いており、一

話ずつ完結した連載短篇のように見せかけつつ、最初の方でも記したように、最後に全体を貫く絶妙な仕掛けを用意して一本の長篇に仕立て上げている。

　山田風太郎作品には、他にも『妖異金瓶梅』『夜よりほかに聴くものもなし』など、連鎖的に物語が展開してゆくものが少なくない。こうした発想について作者は「あれは雑誌社の都合なんですよ。読切を欲するわけです、完全な連載じゃなくて……その号で読めるものをね」と語ったことがある。むろん書き下ろしは別だが、雑誌連載の場合は、発表先の要請に応じて読切短篇を連ねた形をとりながら、実は長篇としての趣向を潜めた点で、変幻自在の小説手法と呼ぶことができるのではなかろうか。

　したがって本書『誰にもできる殺人』は、きわめて技巧的に構築されたミステリーであり、いわゆるパズル小説の面白さも存分に期待できる。結末には不思議な味わいがあり、解釈によってはホラー小説の怖さといえよう。これは化物や幽霊などの怖さに通じるが、さらに人間そのものの怖さにもつながる。いみじくも「人間荘」と名づけられたアパートの住人として登場する面々は、意図的に歪曲され戯画化されているけれども、彼らの言動は、われわれの日常生活の一面と重ね合わせると、必ずしも絵空事とはいいきれない。

　もちろん現実には、同じアパートの中だけで、こんなに犯罪事件が続けて起きるような状況は想像しにくいであろう。それでも、作為的に組み立てられた物語世界の枠の中ならば、さほ

どの無理は感じられない。非現実性にさえリアリティを与える説得力こそ、山田風太郎作品の魔力というべきであろうか。

　本書の面白さは、角度を変えて眺めると、次のように敷衍することもできる。奇妙な人物がふんだんに登場し、それぞれ勝手なことを言ったり突飛な行動に走ったりするわけだが、随所に作者の思想や世界観の一端が披瀝されているのを見逃すことはできない。人間の一生は遺伝や環境に支配されるのか、教育によって矯正されうるのかといった問題に始まり、ときに間借人の一人が「歌舞伎の一等席が百円くらいになったら、名流夫人がいまのように押しかけるかどうか」などと皮肉まじりにノートに書いたりする。いろいろな意見が乱れ飛ぶ中に、真理の断片がちりばめられているのを読み取るのも一興であろう。

本作品は、東京文藝社版（昭和四十二年三月刊）を底本としました。

〔お断り〕
本作品中には、今日ではいささか不適当と思われる用語が使用されておりますが、作品が書かれた時代背景等を考慮し、概ね発表当時のままとしました。御理解頂きますようお願いいたします。（編集部）

誰にもできる殺人

著　者　山田風太郎
発行者　櫻井道弘
発行所　廣済堂出版
〒105　東京都港区芝3-4-12
電話　03(5445)1202(営業)
電話　03(5445)1204(編集)
振替　00180-0-164137
印刷所　廣済堂印刷株式会社
〈編集担当〉伊藤秋夫

定価は、カバーに明示してあります。
落丁・乱丁本はお取替えいたします。
ISBN4-331-60532-9 C0193